

霞学区

福山空襲・戦争体験証言集



遺構

落合煙草店の北側から道三川にかけて、「三尺幅ぐらいの小溝」があったと、福山空襲の記録に書かれています。この百メートルあるかないかの距離に、十余名の方々が亡くなりました。今は大半が埋められましたが、道三川に合流するあたりだけがコンクリートで覆われ、暗渠（あんきょ）として残っています。

2017年（平成29年）3月
霞学区まちづくり推進委員会 編

霞学区

福山空襲・戦争体験証言集の発刊に寄せて

戦争が終わってから既に四十年

私も当時の母の年齢をこえました。

あの頃の記憶もだんだん遠くなって

知らない世代の方が大半を占めるようになって

戦争のことなどほとんど無関心とも言える時代になりました。

自由な時代をはきちがえて勝手気儘な生き方も横行しています。

焼夷弾の下で必死に皆がかばいあって逃れたあの恐ろしい体験は

もう二度と子供や孫の時代にあってははいけません。

あの生々しい記憶があるだけに

今の平和が本当にありがたいと思い

大切にしていかなければと思います。

これは、「続 福山空襲の記録」に掲載されている「母の年齢を越えた今」と題された高山シズ子さんの作品の最後の文章です。この本が発行されたのは戦争が終わって40年たった1985年（昭和60年）のこと。そして今、あの忌まわしい出来事から、実に72年の歳月が経とうとしています。

「福山空襲の記録」や「続 福山空襲の記録」に登場された方々の多くはすでに鬼籍に入り、当時、まだ幼く記憶も定かでなかった皆様も今や相当の年齢になられています。しかし幾星霜を経ようとも、記憶の底に眠る悲しみや慟哭は、決して薄れることはないものと推察します。

こうした状況の推移をふまえ、霞学区まちづくり推進委員会では、あらためて戦争体験を紡ぎ、貴重な体験を次世代に伝えるため、現在、霞学区にお住まいの方を中心とした証言集を編集することとしました。

登場する方々は、もしかしたら、あなたの血縁の方かもしれません。あるいは、すぐご近所にお住みだった方かもしれません。そういった身近な方々の筆舌に尽くしがたい苦労を改めて共有することにこそ、大きな意味があるものと確信しています。

2017年（平成29年）3月

霞学区まちづくり推進委員会

目次

第1章	記録集から	
1	「福山空襲の記録」手記篇	…… 1
2	「続福山空襲の記録」手記篇	…… 19
第2章	Piece for Peace ～戦争の記憶を繋ぐ～から	
1	「福山が燃えた日」リレートーク	…… 49
2	「福山が燃えた日」追加聞き取り	…… 54
3	霞国民学校初等科訓導	…… 61
4	シベリア抑留の話	…… 63
第3章	戦災と古野上町	…… 73
第4章	寄稿など	
1	妹の手	…… 80
2	福山空襲と平和教育	…… 81
3	久留米49連隊入隊 終戦から復員	…… 82
4	女子挺身隊の手紙（遺書）	…… 83
5	私が小さかったころ	…… 85
6	厚生団子とすいとん	…… 89

第1章 記録集から

はじめに

ここに掲載した作品は、「福山空襲を記録する会」が編集発行した「福山空襲の記録」「続福山空襲の記録」から、霞学区関係分を抜粋あるいは抜き書きしたものです。掲載にあたっては「福山空襲を記録する会（代表 岡田智晶）」の許可を得ています。表記はできるかぎり原文のとおりとしましたが、誤植や明らかな誤字脱字等は修正しました。登場する個人名や地名についても原則、原文のとおりですが、人権を配慮し一部割愛した部分もあります。また紙面の都合で割愛したものもあります。

1 「福山空襲の記録」手記篇

無惨の死者達（聞き書き）

宇井 みや子（野上町二丁目 当時 三菱電機勤務 二十九歳）

あの頃、私は霞町へ住み、三菱第三工場（現・広大¹）へ勤務し爆弾投下器のスイッチをつくっていました。父母と私の三人住まいです。

八月八日の晩、私は警戒警報が鳴るや、父母に瀬戸へ避難するよう告げ、直ちに会社へかけつけました。会社の門をくぐり、壕へ入って出勤の名前をかき、表へ出ると、すぐゴーという爆音が聞こえ、黒い機体のB29が、編隊を組んで、川口方面から続々とやってきました。それは実に見事なもので、私たちは防空壕にも入らず、バケツをもったまましばしみとれているほどでした。

やがて、どっちを見ても、真黒いなんともいえないものが落ち、それが中間ぐらいでパッと散り、同時に、ヒラヒラと木の葉のようにゆれながら落ちたと思うのもつかの間、焼夷弾がまるで花火のようにシュー、シューとあちこちに投下されました。

三菱へは、まず表門に三発落ち、たちまち青白い炎をあげたものの、すぐさま、守衛さんが消し止めました。その頃、現場では、担当区域をきめて護りについていましたが、私の担当区域の棟では、友長伍長さんの机の上に、焼夷弾が屋根を突きやぶって落ちました。しかし、何分にも周囲は全部金属類で、燃える物がなく助かったのです。

間もなく、隣の兵舎が燃えはじめ、豚や、山羊や、鶏などのかな切り声の悲鳴がしきりに聞こえていました。燃える兵舎にはかまわず、高射砲で応戦していたものが青い火・赤い火がピイピイと飛んでいき、確かにあたったように見えるのですが、B29はいぜんとして編隊をくずさずに、来襲した方向へ、ゆうゆうと引き上げ

¹現在の緑町

ていきました。

やれやれようやくおさまったと思いながら北方を見ると、お城が真赤になって燃え上っているのです。すぐ、私たちの監督の清瀬中尉に知らせました。天守閣が、お城の姿そのままの格好で、紅蓮の炎に包まれながら、天をもこがすが如く燃え上がり同時に、火の粉が落花の如く舞い降りてくるのです。もう二人とも、ただしばしぼうぜんとみとれているだけでした。やがて、遂にむなしくくずれ落ちるときには、ドオーという轟然たる地響きを感じました。その状況たるや、とうてい、筆舌に尽くせぬ有様でした。

さて、私はなんととっても年寄りをおいて会社へかけつけていますので、父母のことが心配でなりません。

夜があけると同時に、会社をぬけだし、遠回りをしながら自宅へ行こうとしますが、何分にも熱くて入れません。やむなく会社へひき返し、その夕方まちかの頃、やっとがまんして、霞町と古野上町の角の交番あたりまできましたが、そこから先はもうどうしても入れません。

ふとみると、焼けこげた電信柱の下へ、馬が一頭あおむけに倒れ、腹部からは、油のようなものをタラタラながしながら死んでいるのです。

やむなく、地吹町のメッポー飲食店（現・早川酒店）まで引き返すと……当時はそこへ泉龍寺を通り、ドンドン川へつながる川が流れていたのですが、橋の下や、道ばたに防空頭巾をかぶった人がいっぱい倒れていました。直撃弾でザクロのようにはじけて死んでいる人、半こげの人など、さまざまでしたが、なかでもキセルを腰にさした老人が、三才くらいと思える孫を抱きしめて橋の下で息たえている姿は、なんともあわれでなりませんでした。ここでメッポーの奥さんもなくなられたとか聞いています。しかし一般には、男性が多いようでした。

私はこうした状況を見るにつけ、ますます父母の事が心配でなりません。少しでも早く父母の許へと、はやる心をおさえながら、土手を通り、神島橋まで来ると、全く偶然にも、父母が避難している親せきの者が私の事を心配して橋のところまで出ているのとバッタリ出会い「両親は無事だから安心せよ」とのことで、そのまま一緒に瀬戸へ避難しました。

こうして、翌日からしばらくの間、瀬戸から通勤しました。その通勤の往復の二～三日の間に、兵営などから工業学校の救護所へ、大八車などで手当てを受けに行く人をいろいろ見かけました。私の数えているだけでも二十一人います。その中、三人くらいが一般の人で、あとは兵隊さんではなかったかと思います。直撃を受け、断末魔の叫び声をあげている人、片足を失った人、首のあたりをやられた人、目をやられた人などなど、苦しみがいている人々の姿が、いまだに脳裏に焼きついてはなれません。

もしや、知人でもおられはしないかと、工業学校の救護所へ行くと、何十いや何百人でしょうか、たくさんの人々が枕をならべて、応急手当てを受けながら、うめ

き苦しんでおられました。子供たちもたくさんいました。その中に、可愛らしい顔をした兄弟二人が並んで横たわっており、まだ小学校へ入学したか、しないかと思える幼い弟が、まるで消え入るような声で「兄ちゃん、水、水」とせがむと、4年生か5年生かと思える兄が「水はない、もうチョットしんぼうせえ」と言うのです。それでも弟は繰り返し「兄ちゃん、水が飲みたい」と頼むのです。聞けば、一日中、ああやって同じことをくり返しているとのこと……。親と離ればなれになったのでしょうか、どこの子かわからないとのことで、ふびんでなりません。みれば、弟は背中に傷を受け、背骨がみえており、兄は両うでから両手にかけてぐるぐるまきにほうたいをしております。

十日夕方、会社の帰り、まだブスブスくすぼる中を、福德町の友だちの安否をたずねていきました。友だちは無事でしたが、大勝館（現・グリーン劇場²）の前の大きな防火用水に、たくさんの人々がようやくのがれてきたものの、すでに周囲は火の海と化していたのでしょうか、熱さにたまりかねて、次から次へと防火用水の中へ折り重なって倒れこみ、亡くなっているのです。その有様は誠に悲惨を極めまさに、地獄絵そのものでした。ここでは一般に、女性の人が多かったと思います。しかし、戦時下のためか恐ろしいことに、私はほとんど無感動でした。

やがて御門町へ出ると、若い母親が乳のみ子を抱き、乳房をくわえさせたまま、まるで赤ん坊を守るが如く、その上へはぶさってなくなっていました。母親の背中では真黒に焼けただれていましたが、せめて子供だけはの一念でしょうか。子供の方は無傷のままなくなっていました。これまでのはりつめていた気持ちがいつにゆるみ、涙をおさえることができず、思わず念仏を唱えました。

こういうわけで、結局、三菱第一工場（現・天満屋）、三菱第二工場（郵便局、本局付近）及び社宅（紅葉町付近）はまる焼けとなり、工員さんもなくなれた人があるように聞いていますが、第三工場は無事だったのです。このため、戦後しばらくは、工場の焼け跡の跡片づけと復興に努力しました。なお、第三工場付近には兵舎の訓練場があり、これは、船舶機関砲連隊がいたようです。

戦後、二十年十一月のはじめ、霞町へ帰り、やっと掘っ立て小屋をつくりましたが、付近は誰も帰っている人がなく、福山駅での話し声でさえ、聞こえてくるような状況でした。雨がしとしとと降る晩など、雨のトタン屋根に落ちるのを聞きながら、眠れぬ一夜をあかしたこともあります。

どうにかの本普請は十一月の中旬で、藁屋根でした。それでも表を通る人たちが、スズメの御殿のようだと言って通りました。まもなく、畠直さんが帰ってこられ、軍隊に行かれていた主人も帰られました。

考えてみますのに、どんなことがあっても、もう二度とこんなことがあってはいけなと、つくづく思います。

² 現在 飲食店

中霞町の情況と新たな戦災死没者

森田 与三郎（霞町二丁目 当時 薬局経営 五十二歳）

ふり返ってみますに、戦時体制が強まるにつれ、昭和十四年警防団が組織され、これにともない我々薬剤師も福山警察署長より警防団員を命ぜられ、さらに、昭和十九年には松村広島県知事より、福山市の防空業務従事令書を受けました。こうして、薬剤師会では、防毒班を結成し、自分は霞学区の防毒班長として、毒ガスの種類、性能・防衛・退避・救護等の指導訓練に当たりました。当時町内会長は、空襲があっても避難せず、消火に敢闘するよう達しを受け、たびたび市役所に会合しては対策を協議し、空襲のあった夜も、会合して帰り、間もなく空襲警報が発令され、敵機による焼夷弾攻撃がはじまったのです。

さて、第二次世界大戦も熾烈の度をますます加えた昭和二十年八月八日夜、福山市はB29焼夷弾攻撃の空襲を受け、一夜にして焼土と化し、我が家も全焼いたしました。当時、私は中霞町町内会と、霞学区の防毒班長を兼ねていましたので空襲を受けても逃げるに逃げられず、防衛と消火に当りつつも、町内の方にはやく避難するように懸命に呼び掛けました。しかしながら、何分にもバケツリレー消火では役に立たず、落ちくる焼夷弾下を右往左往して逃げ廻り、なつかしい福山城の焼け落ちるのを、無念の思いで眺めながらも、とにかく逃げるに一生懸命でした。すでに周囲は燃えており、妻は逃げられぬから「もう死んでもよい」と言い、倒れるのを必死に元気づけては引き起こし、命からがら明王院下まで避難しました。このさい、町内の防衛部長の杉之原治助さんは消火に努力されたため、逃げおくれて野上町にてたおれられ、また高木武市さんは地吹町荒神さまの横の畑で直撃弾を受けてたおれられ、さらに、北川駒太郎翁様は死んでもよいからこのまま逃げない、と我が家で頑張られ、遂に尊い犠牲者になられました。かえすがえすもお気の毒であり、残念でなりません。なお、西霞町との境の橋の下に三名がたおれ、ついで、裏の村上幼稚園出口の石橋の下には、真壁さんなど数名が退避したまま猛火に包まれ、逃げようにも逃げられず、折り重なって亡くなられた。誠にお気の毒で、当時の状況をおもいおこすに、私自身、いまなお傷痕で胸えぐられる思いです。こうして焼け跡の煙るなか、戦災翌日からは、焦土の跡片づけに、また、避難者への物資の配給等で復興に全力を注ぎました。（後略）

目撃者（三井さんの証言）

三井 澄子（霞町二丁目 当時 三菱電機女子挺身隊 十八才）

もう、三十年も昔のことですから、正確にお伝え出来ますかどうか……。当時、私は、挺身隊で、三菱に行って居ました。姉が病弱で、佐波に疎開させて居り、そこへ、毎日、姉の子供を連れて送り迎えをしてあげていたものですから、その夜も佐波に居ました。

大変な空襲で、福山の空は真赤、佐波の方々にも、焼夷弾が落ち、どうなることやらと思って居ました。

翌日、家が気になるので、早く帰宅しようと思ったのですが、熱くてまだ入れないということで、なかなか入れてもらえませんでした。両親はきめてあった通り、草戸の方へ避難しまして無事でした。昼ごろになって、やっと家の所まで来てみると、何とも、まあきれいさっぱり焼けてしまって何もなくて、ただ、商売用に倉庫に積んでいた練炭が、全部一斉に、カッカとおこっていました。真夏の昼でしょう、それに焼跡の熱気と、たくさんの練炭の火ですからねえ、熱いの何の、焦熱地獄といえいいんでしょうかね。

それで、亡くなられた人達のことなんですが、このあたりでは、かなりたくさんの方がなくなって居られました。記憶のあるのを拾ってみますと、㊤の箇所では、お琴のお師匠さんをなさってたとか聞いていたマカベ（マナベ？）さんのご一家、御夫婦と、子どもさん三人、それにたしかもう一人、男の人、人力車を引いて居られた人とか聞いていますが、その人達がずらりと、きれいに並んで座ったまま、仏さんになって居られました。マカベさんは、上の娘さんが当時三十才くらいでしたから、五・六十才くらいではなかったかと思います。御子息がお一人助かられたはずですが、現在どちらにいらっしゃるか存じません。

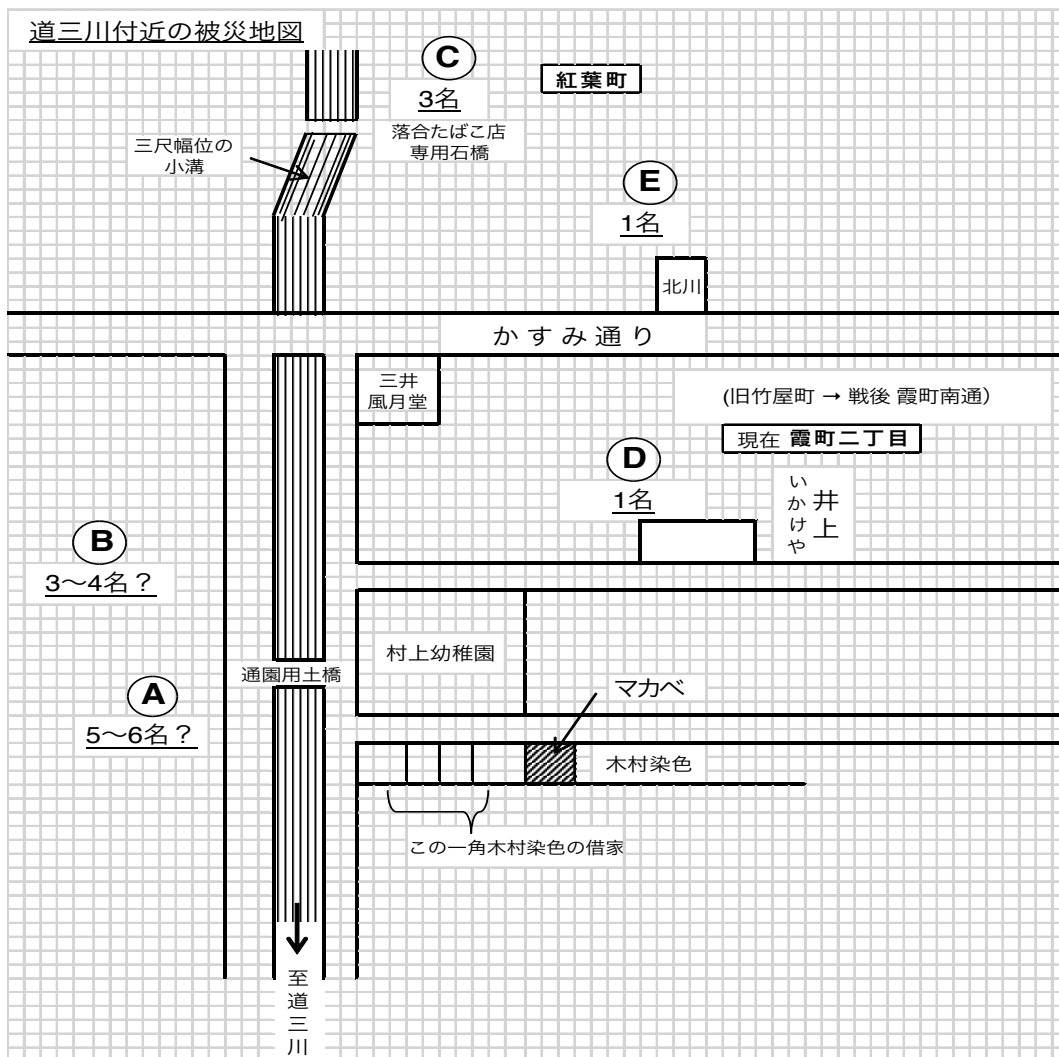
㊦のところでは、私が帰った時、すでに遺骸が引き上げられていて、何か、布か何かのようなもので、上を覆ってあったような気がします。三～四人くらいではなかったでしょうか。小さいお子さんを背負われた若いお母さんらしい人が、ポストンバッグを持ったまま、なくなっておられたと記憶しています。

㊧のところでは、男一人、女二人が発見されましたが、そのうちの女の方お一人は、すぐに見つかったのではなく、一ヶ月二ヶ月、もっとたっていたかもしれせん。ずっとあとになってから見つかりました。溝がつまって流れがわるいので、棒で通そうとされたら、出てこられたようです。もう、首は腐爛していたようですが、カスリのモンペの上下を着ておられてその胸に名札があったので、身元がわかったそうです。なんでも、遊園地のお近くの方だとかで、何とかおっしゃいましたが、そうそう、立石さん？だったかと思います。

④には、いかけやさんが住んで居られました。たしか井上さんと言ったと思います。八十才くらいのおばあちゃんがおられて、その方が、家の中で、なくなっておいででした。

⑤が、北川さん。お店を、下駄屋さんに貸されて、御自分は離れにお住まいでした。自宅の池の中でなくなっておられました。六十才くらいだったかと思いません。

戦後、このあたりでは、私の家が一番早く戻って来ました。私も娘時代のことで、もう遠い昔のような気がしますが、ほんとうに悲惨なことだったと思います。あの時の光景は、やっぱり残っています。



この図は「道三川付近の被災地図（福山空襲の記録）83頁」をもとに再作成したものです

霞国民学校 (1) 根石だけ残って

北川 俊一 (当時 霞国民学校勤務 三十四才)

私は昭和19年4月福山市立西国民学校から,霞国民学校に転任しました。

当時,先生も次々に,召集がかかり出征して行って,学校はだんだん女子の先生が,ふえていました。(中略)

私は,終戦当時,霞国民学校で六年男子組の担任で,その頃は,警戒警報,空襲警報がよく発令されており,どうしても机上の勉強の方は,うすくなり,体操等も銃剣術の練習や,女子の方も鉢巻をして竹槍の練習,救急法の練習が多くありました。

運動場は大半が芋畑となり,通路と一部集合場所を残す程度でした。鉄棒のある場所に沿って防空壕が掘られて,全校度々避難訓練をよくやったものです。一学期途中頃から,本土空襲の報も伝わり,段々警戒警報や,空襲警報が激しくなつて参りました。

大津野(今の日本鋼管の本部あたり)に曙部隊(上陸用舟艇の部隊)があつて,ここが初めて空襲された時,五,六機の敵機が襲来,次々に急降下して襲撃する様子を,この目で霞校の運動場からはじめて見ました。

食糧に乏しく,お米は軍の方へ優先で廻されるので,昼食等は,お米はおろかパンもありませんので,何か麦粕をこねたようなダンゴや芋を食べていました。

召集令状が来て出征される先生を送るのに,裁縫室で送別会,お酒もありませんでした。幹事がどこからかアルコールを手に入れて,湯でうすめて呑んでいました。当時軍用の燃料アルコールが大分呑まれていました。

霞校も食糧増産で田んぼを求めて,今の競馬場あたりを組別に分割して,芋や稲を植えていました。よく勤労作業で,先生も子供も巻脚絆(ゲートル)を脚に巻いて作業に出かけました。

宿直も一人でやっていたものを,三人くらいに増員して職員が泊っていました。

八月六日の広島空襲も何か広島がやられたそうだという程度で新聞もなし,通信機関も不十分で,その程度しかわかりませんでした。

八月七日は,私は児童を引率して,今日は朝から田んぼに石灰(酸性土壌中和)をまきに行くため,大八車に石灰を満載して,子供に引かせて,学級全員出かけました。

沖野上通り今の体育館の通り筋位まで行った時,午前九時~十時頃だったと思いますが,警戒警報発令から間なしに空襲警報,一斉に汽笛やサイレンが全市に鳴り響きました。

見上げると,既に東北の方向からB29が白色のすき透ったような色で青空にくっきりと二~三十機,見事な編隊で福山に近づいています。

子供たちをすぐ散開させて,ポプラの立木や家の軒先に避難させ,片ずを呑ん

で様子をうかがっていました。その時はそのまま通り過ぎたような形に見えましたが、何時迄たっても空襲警報が解除になりません。仕方がなく仕事を断念してその日は、又、大八車を引いて、蔭から蔭へと蔭伝いに、学校に引き返して参りました。

宿直室の前の土間に明日行く積りで、荷物は下さずそのまま車を置いておきました。

その日は、私は丁度宿直が下番で勤務がありませんでしたので、自分の家（引野町西沖浦 福山入江の入り口、日本鋼管の港）に帰りました。（中略）

前述のように空襲の時ちょうど私の子供が二人病気で寝ていました。

夜中頃だったと思いますが、警戒警報から引き続いて空襲警報がけたたましく鳴り、家の中に居たのでよくわかりませんが、B 29は福山の東南方向から、はいつて来たと思われまゝ。急に海がシャッシャッと言う、今まで聞いたことのないような音が間断なく続きます。たくさんの焼夷弾が投下される音でした。

そら「今度は本物の空襲だ」と言ってすぐさま病気で寝ている子供を布団でくるんで、自分の家へ落ちたらすぐ飛び出せるように入口のところで待機しました。そのうち音がしなくなったので、家の外に出て見ました。

裏山のあたりが、二、三か所、山火事のように燃えているようでした。この時、引野小学校も村役場も全焼したわけです。

学校にはたくさんの軍需物資が保管されていたようです。

福山市中を見ると、福山城の高い天守閣が上の方から火柱のようになって、天空に燃え上がっていました。旧市内は全体が一面火の海で、濃い紺碧のような夜空に燃えていました。私はすぐ学校にかけつけなくてはと思って、自転車に乗って出かけました。自転車で思い出すのですが、当時タイヤ、チューブが手に入らないので、ゴムホースを車輪に巻いて走ったものです。少しへちゃげると重くて走りません。毎日その自転車に乗って、軍靴に軍隊の防空頭巾や戦闘帽をかぶって通勤していました。

港町の方からはいろいろとあって、手城の西まで行きましたが、つき当りが火の海で通れません。引き返し前の盈進高校があったあたりを通り三吉町にでようとしました。

避難する大勢の人が、手城の方へ歩いて来るのに出会いました。深津の松原町は、全く火の海で燃え上がっていました。

盈進高校の南側道路を通り、あちこち燃えている中を自転車をおして、脱兎の如く火の中をくぐり抜けて二、三ヶ所進みましたが、行く先は益々前面の火で、到底町中にははいれません。仕方がなく諦めて自分の家へ引きかえしました。

火の鎮まるのを待って、夜明け前に今度は、自転車を置いて歩いて又出かけました。明け方には、燃え上がる火だけは大体鎮まってくすぶっていました。

手城入口から今の日本火薬の方へ出ていきました。日本火薬の南側あたりか

ら、瓦が割れたのが道路に山のように積み重なっています。瓦が焼けていて靴底が熱くなり通れませんが、熱い上をさけながら飛び飛び歩きました。

そのあたりで、はじめて人の死体を三〜四体目撃しました。黒こげになっていて全くわからない死体、脚絆を巻いて、うつ伏せに倒れて死んでいる男の人もありました。自分より他には、人は全然通っておりません。

道路も家跡も一面の焼野ヶ原で、区別はわかりません。目標となるものが無いので、方角もわかりかねます。

何とかあたりをつけながら、霞学区にはいりました。さて霞校も全部焼けて跡片がないので、学校がどこだったかわかりません。

あちこちの死体を見ながら方角を見定めて近づいて行ったわけです。

霞校の東側に巾一間余りのドブ川があったのですが、その川の中、道路のほとりに五〜六体の死体がかたまっているのを見ました。

ドス黒い顔、手足は水ぶくれでふくれあがり、目をおおう有様でした。後から聞くと、熱いのでドブ川にはいったのだろうということです。

やっと学校の東南に昔から稲荷神社があったわけですが、その石の柱が二本見えました。これは、学校の正門近くにたどり着いたと思ってホットとしたわけです。すぐ近くに霞校の門柱を見つけました。門の入口にたどりついた時、当時の稲毛慶一校長さんと宿直であった二〜三人の先生が、しょんぼり気のぬけたような様子で座っていました。

学校は根石だけ残って、一面の割れ瓦の海と化しています。（後略）

霞国民学校 （2）血と長靴と泥の中で

松浦 薫雄（当時 霞国民学校勤務 三十四才）

八月九日、夜が明けかかった頃、家の表の方が騒がしかった。繃帯を巻いた痛む脚に杖をついて、出て見ると、近所の方の親類の人で、町に店をもっているのが、子供を三人も連れて、泥まみれの、しかも水に濡れた着物を着て、煤をまだらに塗ったような顔をして、家の者等と話していた。

「ひどい目に会いましたが、やっと今逃げてきました。」

此の人は、私の杖をついた姿を見て、

「あんた、どうしたん？」

「私も夕べやられました。焼夷弾か爆弾か分らんが、ここをやられました。」

と股の繃帯を示すと、何重にも巻いた三角巾の上にまで、赤黄色い血膿がぽっかり円形に沁み出していた。其の小父さんが云うには、

「公園（今の市民会館の所）では、あんたのその位の傷をしている人は、皆死

んで転がっていたよ。」

戦時中とは云え、何と遠慮もなしに、ずけずけというおっさんかと思った。しかし又、じとじと痛む股を抱えて、俺もひよっとすると、一抹の不安もなかった。早々に脚を引きずって、家に入り、薄いぼろ布団を掛けて横になった。

日が昇って暑くなる前の、まだ涼しい早朝の一刻、うそのような静かな平安の中に、眼をつむると、まざまざと昨夜の悪夢とも云うべき、阿鼻叫喚の地獄図絵が思い出されるのであった。後日、広島原爆の有様を知るに及んで、福山の空襲の如きは、物の数ではない事を知ったのであるが、其の時はまだ広島の詳細を知る由もなかった。

昭和二十年八月八日は、殊の外蒸し暑い日であった。

学校の授業も何度かの警戒警報の後、空襲警報で子供を帰し、昼食後は、登校してきた子供を集めて、草刈りに出掛けた。草は荷車などで積んで校庭の一角に運び、食糧増産のための堆肥にするものであった。雑草は、小山のように二山も三山も積まれてあった。其頃霞校は、他校も同じであったが、殆ど全校庭を掘り起こして、甘藷を植えていた。校外にも芦田川廃川地（今の競馬場の所）を借り、四、五、六年に配当した計一町歩の畑を持っていた。これに、甘藷と野菜を栽培していた。水田も近くの低地を整備して一反半位作り、これに稲を植え付けていた。これ等もろもろの増進管理の主任を私がしていたのであった。

先輩の男先生が大方応召して、残る少数の男子と、大部分の若い女子の先生という組織で、学校が守られていた。此の頃、多くの学徒が軍需工場へ勤労働員で出されていたが、尋常小学校では、児童も職員も一人も工場には関係しなかった。代わりに、銃後の食料逼迫に備えて、前記の耕地のほかにも、道路の傍、芦田川堤防の外側斜面、川の中州にまでヒマ（実から潤滑油を採る）、イモ、ナンキンも植えていた。

私は其の日も、主任として是等沢山の植え物の管理施肥の計画、作業の割り振り、早天続きの為、枯らさない様水を撒く事やらの仕事をして、疲れ切って夕方家に帰った。（中略）

乏しい夕食を済まして、風呂に入っていた。九時頃、夏の日には暮れなずむとは云え、あたりはもうすっかり暗くなっていた。其の時、パチパチ、パチという異様な激しい物音と共に、あたりがぐんと明るくなった。外に走りでる家の者、と云っても大人の男は私一人、他は全部出征し、残りは女と幼い子供ばかりであった。

此の一種無気味な状況に、パッと頭にひらめいたものがあつた。それは度々の宣伝ビラによる米軍の予告の通り、「愈々福山にも空襲が来たか」という事であった。私は体も碌に拭かずに飛び出して外を見た。北の方に先ず明るい火の手。大分遠方。近所の人が、

「ああ、宇山が焼かれる！」

と怒鳴っていた。宇山(春日町)のあたりに炎々と火の手が上がった。次に市

内の何ヶ所からも、火の手があがって来た。爆音と共に、次々に火の屏風のように、噴出する火の柱火のかべが、どこにも、ここにもそこらじゅうに噴き上がって来るのであった。

ぐずぐずしてはいられない。俺には勤めがある。

「俺は、これから直ぐ学校に行くぞ」

「焼夷弾が落ちたら、火ばたきでたたき付けて、皆で水を掛けるのだぞ。バケツに水を汲んで置けよ」

等指示しながら、急いで巻脚絆をはき、上着は暑いけど一枚よけいに着て、防空頭巾をかぶり、ボロ自転車を出していると妻が、

「こんな時、行ってはいけない」と泣き声で叫んで、服を引きずる。姑も老母も、

「行くな、危ないから」と泣きながら止めるのを、振り切って、

「空襲があつたら、直ぐ学校にかけつける規則になっているんだ。卑怯な真似は出来ないんだ。」と出発。

途中どの家でも、おびえ切りながら、家族で家を守っている様、中には田んぼの中に布団を持ち出して、家族を避難させているもの等、それぞれ異様な緊張で騒いでいる様が、暗闇の中にもありありとうかがわれるのであった。其の間も、数十機のB29が相当低く飛んでいるらしく、昼間いつも見る、カゲロウの様な透明な、とんぼ位の小さなものでなく、地上に時々燃え上がる炎に、チラッチラッと映える姿は、なかなか、片翼が畳一帖位あろうか、超大型の鷲の様で、物凄い爆音を立てながら、火の玉をポタポタと落としては、飛び去って行く。(途中略)

兵營の取っかかりになる直ぐ手前まで来た時、何回目かのB29の挺団が、私の目の前の兵營に向かって、まるで樽から大水を流し掛ける様に、ザーと焼夷弾を落とし始めた。これは大変だと思ったその瞬間、私は左股の後側を、鉄火箸の様なもので、しびられる様な衝撃を受けた。(後略)

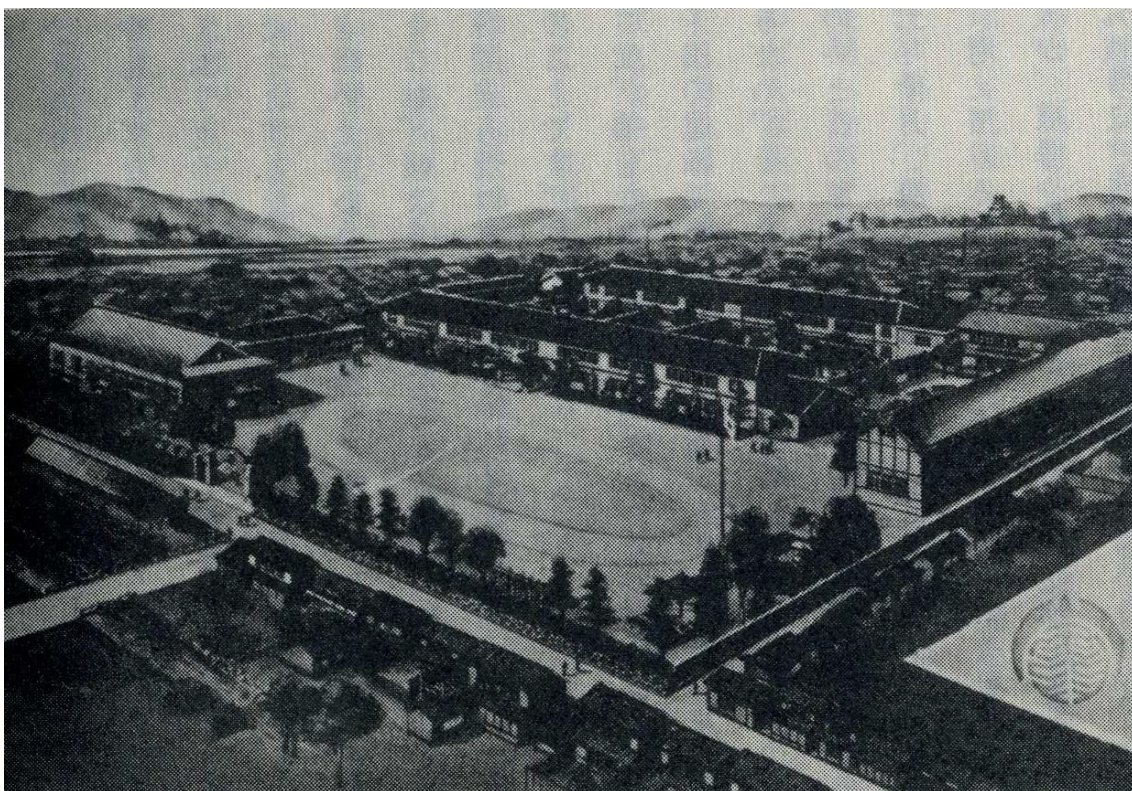


写真 霞国民学校

愛し娘との別れ

S (匿名 地吹町)

(前略) 両親と銃後の守りについていた私供のいた地吹町は、市の中心部よりはずれ、その上、年老いた両親と人手不足の折柄疎開もできず、家財道具の大半は焼失、中には、荷造りしたまま焼いたものもありますが、いつかは求めることができますが、尊い人命は再び還りません。当時の思い出に胸をしめつけられ、ペンは思うようにすすみません。

灯火管制下、起きていても何も仕事は出来ず、日が暮れば、皆寝について居ました。

丁度午後九時頃、けたたましい空襲警報のサイレンのひびき、何時も身支度だけはして休んで居ましたが、矢張り其の場に臨めばあわてます。

両親には芦田川畔へ避難する様申し、我等五人は、家を出て、隣の防空壕へ入りました。今にして思えば、両親と共に芦田川のほうへ逃げれば良かったのにと残念です。

防空壕へは、隣保の方二、三人入られ、その時一緒に居た方が、珍しいお餅を子供達に下さいましたが、大きい子二人はいらぬと云い、被災した久恵だけが頂いて居ましたが、暗がりでもよく見えませんでした、美味しく頂いたことでしょう。

それが、最後の食事となるとは。

壕に十分か十五分居たと思つたら、あたりへ焼夷弾は落ち始め、見る見る燃え上がり、我々が日常演習していた防火訓練は全く用を為さぬ程、激しい爆撃は、手のほどこし様もなく、誰一人として消火して居る者もなく、この壕も危険を感じ、裏の天理教会へと避難した。

避難する者も、雨霰と焼夷弾は落下する。私は、背に負っている五ヶ月の赤ん坊が気になり、持っていた荷物も捨てた。途中で裏の川へ避難して、直撃を受けて亡くなられた人もあると聞いている。

やっと、火災場所から離れた所へ来た時、手を引く様申していた長男は、久恵を連れていません。

これはしまったと振り返り見れば、壕のあたりは火の海と化し、引きかえすこともできず、一緒に壕に居た誰かと、逃げ延びて居ることを念じつつ、其の夜は、運よく焼け残った親類の家へ泊めて頂いた。

寝もやらぬ悪夢の一夜を過ごし、翌朝焦土と化した我家に帰り、近隣の方々と手分けして探したが解りません。

焼跡は、瓦礫、焼きちぢれた衣類の散乱、折角壕に入れていた衣類は、焼夷弾の強烈な熱気で焼け、地中に埋めていた大豆は、焼けて黒豆と化し、食べる事はできない。

誰か、風呂場の焼け跡を片付けていた者が、まあ可哀想にと絶句。

憐れ風呂釜の中へ水が入っていたので、下半身だけ残す憐れな姿で、子供心にも、水があるからよかろうと思つたのでしょうか。

ああ、私さえ、手を引いていれば、こんなことには、ならなかったものと、悔いられてなりません。

ただ、我が身を責めるのみです。戦地の夫が帰還したら、なん何と云ってお詫びしたら。

ああ、戦争はいやだ。尊い人類を破滅に追い込むのみ。戦争は、二度とあってはならぬ。唯、世界平和を念ずるのみである。 合掌

三尺おきに落ちた焼夷弾で（聞き書き）

佐崎 ヒナ（野上町一丁目 当時四十二才）

あの年も、ことし（昭和四十八年）のように日照りが続いて空気もよう乾いたと思ったと思います。とくに空襲ごろまではほんとに雨は降りやせんかった。

昔はこの辺はずっと田んぼが続いて、みんなが佐崎さんかたは大丈夫じゃ言うていました。それでも爆弾は空から落ちて来るんじゃないけえ、ここは大丈夫じゃいう所はなかったんじゃないな。

あの頃、うちの主人は奈良県の薬屋から仕入れた置き薬を持ってあっちこっち入れ替えに歩いておりました。家族は、主人と女学校へ行っった娘と私の三人で、ちょうど隣は主人の本家で、主人の母や兄の家族が住んでおりました。

空襲の時は、主人は町内の組長をしっったので、空襲警報が出るとすぐに責任がある言うて、野上町とここの事務所を行ったり来たりして走り回っりました。

何時頃だったか忘れてしもうたけど、最後にもどって来た時、「町はみな燃えよう。もう火でいっぱいじゃ。ここももう駄目じゃけえ、早う逃げえ」といいました。

「わしは大丈夫じゃ、おまえは早う子どもを連れて出え」といわれて、急いで娘を連れて逃げました。町の方は真赤に空まで燃え上がっておりました。何の音かようわからん「ザー」というような音がして、空から火のかたまりがいっぱい降って来ました。

草戸の鞆線の方までむちゅうで走って行っったんじやが、家のことや主人のことが気になってまたもどってみましました。逃げるおりにはそうでもなかったんじやが、帰る時には、四方八方から青い火が落ちて来て、あちこちから火の手があがりょうた。道ばたや田んぼにも、三尺おきぐらいに焼夷弾が落ちて来りました。

ようやく家にもどってみると、主人は焼けこげた家の中で、焼夷弾が横腹に突きささって、からだじゅう黒こげのようになって死んどりました。外で直撃に会ったか家の中に落ちたのかは、ようわからん。あとで人から聞いた話じやが、あぶなくなったのでわたしらを避難させてから、まだ家の中にあった置き薬をとりに行こうとしたんじゃないか、とも言うった。

隣の本家では、主人の母が死んどりました。庭に掘ってあった防空壕の入り口近くで、顔も着物も焼けこげて黒こげになっりました。防空壕の中へも焼夷弾が落ちて来たんであぶなくなって外へ出た時にやられたのか、逃げようして防空壕の入り口まで行っった時に直撃を受けたのか、ようわかりません。

その時、主人の母といっしょにいた兄嫁は、爆撃を足に受けて親指がちぎれてなくなったまま、用水路のどぶ川のようなところをたどって親許の瀬戸町の猪の子まで歩いて帰っったんじやが、一週間ほどしてなくなりました。足の傷口からば

い菌が入って破傷風になったと、いうことじゃった。そういう時じゃけえ、あまり、手当てもできんまま、八月十五日終戦の日に死んでしもうたんです。

次の日、庭のすみで主人と母と、親子二人を並べて焼きました。その頃のことは自分がどうやって生きとったんか、何が何だか覚えとりません。主人をなくした時の気持ちを問われても、どう言うていいか、ほんまに無我夢中で今日まで生きてきただけです。

幻の母と弟を求めて（聞き書き）

坂本 静江（霞町三丁目）

当時私達は延広町に住んでいました。

家族は父母、兄（当時は広島にいた）、弟（小学五年）、妹（小学三年）と死んだ弟勉（当時一才）と私（当時十四歳）の六人家族でした。

当時は警戒警報が鳴りますと、いつでも逃げられるように準備していたものです。

あの日も久松通りにゴザをしいて休んでいました。

八月八日は、八時半頃でしたか、警戒警報がでるとすぐ、空襲警報がでて、北の方、駅の方角が真っ赤になっていました。

母は勉を背負い、田内のおばあさん（七十三才）をつれて、先に逃げました。後で田内のおばあさんの遺体が光南町で見つかりましたから、おそらく遊園地（現在の市民会館）の方へ逃げたのだと思います。

私は弟をつれて護国神社の方へ逃げました。

人ごみの中で、妹を連れた父ともはぐれてしまい、私と弟は誠之館の方から野上へとたんぼの中を逃げ廻りました。

焼夷弾が降って来て、右や左の田んぼにずぼっずぼっつきささる音がいつまでも耳に残っています。

こわくて、こわくて弟と二人で石橋の下にしゃがんでいました。水びたしになったリュック（米や豆等食糧を入れていました）が重かったこと……。

延広町の人々は稲荷様の所に集まることになっていましたので、そこで妹をつれた父に会い、ほっとしましたが、いつまで待っても母がやって来ません。心配で心配でたまりませんでした。

集まった人達も自分の家族を呼び合っていました。私達も「お母さん」「勉ちゃん」と何べんも何べんも呼びました。その日から、父の従兄である神島橋の親戚に厄介になりました。

来る日も、来る日も母をさがしました。どうしても見つかりませんでした。

今日まで母と勉の死体はわかっていません。

一緒に逃げた田内のおばあさんの死体は見つかったのに。

毎年八月六日。広島では被爆者の方の慰霊祭が盛大に行われています。それにつけても、母も戦災で死んだのになあと思います。

福山市の戦災者名簿にも記載されてなく、福山の慰霊祭にも招待されたことはありません。（後略）

「のみ」と「つち」（聞き書き）

伊藤 愛子（霞町三丁目 当時 二十四才）

当時、私たちは、夫が出征していましたので、父母と私と長女の四人が光南町に住んでいました。しかし、空襲の時は、私は子供を連れて、倉敷の実家に手伝いに行っており、家にはいませんでした。したがって、私は、倉敷で福山空襲を知ったのです。西の方の空全体が真っ赤に染まって見えました。私は福山にいる父母のことが心配なので、あわてて帰ろうとしますと、近所の人「子供を連れて、いま帰っても、どうにもならない」と言われ、かわって福山の様子を見に行き下さいました。しばらくして帰られ「どうも、お父さんが死んじゃったらしい」と言われるのです。私は、一瞬、血の気が引くような感じがしました。はやる心をおさえながら、翌日、私は実家の母と帰福しましたが、なにしろ混乱しているため、大門までしか切符をくれません。だから、そこから歩いて帰ったのです。福山市は、全く、一夜にして灰じんと化していました。見渡すかぎり焼け野原です。そうして、あちこち、まだ余じんがくすぶっていました。私は、非常な暑さに加えて、荷物は重いやらで、何回も捨てようかとさえ思いました。ようやく、家にたどりつきましたが、丁度、私たちが帰ったときに、不思議なことに父の遺体が見つかったのです。それまでには、何回も隣組の人が協力して下さって探しましたが、見つからなかったということです。

父の遺体は見るも無惨でした。真っ黒にやけた首と胴が二メートルくらい離れており、その周囲にいくつもの骨がちらばっているのです。いまでも、目にちらつき、ことばに言いつくせません。やがて、ズボンをはいた足がみつき、シマのズボンから父だと確信しました。しかし、気がはっていたことと、なにしろ長い間発見されなかったこともあり、悲しみのなかにも嬉しさがありました。

なお、これは母より聞いた話ですが、空襲がはじまった頃、父母は近所の方と協力して消火していたのですが、やがて周囲が燃え始めると、母を逃がし、父は一度家の中に入ったのです。それは、前日、隣組の常会があり、父は隣組の役員をしていたため、みんなの債権を買うお金を預かっていたので、責任を感じて

入ったのではということです。

想いおこしますと、父はおとなしい、だれからも好かれる人でした。石工をしていましたので、いつも腹がけをし、黙々と墓石を彫っていました。いまでも、焼け跡からでてきたのみと槌を父の遺品として大切にしております。

空襲・終戦・進駐軍

島田 薫荘（当時 福山警察署長 四十三歳 地吹町）

（前略）

B29六十一機（あの当時の手帖にこう記している）が来襲、なにしろ夜間のことでしかも旋回していたので誤りがあるかもしれないが、はじめ本庄付近や春日の宇山の近くに照明弾を落とし、旋回しながら市の中心部に入って来たように思う。焼夷弾は三十六本が一束になっており、落下途中でバンドが切れてバラバラになる仕組みになっていた。そのうちに、焼夷弾で警察署前の消防屯所が燃え出して警察署の宿直室にも落下した。署員の努力で一応は私の眼前で消したが、五、六分後事務室の天井に束になったものが落ち、くるくる廻るように天井の中が燃え出し、消火の手段なしと判断し屋上の防空警視員に対し地上に降りるよう命じた。警察署が焼け出す直前に福山城の本櫓に命中し火焰が中天に達するのを観た。それと前後して目の前の市役所庁舎が随所から火焰を吹き出し、またたく間に黒煙に覆われた。事ここに至って、私は署員にかねてきめていた本庄町の家畜屠場へ避難せよと発令した。私は最後に官舎を巡回して西隣の日赤診療所横から公会堂と藤井別邸の間の道路をぬれタオルを口にあてて這うようにして線路に出て屠畜場へ行った。線路の西側の家屋はほとんど一斉に火を吹き、生き地獄の感があった。

被害は市街地の八十%におよび、市役所、警察署、裁判所、日赤診療所、霞、南、深津の各小学校、門田、増川、盈進、県女の各中等学校、三菱、大同重機、福山製紙の各工場、高射砲隊兵営等々の建物が焼失した。

死者は一四二名と記憶しているが、性別、大人子供の別は審かでない。傷者は比較的僅少であったと思う。死傷者が他都市と比べて僅少であったのは、一、二カ月位前から数回空襲の予告ビラが空から撒布されたこともあって市民も十分準備ができておったことと、市内の不要の建物を撤去していたこと、それに老人、子供の郡部へ疎開に努めていたことなどもあろう。また六日の広島における原爆投下の悲惨さが伝えられて、郡部への疎開が促進されつつあったし、空襲必至を予測して防空の策を練っていた。（中略）

空襲必至を想定し、「罹災後の緊急対策要項」を早くからつくっていた。各地

の罹災警察署に照会し、その回答書を参考にして、市長と協議して六項目にまとめた。そのうち一項目は今どうしても思い出せないが、大要は次の通りであった。

1 食糧の緊急配給

イ 各小学校を単位に区域をきめ、配給所を設定した。例えば霞学区は草戸稲荷社、樹徳は木ノ庄の神社というように。

ロ 配給責任者は各町内会長とした。

ハ 配給食は梅干や漬け物を入れたにぎり飯とし、松永町及周辺で二万食、神辺町及周辺で二万食、春日、坪生及周辺で一万食の計五万食を所定の場所に持参できるよう契約してあった。其外に軍の堅パン十万食分を春日小学校へ格納備蓄した。空襲があった時、これで十分賄うことができた。

2 傷病者の応急手当

負傷者を搬送する場所として、西小学校、県立福山工業高校の二カ所を設定したと記憶する。薬品も備蓄してあった。

3 主要道路の啓開清掃

万一の場合に備え、附近市町村の警防団にスコップその他の道具をもって福山警察署に急行するよう依頼してあった。松永、府中、両署管内へも署長に依頼してあった。暁部隊入口から駅迄の啓開清掃は、私から隊長中川大佐に軍隊でやっていただくよう了解を得ていた。

九日の午前九時頃には、軍隊が出動して瓦礫焼材一切を撤去し、道路を清掃してくれたものである。その他の道路については関係者と協議して係をきめていた。そして軍隊の啓開作業に刺戟されて、各警防団がめざましく活動し九日夕刻までには主要道路は完全に清掃が完了した。

4 主要個所の電灯・電話・水道の応急修復新設など

必要個所から修復し新設番号を設けた。陸軍病院は一番、福山警察署は七番八番九番、署長官舎十番などというように。

5 屍体の処理

芦田川原の鞆行大橋下流から鞆軽便鉄道鉄橋附近までを事前に処理する場所と決めてあった。川原を浅く掘り一列に並べて焼く、その際、旧住所・氏名を明記した札を掲示すること、氏名不明の場合は着衣人相、性別・死亡場所等を表札に記載することになっていた。（後略）

2 「続福山空襲の記録」手記篇

●南救護所

母を求めて四十年

広川 富保（野上町一丁目 当時 船町）

母はその日自分の弟が、阿伏兎の観音さんの住職をしていたので、父と共に行き、一足先に福山に帰ったばかりにヤラレタのです。

その頃、私は南小学校六年生、戦時中なのでオチオチ勉強もしとられず、校舎の南側に続く運動場を開墾しては、さつまいもを作ったり、子供用の大八車で物を運ぶために、郷分の山まで行き、材木を切る手ごをしたりしました。

空襲当日八月八日の晩、着のみ着のまま、寝床に早くついた後、空襲警報のサイレンと共に、たたき起こされ、ザーザーと焼夷弾の雨の降る中、私は母と手をつないで逃げました。船町から、勧業銀行あたりまで来ていたでしょうか。母のもう一つの腕の中には、一番下の弟が抱かれています。勿論、防空頭巾をしていたのですが、あまり上から、落ちてくる焼夷弾が激しくなったので、心細くなったんでしょう。今の福劇の前まで来ると、母が急に振向き、「富ちゃん、これじゃあいけんけえ、フトンを取りに帰って」というので、私は母と別れて、押すな押すなの人の中をかき分けて、必死で家にたどり着きました。が既に家中火の海で、中へは一步も入れません。とっさに私は、待っている母のことを思い出し、一拳に前の場所まで戻りました。

ところが、母の姿はもうそこには、なかったのです。そして、とうとうフトンを取りに別れたのが、最後になってしもうたんです。

私は兄弟四人でしたが、母は長男の私と、一番下の雄一を連れて、逃げたのです。三男は、住み込みで働いていた障害の娘さんらと一緒に逃げたらしいんです。

とうとう私は、母とはぐれてしまったので、そのまま御門町の楠本八百屋の所から、福山工業高校の方へ母を探し探し逃げて行きました。母親は、弟と一緒にいったきり行方不明なんです。

その後、叔父や、叔母が芦田川や、アチコチ一生懸命探してくれたけど一向に解らなかつたのです。私も、「どこかに生きているに違いない。」と思って、えつと探したが、何処にも見当らない。しかし、「何時かは、必ず帰ってくる……」と思うて、その後何度も福山中を探し歩きました。そんな心境が丸三年続き、情けないやら、悲しいやら、どうしようもなく、涙なくしては語られない思いです。しかし、その当時はのぼせていて、いくら自分の母であっても、何とも感じない日もありました。

その後、今の船町の広川パンへ今のうちを建て、新しい出発をしました。が、依然として、母と弟の消息はつかめず、誰かが「うちの母と子供らしいのが、焼夷弾

の直撃を受け、燃えているのを見た。」というのを聞いたことがあるが、本当の事かどうか解りません。

とにかく私の母を待ち焦れ、探し求める無意識の気持ちとそれがかなわぬ心の錯綜は今現在も心の奥深くくすぶり続け、生きていたときの記憶も、あの「フトンを取ってきて。」という言葉と共に、プツリと切れたままです。（後略）

長女の死

比名 里子（当時 古野上町甲）

空襲当時の住所は、現在、西桜町ということになっています。西桜町の高橋金物店の隣に、坂本歯科の駐車場があります。そこに空襲で焼けたわが家がありました。

（中略）主人は紳士服をつくる洋服屋をしていましたが、当時は国民服の時代だから、仕事はあまりしていませんでした。二十年八月八日の晩、子どもは、もう寝かしておりました。八時五十分頃でしょうか、「警戒警報」のサイレンが鳴ったと思ったら、すぐに、「空襲警報」になり、その直後、飛行機の爆音が聞こえてきました。その後すぐに照明弾が落とされて、昼よりも明るくなりました。目がまばゆいぐらい明るくなったことを覚えています。現在の水道局の前に、地方事務所というのがありましたが、それが先ず燃え上がりました。様子を見ようと、ちょっと外へ出てみると、そういうことでした。

「こりゃあ、もう、防空壕へ入るどころじゃあない、こりゃあ、はよう逃げにやあいけん」と思いまして、寝ている子供をたたき起こしました。

八月七日（？）に回覧板が回って来て「警戒警報、空襲警報の時には、必ず防空壕に入るように」といわれました。今から思うと広島原爆の情報から、このような対策をとったのだらうかと思います。しかし、防空壕へ入っては駄目だ、逃げようと思ったのです。

主人が「小さい子供を三人連れて出え、伸代は、わしが連れてでるけえ」というので、私が三人の子どもを連れて先に家を出ました。

最初に三才の清志を背負い、町子と通子に手をつながせて、「離れんように、離れんように行くんよ」といい聞かせて逃げました。主人は「早よう連れて逃げてくれえ」と、どなっておりましたが、私は後髪を引かれる思いでそれを聞きました。家に残してきた伸代は、五才の時に小児麻痺を患って寝たきりに近い状態でしたから、連れて逃げるにしても残っている主人ひとりの手に余るのではないか、という思いが頭にありました。

私たちは、鞆鉄の線路伝いに草戸の土手の方へ逃げました。行く先は明王院で

す。空襲の時の町内の避難場所は、明王院と決められていました。

草戸の畑の中を逃げていると「ドガン」と大きな音がしたので、「伏せ！」と大声で言い子ども等を伏せさせましたが、頭の方に土や泥がバサッと散ってきました。その時には「こりゃあ、爆弾じゃ」と思いました。焼夷弾だけでなく爆弾の攻撃もあったのでしょうか。

肝を冷やしましたが、防空頭巾を被っていましたから、誰も怪我はしていませんでした。布団を被って逃げている人も、たくさんいましたが、私のような子連れには、布団を被って逃げることなどできません。

芦田川の土手の上にあがったら、お城が下から燃え上がっていました。これを見て「ああ、もう、これは駄目じゃあ」と思いました。古野上の自分の家はと見て見ますと、もう、あたり一面真っ赤に燃え上がっていました。

土手の上には、焼夷弾が一間おきくらいに、足の踏み場もないくらい転がっていました。土手からは、「中橋」を渡って明王院に逃げましたが、逃げる間中、真昼のように明るかったと思います。（途中略）

明王院に避難したのは、霞町、地吹町、古宮町、古野上町などの人たちであったと思いますが、みんな、無事でよかった、よかったと言いつつ合っています。そんな状況のなかで、私は主人をさがし回りました。主人は隣組長をしており、常々「最後まで残る」といつていたので、「どうしたんじゃろうなあ、焼け死んだかなあ」と心配していましたが、十時頃（？）やっと主人に会えました。主人の姿は、戦闘帽を被り、国民服にゲートル巻きというもので、怪我も火傷もしていませんでした。

わたしが「あんた、伸代は」と聞くと、焼夷弾がつぎつぎと落ちて、かけ回っている間にうちの家が燃え上がって中へ入ることもできず、「よう連れて出なんだ。かわいそうなことをした」といいます。それを聞いて私は「むごいことをしたのう、伸代こらえてくれえ、お母ちゃんは三人の子を連れて逃げにゃあいけなんだんじゃあ、わかってくれえのう」といつて伸代に詫言いました。伸代にとって、焦熱地獄になったわが家の方にむかって合掌しました。

私たちは、九日の明け方、線路伝いに古野上の焼け跡へ帰ってきましたが、家はきれいに焼けていて柱も立っていませんでした。

伸代はどうしているだろうか、「伸代のお骨があるにちがいない」といつて、お骨をさがしました。寝間にしていた座敷の真中あたりにきれいなお骨がありました。黒こげでなくて、火葬場で拾うお骨のように、きれいに焼けて真っ白でした。

これは、私たち家族にとって、一つの救いでもあったといえるのではないのでしょうか。

お骨は手で拾ってやりました。焼け跡には、箸などないので、そうする外に術がありません。はじめは、主人と私が拾いましたが、子供等に「一つでも拾え

え」と言い、三才の子どもにも拾わせました。お骨は私の鞆（肩にかける布鞆）に入れましたが、置く場所もなく困ったものでした。

寝たきりで、生きたまま焼かれた仲代のことを思うと、本当にかわいそうで、あわれでなりません。主人も泣き、私も泣きました。当分の間、家族みんなが「かわいそうなことをした」と言い暮らしました。（後略）

戦災記

岩田 知治（古野上町 当時 御門町）

（前略）

七月某日、米軍の空襲予告ビラが福山市中にもばら撒かれ、文面には軍事施設のある町数箇所を挙げてそれ等の都市を近日中に爆撃する旨が記されており、わが福山もそのうちにはいつていた。空襲の近いのを知り、冬物の衣類など差しあたって使わないものを荷造りして、中津原の知人の家に疎開させて貰ったのもその頃と憶えている。

八月に入って最初の大事件は、八月六日の広島原爆投下であった。当時は原子爆弾などという言葉も知らず、強力な新型爆弾とのみ伝えられ、その威力を恐れたものであった。

その二日後、八月八日の夜、わが福山も遂にB29の大編隊の焼夷弾攻撃を受けて、一夜にして瓦礫と熱灰の山となり、多数の死者を出したのであった。

当日は夕食後暫くして警戒警報が発せられた。警報発令があれば直ちに登校せよとのことだったので、ゲートルをつけ防空頭巾を被って、出産予定の近い妻と五才になる長女とを残して吾が家を駆けだした。

無我夢中で光南町を駆けぬけて田圃の中を工業高校へと向かう途中、ふとうしろを振り返ると、天守閣からは猛烈な火の手が上がり、兵營の近くであった吾が家の附近からも焰があがり始めている。それを見たとき、足は地面に釘づけになってしまった。さきにのべたような状態で残された家族に火の手が迫ったときどうなるか、又、恐怖のために焰の中で産気づいたらどうするか、それ等のことが頭の中を駆け巡ったとき、公事を捨てて私事に赴くのは卑怯だと思いつつも、足は廻れ右をしてしまっていた。

御門町まで戻ったところが、家はまだ焼けずにあったが雨下する焼夷弾は玄関に、又、勝手口に煙を上げ始めていた。かねて作っておいた火たたきで二、三の火の手は消したがそのようなことで防ぎきれぬ筈もない。やがて二階の窓から火をふいて焼け始めた吾が家を見て逃げるより仕方がないと思い、向かいの家のコンクリートの塀の傍に布団を被って避難していた妻と娘をつれて道路一つへだてた南側の田圃の中へ逃れた。

田圃のなかには大勢の人が群がって避難していた。その中に入って幾時間たったであろうか。その銀色の翼は焼ける街の炎を反射して赤く光り、搭乘する米軍の兵士の顔まで見える程の低空を、悠々と飛び去ってゆく B29を見たのが印象に残っている。

どの位の時間が経ったであろうか、やがて空襲も止み焼けただれた街の彼方に朝日が昇り始めた。助かった！と思うその眼に映った余燼をとおして昇る朝日の、艶のない不気味な色も忘れられない。側に佇む妻子も無事擦り傷一つもなく私も無事で朝を迎えたことは何と言う感謝、家も焼け家財も灰になったが、怪我もなく命が助かれば又何とかなる。生きようと思った。

さあれ、焼跡に立ったとき玄関わきの書齋の辺りに、結婚記念に作った書棚が蒸し焼きのようになってそのままの形で立っているのを見た。長い間、苦勞して求めた五十三冊の平凡社の百科事典等と共に、四角な形のまま崩れもせずに立っているのではないか、それに手を触れただけで無惨にガサガサと崩れ去ったのである。疎開させておくのだったと、云いようもない無念を感じ今更、失ったものへの未練に後髪をひかれる思いであった。それから数時間の後、工業高校は焼け残ったとの噂を聞いた。行く先もなく文字通り焼けだされた親子三人、兎も角、工業高校へ避難しようと、辛うじて持ちだした夏の掛け蒲団をもち、リュックを背負い、長女の手をひいて工業高校まで辿りついた。時の鈴木豊喜校長の勇気と英断で焼失を免れた工業高校の校舎と寄宿舎を眺めた時、蘇生の思いがしたものであった。

罹災した幾家族かの職員と共に寄宿舎に起居することになり、漸く八月九日の夜、昼の上で休むことを得たのは感謝に余りあることであった。併し間近に迫った妻の出産のことを思うと、焼野原と化して助産婦も医者も居所さえ解らぬ福山に止まることは不安で、何とかして戦災に遇わぬ街へ逃れる道はないものかと思っていた矢先、同じ御門町の森本氏から同氏の避難先の松永へ来ないかとの誘いを受け、有り難い極みとお受けして、大変世話になった寄宿舎を離れて、途中、中津原へ立ち寄り疎開させて貰った荷物を整理して、松永へ向かった。

八月十三日、松永町東町の承天寺の玄関脇の部屋に落ちつき、妻も身重の体を床の上に横たえることができた。この間筆舌につくせぬお世話を受けた多くの方々を改めて思い起こし、心から感謝する次第である。（中略）

戦災に遇って丁度一ヵ月目の九月八日、妻は無事女兒を出産した。これも多くの人の援助を得て、思ったより安産で産声を聞いた初秋の夕方のは、今も記憶に新たなことである。（後略）

●霞救護所

ああ一神も仏もないものかと

藤尾 幸吉（当時 紅葉町）

あの頃、私たちは紅葉町へ住み、私が左官の手伝いをし、母、妻、子ども三人の六人家族でした。現在で言うと、市役所の南側、梅田小鳥園のところから路地へ入り、一番奥へ住んでいました。

八月八日の晩は空襲警報だと思っていると、あっという間に、あちこちで火災がおこりました。いそいで逃げたくをし、私が長女定代を、妻が次女秀子を、母が三女房代を背負い逃げました。まだ長女が五才、次女が三才、三女房代は僅に一才でした。

すでに、路地を出るまでには、燃え始めている家もありました。しかし、母が「貯金通帳を忘れた」と取りに帰り、待っても、なかなか帰らんというので、妻が引き返したのです。そうすると、あっという間に路地の入口も燃え始め、全く、袋小路にとじこめられてしまいました。焼夷弾攻撃は、ますます苛烈を極めます。もう、どうしようもありません。

やむなく、長女を背負い、火の中をくぐりながら、目標の檀那寺、妙蓮寺を目ざして必死に逃げました。その途中、定代が「あつい、あつい」と泣き叫ぶので、おろしてみると、布団に火がついており、いま一步で焼き殺されるところでした。

ようやく妙蓮寺に着くと同時に、妙蓮寺も、周囲の水田にも、雨、あられと焼夷弾が落ち、たちまち、妙蓮寺が火災に包まれ燃え上がりました。その間、私は、墓場の中で、母や妻のことを考えたり、墓にそなえたさかきが、定代に燃え移りはしないかと心配したり、また、逃げる際、目玉まで焼かれていたので、苦しみがいたりしました。

母や、妻子が死没したのを知ったのは、翌日です。私の兄弟が教えてくれました。四人の死体は殆ど焼けており、残りを同じ場所で焼きました。いくら戦争とはいえ、一夜にして四人を失ったのです。ああ一神も仏もないものかと思いました。途方にくれ、今後どう生きてらよいか、生きるすべを失いました。目が不自由なため、最後までみてやることができず、いまさらながら、人生の無常を感じました。（後略）

生けるが如く

神野 清子さん（当時 中霞町）

ふり返ってみますのに、私は、昭和十四年一月六日に結婚、夫は呉服屋へ勤務し、間もなく独立、これからという昭和十六年一月十六日に召集令状をもらい、広島、台湾、フィリピンへと転戦。忘れもしません、昭和十九年八月八日、戦死の公報に接しました。誠に悲嘆の極みであり、とうてい筆舌にあらわされるものではありません。残された二人の子どもを抱え、途方にくれましたが、幸い、私は、昭和十八年、三菱第一工場へ就職しており、以来、戦後しばらくまで三菱電機へ勤務しました。さて、福山空襲の時は、紅葉町（霞町二丁目）に住み、郵便局へ勤務する父と、母、私、弟、妹、私の子ども二人の七人家族でした。

八月八日の晩は、いつもながら、もんぺ姿で、眠れないまま床に伏していました。空襲警報後、たちまちにして焼夷弾攻撃となり、あちこちが燃えはじめ、私は乳飲み子の尚侑を背負い、妹が安枝（三才）の手を引き、焼夷弾の雨あられと降るなか、以前から指示されていた明王院をめざし、まず、芦田川へと逃げました。私も、たくさんの人々にまじり、阿鼻叫喚さながら、逃げまどい、やがて、芦田川を川の中へ、川の中へと逃げのびました。

長い長い夜があけて、目ざす明王院へと行き、昼まで待ちましたが、父と弟が来ません。どうしたものかと一抹の不安を感じましたが、福山市街へは、とても熱くて入れません。やがて、誰かわかりませんが、父と弟が死没しているとの訃報に接しました。戦時下、覚悟していたとはいえ、目の前が真暗になりました。

父は、町内会の警防団の役員をしていたので、その責任上、みんなを逃がし、自分たちが最後となり、逃げおくれたのだと思います。父は、明地釣り具店の前で、服を着用し、ゲートルを巻いたまま、さながら、生けるが如く、眠っているようでした。おそらく、近くにあった木村染色工場の煙にまきこまれ、窒息死したものと思います。そして、弟は防空壕の中で死んでいました。病弱のため、「逃げよう」と言っても「逃げない」と答え、そのまま居残り、死没したのでしょうか。

私は、妹と一緒に、重い身体を引き寄せ、父と弟を並べ、足のほうからだびにふしました。いかに戦時下とはいえ、葬式もできず、父や弟を、我が手でだびにふさなければならぬ苦衷の程を察してください。油もなく、燃やす木さえありません。結局、十分に骨にすることもできぬまま葬りましたが、見るに忍びず、いまなお、くやしくてなりません。（後略）

私の戦争体験記

小道 幸恵（当時 霞町）

小学校一年生（当時は国民学校と呼んでいた）の十二月八日、大東亜戦争が始まったが、幼い私にとって、戦争とは、まだまだ身近に感じられず、むしろ、雑誌に載る日本軍の勇敢さに心躍らせていたものだった。

悲しい記憶は、何時から始まったのだろうか。

最初は三年生（霞小学校）の担任だった、まだお若い小土井先生が出征をなさった時だった。どうしてクラス中がそんな雰囲気になったのか、今もって定かではないが、とてもとても御出征おめでとうという空気ではなく、みんなが声を上げて泣き始める始末で、クラスの一人一人の机を順番に回ってお別れを言うてくださる先生も泣いていらっしやった。

昭和十九年、戦況不利の中を出征なさった先生は、それなりの覚悟だったと思うが、私達は、唯々、もう生きて先生とはお会いできないだろうと思うと、それのみが悲しく、家に帰っても、シクシクと泣き、戦争は厭だなと思った最初の出来事であった。

四年生に進級したが、その頃は授業らしい授業も余りなかったように思う。運動場を開墾して畠を作ったり芦田川の土手に雑草を刈りに行くのが日課となった。空襲も激しくなり、何時かは草刈中に空襲警報が鳴り、明王院の山に逃げた時もある。B29が、飛行機雲を残して頭上を通るのを、こわごわ見上げていたものだが、空の青さの中に何本かの真白い飛行機雲が鮮麗な記憶として残っている。

クラスの友達も一人減り二人減り疎開して去っていった。この頃になると、夜、服を着たままで床に就くのが常となり、一度や二度は必ず空襲のサイレンで起され、避難する有様に睡眠不足はどうしようもなく、その上食事らしい食事も出来なくなり、大豆の中にいくらかの米や麦のまじった主食、イモヅルのおかず、配給のパンを分けあって食べたものである。

日毎に痩せていく私を両親は心配して、せめて疎開させれば、夜だけでも充分に眠れるだろうからと、叔父の家に疎開する事となった。一学期の終了も待たず、七月の初めに両親と別れ千田村（現在の千田町坂田）の叔父の家に引きとられて行った。初めて親元を離れて暮らす心細さ、疎開先でも友達は出来たが、その子が学校から帰る迄はとり残された様な寂寥感、子供心に福山がひどく遠くに思えたものだった。

八月六日広島に原子爆弾が投下された。

原爆という事が分からなくて、特殊な爆弾だから、福山も危ないらしいと、両親に心配して手紙を出した矢先、八月八日の夜、叔母に起こされてびっくりした。山一つむこうの福山が真赤になっている。家の中には危ないと、布団をかむ

り土手をころがる様に下り草の茂みに身を隠した。ボンと爆発音が聞こえると、ザラザラと降る様に何かがいっぱい舞いおりて、電線や木の枝にひっかかってヒラヒラしている。それが電波を障害する為の銀紙テープと分からず、これはきつと広島と同じ特殊な爆弾だと勘違いしてその怖かったこと、本庄の射的場にあったドラム缶がボンボンと爆発する音、ヒューと敵機の近づく音、身近に弾は落ちないのに今にも落ちてくる様な錯覚、それはそれは長い夜であった。夜が明けると早速叔父が心配して福山の市中に入ったが、家の近くの防空壕で私の母によく似た人を見つけ、これは多分駄目だと帰ってきた。私は八月九日の朝、何をして何を考えていたか、朝食はとったのかどうか、今思い出そうとしてもどうしてもわからない。一夜が過ぎると唯ボーとして時を過ごしていたに違いない。

昼近く、やつれた母がやって来た。「お前と一緒になくてよかった。一人だから逃げられた。目の前で何人もの人が直撃弾でやられ本当に運がよかったとしか云い様がない」と、涙ながらに話してくれた。空襲と同時に勤務先へ出た父を心配していたが、父も元気との事、ここへ来る途中、知り合いの人に偶然会って、朝元気な父と会った由ホッとするものの、顔を見る迄は心配だった。やっと夕方、父もそろい叔父の家に落着いた。そしてそれ以後、高校を卒業する迄、千田村が第二の故郷となったのだった。（後略）

二度と繰り返すまい

小川 善太郎（当時 霞町）

それはちょうど夕飯を食べて、窓の手すりによかって夕涼みをしていた時でした。時間は九時ちょっと過ぎぐらいだったと思います。空襲警報ののち、本庄の方がパッと光って、真昼のように明るくなり次々とB29がやってきて、焼夷弾を落としていくのです。私達はすぐに防空壕の中に入りました。防空壕といっても、簡単に掘ってあるものですから、もぐらの穴ぐらいのものです。だから、穴の上に大きな平たい鉄の古金を置いていたのですが「カーン」と大きな音をたてて焼夷弾が落ちてきたのを聞いてここでは危ないと思い、すぐに逃げ出しました。畑に出てみますと、サトウギの間にブスブスと鈍い音を立てながら、焼夷弾がつきさざっているのです。

臨月の家内と息子は早めに逃がして、私と家内の兄貴とで「何くそ、これくらい防いでやるぞ」という気もちで残っていました。けれども頭の上から、バチバチ、バチバチ焼夷弾が落ちてきて、もうどうすることもできず、「こりゃもういけん。逃げようや」と言っ、いつ生まれるかもしれない赤ん坊のために、うぶ着を入れた袋と救急袋だけ持って逃げることにしました。私は、家内の実家の下関でもらっていた鉄カブトをかぶり、兄貴もちょうど逃げている途中転がっていた

鉄カブトを拾って、走り廻りました。

兄貴と二人で逃げている時、三才か四才くらいの男の子を背負った女の人と出会い、その人にも「早う逃げんと」と声をかけてそのまま別れ、通路を通って、今の「日の出市場」あたりまで逃げてきました。左の方に道三川の橋があり、その下にたくさんの方が身を寄せるようにして立っていました。その中に真壁のおばあさんが「もうわしは逃げん。ここで死ぬ」といって、女学校に行っていた孫の娘さんと一緒にがんばっておられました。さっき出会った女の人、子ども達を連れて、そこに立っておられました。

日の出市場の傍で、兄貴が私に向かって急に「そんなもの捨ててしまえ」と言うのです。何のことかと思えば、産着を入れた袋は邪魔だから捨てろよと言うのですが、家内の出産の為に必死でかかえてきたものを捨てる訳にはいきません。なにせ、もう今日明日生まれるかもわからないのですから。私は兄貴の言うことも聞かないでそのまま逃げ続けました。ふと何やら手がひりひりして熱いなと思ってみると、やけどをして赤くはれています。手袋をはめる余裕すらない有様でした。そうこうしながら、天野実業の東寄りの方まで逃げてくると、向こうから大きな太った人が、両手にバケツを持ったままの人を背負って引きずりながらやってこられるのが見えました。小川初美さんではありませんか。「門田さん、いい所で出会った。ちょっと手ごをしてくれえ」と息をつまらせながら頼まれるのです。背負われた人は酒屋の大將の杉之原さんでした。心臓マヒを起こされてバケツを両手にしっかりと持ったまま離さず、もう虫の息なのです。きっと火を消そうとされたのに。杉之原さんにはあまりにショックがひどくそのまま倒れたのでしょう。そこを通りかかった小川さんが助けようとここまで連れてこられたのです。私はバケツを杉之原さんの手からもぎ取り、兄貴は肩をかして小川さんと二人で大きな杉之原さんをかかえて焼夷弾の雨の中を、井上のみそ屋の畑に逃げ込みました。もうこれ以上、杉之原さんをかかえきれなくなり、その軒下に杉之原さんを降ろしました。すでに杉之原さんは息もなく、私達は物も言えない思いで「ここまで連れてきてあげたのだから」と、杉之原さんをそこに残しました。本当に両手を合わせる思いでした。

その時、味そ屋の主人が必死で家財道具を持ち出しておられ「てごをしてくれ」と半狂乱の状態で叫ばれたのですが、私達も命がけで逃げているのでとても手伝ったりする心の余裕すらありませんでした。頭の上からバチバチと焼夷弾が雨のように落ちてきてぐずぐずしていたら命はなくなってしまうのです。

桑原の鉄工所の所まで逃げてきたら、みんな川の中へ入ったり、鉄の下にもぐり込んだりしておりました。上の方から壘や障子などいろいろなものが流れてきていたのを覚えています。私も、川の傍の常夜灯の石に腰をかけてホッと一息ついた時、激しい痛みを感じました。さっきの両手のやけどがはれ上がっていたのです。はれた水ぶくれをかみ切って、汁をしぼり出し醤油をぬりました。しか

しこのやけどはすぐには治らず、一カ月半位してやっと元戻りになったくらいでした。ここまできて、やっと「もう大丈夫だ。助かったんだな」というような気になって、腰が抜けるような感じがしました。

その後、二～三日して、あの時道三川の橋の下で見た子どもを背負った女の人や、真壁のおばあさんと孫の娘さん達、大勢がそこで焼け死んでおられました。無残な死体は、そのまま放置されており、暑い夏の盛りなので死体はプーとふくれあがり唇がかえったようになっていて、とてもまともに見ることすらできない光景でした。その上、死臭がひどくトタンでおおわれていてもその臭いは消えるどころでなくいっそうひどく漂っていました。死体を見て、恐ろしいという気など起こりもせず、ただただ気の毒な思いと激しい怒りの気持ちでいっぱいでした。

私達親子は幸いにも無事でしたが、住む所もなく、家内は産気づきどこで産もうとって産むところもなくちょうど親戚の叔母さんが高野山の裏の方へ行ってみると焼け残りの家があったので、そこで部屋を借りて八月二十一日ようやくお産をすませました。その高野山の麓では、馬も焼け死んでいたそうです。（後略）

町が焼かれて 福山大空襲

塚本 孝子（当時 中霞町）

あなたは、戦争で福山の町がすっかり焼けてしまったことを知っていますか。昭和二十年八月八日のことです。B29という飛行機が九十機ほど飛んできた、しょういだんを雨のようにふらせ、町を焼き、三百四十人もの人を殺してしまつたのです。

そのころ、日本は、アメリカ、イギリスなどと戦争をしていました。男の人たちは、兵隊として南の島や中国などで戦っていました。残された人は、食べ物と戦争の道具を作ることにいっしょうけんめいでした。中学生や女学生は、工場で働き、小学生も、くわやかまを持って畑仕事をしました。学校の運動場は、すっかりさつまいも畑になっていました。それでも食べるものが足りなくて、みんなはいつも

「おなかいっぱい、ごはんが食べたいなあ。」と、そんなことを思っていたのです。

私たち女学生でも、兵隊のようなことをするのです。空しゅうで火事になったら、一列に並んでバケツを送り、水をかけて消すバケツリレー。

アメリカ兵が落下傘で降りて来たら、下からつき殺すのだとあって、先をとがらせた竹で、エイエイ、ヤーの竹やり訓練。

こういうことを、みんな本気でやっていたのです。

その間にも日本は、だんだん負けて、東京や大阪が空しゅうを受けました。

軍隊のいる町は空しゅうされるというのです。福山には暁部隊が、今のバラ公園の南の方にいました。大津野では赤とんぼ（練習機）に乗って、高校生ぐらいの男の子が訓練を受けていました。

とうとうB29がやってきて、たくさんのビラを落としました。

「福山も空しゅうする。みんな町からにげなさい。戦争を早くやめなさい」

その紙は、憲兵が来て、集めてしまいました。町の中には、家の道具をいっぱい積んで、ガラガラといなかへ急ぐ荷車がふえてきました。（中略）

とてもむし暑い晩でした。それでもきちんとモンペをはき、上着をつけてねることにしました。家の外はもちろん、家の中もまっ暗で、しんと静まりかえっています。電燈のまわりは黒い布でおおわれ、そのま下だけがわずかに丸く照らされ、まくら元の非常ぶくろと防空ずきんが、かすかにうかび上がって見えるだけです。

うとうととねむりかけたとき、（十時ごろだったそうです）キーンという音に続いて、バリバリ、ドーンというものすごい音。ねていた体がうきあがったような感じでした。

「空しゅうだ！空しゅうだ！」

だれかが大声でわめいています。びっくりして飛び出しました。家の前、二十メートルの所にある三菱工場（今の霞町）の中が、まっ赤になって見えました。組長さんが、「空しゅう警報発令！空しゅう警報発令！」

と、メガホンでさけびながら、家の前を走りぬけて行きました。道はもう、逃げまどう人でいっぱいです。

「防空ごうへ入ろう」

私は、まよっている母の手を引っぱって、家の横の隣の防空ごうに飛び込みました。

暗いあなぐらの中に二、三分もいると、暑くて暑くてじっとしておれなくなりました。「ここでは死んでしまう」

思い切って外に出ました。焼け始めた家々から出る熱風が、むっと私たちを包んでしまいます。家の前のおじさんが、

「芦田川じゃ、明王院へ逃げるんじゃ！」

と、自転車をかついで走っていきます。私たちも、すぐその方へ走りました。

空がぱつと明るくなりました。ザッザザーと夕立のような音がして、しょういだんがふってきます。ド・ドドーン、パッパパーンと火の玉がいくつも地上ではじけます。急いで道三川に飛びこみました。

しばらくして、ふせていた顔をおずおずと上げてみました。

時おり、南の方の川口小学校で照らす照明燈に、B29がびっくりするほど大きく銀色に光り、ゴーゴーという音が頭の上からひびいてきます。

北の空が、まっ赤に焼けて、どんだん家がもえています。

「早うにげよう。ここはあぶないぞ。」

川上の方にひそんでいた人たちが、道に上がって走り出しました。どこをどう走ったのかわかりません。ふとんをかぶった人たちや、年寄を背負った人たちを追いこしながら、ようやく芦田川にたどりつきました。

へたへたと土手にすわりこみ、焼けていく福山の町をふりかえりました。一面の火の海です。「あっ、お城が！」

見ると、天守閣の窓が火をふき出しています。やがて火に包まれ、上の方からくずれていくのを、私はゆめの中のできごとのように見ていました。

朝になって、婦人会の人が、たき出しをしてくださいました。おかゆのような白っぽいおしるをコップに一ぱいいただきました。

「焼けてしまったけど、それでも何か残っているかなあ」

ブスブスとくすぶり続ける熱い町の中へ、ゾロゾロと帰る人がふえてきました。私の家もすっかり焼けて、かわらの山でした。あの防空ごうの上に、黒こげになったかぼちゃが二～三個ころがっていました。

「ああ、この防空ごうの中にいたら、むしやきに……」そう思いながら、台所にあつたあたりをさがしてみました。お皿や茶わん、なべなど、何ひとつ役に立つものはありません。

何よりも悲しかったのは、近所の人は何人も死んでしまったことです。空しゅう警報を知らせてくださった組長さん。「わしはこの家からにげんど」と言っておられたとなりのおじいさん。子どもをかかえたまま家の下じききになって焼け死んだ三げん先のお母さん。

火の手が一ばんにあがった三菱工場の防空ごうでは、何十人もの人が焼け死んでいました。私が通ったとき、その人たちには、こもがかぶせてありましたが、その一ばんはしに、ひとりの女の人がみえました。十七～八才くらいでしょうか。手足はパンパンにふくれあがり、三つ組したかみの毛が顔にまつわりついていました。

一目見て、私は息がつまりました。

「きのうまで、あんなに元気に働いていた人が、こんなすがたになって……」

それから一週間して、戦争は終わりました。（後略）

皆んな生きていてよかった

吉川 艶子（当時 道三町）

あの頃、私は救護班でした。

主人は警備隊の班長をしていて警報がなると何時もの様に外に出て行き、隣組、町内を見廻りしていました。（中略）

当時私は、運よく神島橋のふもとに、廃川地を百坪ばかり払い下げてもらって、そこに小さな小屋がけをしていました。

八月八日の朝、いつもの様に五時頃起きて麦御飯をムシカマドでたき、味噌汁を作り、つけ物の世話をし、弁当を作って、六時半頃主人が出勤すると、「うさぎ」の草を取りに廃川地に行きました。その時疎開物資、メリケン粉、ソーメンや米等の食料を、ウバ車につんで持って行きました。

この様な疎開が数ヶ月は続いたと思います。私の家ではこの小屋に寝具、建具、食料品、調味料、畳まで疎開しておいたのですから大変助かりました。

兎の草を刈り、野菜物の耕作をし、とり入れをして、それをウバ車に乗せていつもの様に家まで帰り、私は助産婦が仕事でしたから、自転車に乗って赤ちゃんを沐浴に行ったり診察したりして廻ったものです。

その日は晩の六時頃、主人が帰り、風呂に入って食事し、寝ようかと言っていた頃、警報が鳴りました。

急いでモンペをはき、防空頭巾をかぶり、救急箱を肩にかけて飛び出しました。市の周辺部から照明弾、焼夷弾が雨の様に降り、燃え始めました。

その内に主人も戻り、逃げる様に言いますので、裏に出て見れば附近には人は居ません。井上味噌屋前で二、三人と逢いました。一緒に走りながら火をよけ、火の中をくぐりながら御大師道を逃げました。

今の体育館へ行く道が、まだ小さく、土手（堤防）だった、その道を逃げたのですが、八十番のお大師さんですか、常夜燈と並んで建っていた所の前で、直撃を受けた十六、七の女の子（君ちゃんと言った、つけ物屋の娘さん）が、たおれているのを見ました。おそろしくなって、附近の防空壕に入ろうと思って入りかけたなら、下江のお爺さんが「いけませんで、今防空壕に入ったら命がありませんで」と引っ張ってとめて下さって命拾いしました。

主人と、護国神社（今の体育館、競馬場のあたり）へ逃げる約束だったが、見ると護国神社もすでに燃え上っていた。

引き返して、草戸大橋のたもとあたりで、「つや子、つや子」と呼ばれるので振り返って見ると、主人が元気な姿で来ていました。私は、やれやれ良かった、良かった、と涙が出るほど嬉しかった。元気を出してくれと言われまた涙でした。

「うちは焼けてしもうた」

「近所も焼けてしもうた」

と言って、「廃川地の小屋がどうなっとるか見てくる」と言って、神島橋のふもとまで行って来ました。

二,三十分もしない内に戻り、

「小屋の前に行ったら地吹のお父さんがずぶぬれになって泣いていた。」

「おお、お前生きとったか、私は一人になってしもうたんかと思ようた。」

「艶子も生きとるで」と言うと、また泣き出した。

私も一緒に廃川地の小屋に行き、

「おお、よう生きとったのう」

と喜び合っている所へ、地吹の母キサオや妹の君子もやって来ました。

「お父さんたら、私等を置いたまま一人でどんどん、どんどん逃げるんじゃないものを」と言ったりしたが、皆んな九死に一生を得た思いで喜びあった。(中略)

九日の朝はイモガユを作りました。飲み水だけは川向うのお百姓さん(谷屋と言ったのでしょうか)にお世話になったが、夜が明けて、芦田川で水浴びをし、行水をし、顔も洗い、にたきの水は皆芦田川の水を使い、洗濯も芦田川でしました。芦田の小林さんとも親しくしてもらっていたので、ここの御世話にもなりました。

朝うち、主人と一緒に道三の家に帰って見ると、家は焼けてしまっていたが、風呂は残り、御近所の皆さんが当分活用なさった様でした。下す板も焼けているので瓦を替りにしたとの事でした。

翌日のために用意していた御飯が丁度良いかげんにたけていました。上のふたは焼けこげていましたが。

この朝、近田のおじさんも手伝いに来て下さり、髭を生した人が吉川さんの手伝いをしていると有名になったものです。

家の下の一間角くらいの防空壕を掘り起してみると、保存して置いた一かますほどの南京が、これまた丁度食べ頃に焼けていました。通りがかりの兵隊さんや、御近所の人達にもお分けしたものです。一緒に入れておいた米や麦は、置き場所が悪かったせいか炭になってしまって居ました。

もう一つの防空壕を貸し家の近くに掘って、(中略)食器類を主に、日常の陶磁器をしまっておいたが、これは皆助かりました。

衣類は、近田へ洋服ダンス等を疎開し、鳴谷へは長もちや間ダンスを疎開しておいたのでこれも助かりました。

家の前道の向うが畑で、正木のお爺さんが作りに来られていましたが、そこに道三町としての防空壕があり、コの字形で一、二間くらいの大きさでしたが、そこで三人ほど亡くなりました。

あの日の晩「芦田川の方へ行くのはどちらですか？」と聞かれた人達だと思いますが、教えてあげたのに、また戻って来て、壕に入り亡くなったのでしょう。

霞町へ大阪の方から疎開して来た人だと言うことでした。

九日の夜は、蚊帳が二つあったので、地吹の父母と、私達と蚊帳をつつて野宿しました。父母が外で休むのですから、私達も外で寝ました。しかし、疎開していたり、少しでも耕作して作っていたので、食料もあり、有難く思いました。

近田のおじさんが、これでは体に悪い、是非来い、と言われて、私達も近田へ二、三日、鳴谷へも一週間お世話になり、主人が大工なので急いでバラックを建てて道三の生活に戻りました。

神島橋のふもとと、道三までの道筋、現在水道局になっている前の川の橋の袂に、おばあさんが正座をしたまま、橋脚にもたれて亡くなっていたのが、一週間近くも放置されていた様に思います。そこを通るのが恐ろしく、今も忘れられません。

芦田川の土手で、九日、十日、十一日頃でしたか、死人を焼きました。そのいやなにおいが二、三日は続いたでしょうか。（中略）助産の最初の仕事は、空襲後一週間もたってからだったでしょうか、同じ道三町で、頭があたるほどの、せまい小さなかけ小屋の中で、産ぶ湯さえ十分に使えない状態でした。ほんとうにかわいそうでした。当分はバラックの中でのお産でした。（後略）

「私が犠牲になってあげる」と言い残して

佐々見 充代（当時 地吹町）

私達は戦時中、父（一男）、私、妹の博子、信子とおばの喜美子（当時二十才）の五人で現在も住んでいるこの地吹町で八百屋をしていました。私は父の手伝いをしていました。といいますのは、当時の八百屋は配給所も兼ねていまして、地吹町一帯へ野菜、砂糖、メリケン粉等の配給をしていまして毎日いそがしかったからです。空襲に備えて庭先に三畳ぐらいの防空壕を掘り、日用品を入れていました。八月に入って、広島がピカドンにやられたということを聞きましたし、福山空襲の予告ビラ「福山良い町、灰の町」がB29によってまかれたということも聞いていました。枕元には防空ずきんと食糧、ローソク、マッチ、薬など入れたリュックサックをいつも置いていました。

あれは二十年八月八日の夜九時前だと思います。みんなと「空襲がきたらいけんから、早く寝よう」と言って寝るしたくをしているところでした。

空襲ということで、枕元にあったリュックサックをかつぎ、頭から防空ずきんをかぶり、夢中になって女四人で草戸の方へ向けて逃げだしました。足元の田は田植えのあとのようだったことを覚えています。

その頃は上空をB29が旋回し、まず照明弾を落としながら、福山市周辺の奈良津、本庄のあたりへ焼夷弾を落とし始めた頃です。ようやく芦田川土手に四人でたどりつきました。土手の上から市の中心部の方を眺めると、福島紡績が真赤に

なって、時々ドカン、ドカンという大きな音と共に燃えていました。お城は周辺が燃えているのでくっきりと火に照らされて見えていましたが、やがて炎につつまれてしまいました。上空ではあいかわらずB29が何回も旋回して焼夷弾を落としました。しつこいくらい何回も何回もです。

そのうち、芦田川へも落とし、明王院の周辺にも落としました。私たち四人は恐ろしくなって土手へじっと伏せていました。下の妹が「恐ろしいなー」と言って震えていました。その時です。お婆の喜美子が「私が犠牲になってあげる」とみんなにむかって言いました。お婆の母親はすでにこの世になく、私達の母親も一年前に病死していました。私達は女四人だけなので、一番年上のお婆がみんなをはげますような意味で、もしもの時は、「私が犠牲になってあげる」と言ったのだと思います。

まわりは火の海で真赤になっていました。四人は恐る恐る対岸の稲荷さんに向かって逃げ始めました。現在もある草戸稲荷へ通じる一段低くなっている中橋を渡っていた時です。上空であんなにしつこく焼夷弾を落としていたB29も一機、一機と飛び去って行って、最後のB29が飛び去ろうとしていました。その最後のB29が上空を通過する時、下からぼ、ぼ、ぼというような感じで照明のようなものがあがるのを見ました。「誰かが信号を送っているのかな」と思いました。バラバラと焼夷弾が落ちて来ました。真上を見たら星みたいなものがザーと落ちてきました。これは危ないと思って、四人で小さな川へ飛び込みました。四人でそこへ座り込みました。ドカンという音がすぐ近くでし、私は瞬間的に水の中に顔をつけました。まわりの草はパチパチと音を立てて焼けて、パーと周囲が明るくなりました。

しばらくたって私は水の中から顔をあげました。長い間、顔をつけていたので息が苦しくなり、全身ズブぬれで体が冷えてしまいました。私の前にはお婆の喜美子がまだ顔を伏せて水につかっています。ほんの目の前で手をのばせば届く距離です。「喜美ちゃん、しんどいからもう顔を上げ」と言いました。でも返事がありません。よく見ると、焼夷弾の直撃を受けており、ごつい防空ずきんも裂け、みけんをやられています。

びっくりして抱き起したら、「ゼエゼエ」と苦しそうな息をしており、まだ心臓は動いていました。抱きおこすのに、私が体をかかえるとメキメキという骨の折れるような異様な音がしたのを覚えています。何度も呼びかけてみましたが、うんともすんともいわず、やがて息を引き取りました。

私のかぶっていた防空ずきんをそっと顔にかけてあげました。土手に運び、静かに横にしました。悲しみがこみあげましたが、思えばあの「私が犠牲になってあげる」という最後のお婆の言葉が、この運命を予期していたのでした。

私達は不思議なくらい素直に、お婆の死を受け入れていました。お婆は私達の身代りになったと思いました。あんなにしつこく爆撃をくりかえしていたB29

も去っていました。全てが終わったのは午後十一時頃でした。

おばは直撃を受けたのに顔は幸いきれいで、死んでいるようにはみえませんでした。土手におばをねかせながら夜がふけていき、夜明けになりました。通りがかりの人に「直撃を受けているから、地吹の佐々見へ知らせて下さい」と頼みました。夜が明けて、どこかの人に戸板をもらい、それに載せて家へ帰りました。

(中略)

家も焼けてしまっていたので、知り合いの所から箱をいただき、その中におばを入れました。御大師さんのお堂にいましたら、「草戸の土手で死体を焼く」ということなので運んで行きました。府中から森下のおじさんも手伝いにやって来ました。みんなで見守る中、おばは焼けていきました。きれいに焼けるまで長くかかりました。焼ける間中私は「おばは、犠牲になってあげる、といていたが、本当になってしまった」と心の中で何度も何度もくり返していました。

もう、あれから四十年たちました。

火の海の中で

相川 タミ (当時 道三町)

「5時までには来てください」校長先生のお言葉に、私は夕食を早く済ませて学校に出かけた。南側の校門の大柳の下に作られた防空ごうの所に行った。もう男の先生が四、五人来ておられた。正門そばの防空ごうには、近所の人達がつぎつぎ来ておられた。空高く飛ぶ敵機の音に胸を驚かせながら、防空壕ごうを出たり入ったりした。

九時頃だったと思う。つぎつぎと飛んでくる敵機から焼夷弾が落とされた。火花が散ると思うと間もなく、家が燃えだす。子ども達の泣き叫ぶ声があちこちから起こる。あっ、という間に町は火の海になった。

校長先生が、「福山城が燃えだした！」と大声で叫ばれ泣かれた。

立ち並ぶ家、家も、次第に焼きこがされていった。東の空が明るくなりかけた時、爆音も次第に衰えてきた。校長先生が「先生方も、お帰りになってください」と言われた。私は、家に向かった。元の誠之館の運動場を横切っていたらタツキの御主人に出会った。「先生のおうちは焼けておりませんよ」と言われた。まさかそんなことが……と思いながら、胸を躍らせながら急いで帰った。

駅前通りから、自分の家の方にまがって驚いた。東京から疎開して来ている姉の子供（たしか小学四年生だったと思う）が「おばちゃん」と走りよってきた。元気でいてくれてよかった！と瞬間涙が出て仕方なかった。

私の家の西隣は道を隔てて大分向うまで焼けている。東隣は、私の家を含めて、三軒が焼けていない。こんな奇跡があるのか！と驚いた。

私の父は堅い人だった。「各自の家は、各自で守れ！」との市からの伝達をかたく守って、家から一步も出ようとしなかった。しかし、道路は火の粉でいっぱい。隣の家も焼けだした。「もう、どうしようもない」と、父と母は西に向かって逃げかけたようだ。

野上町の曲がり角まで来たが、道は火の粉がいっぱい、どうしようもない。同じ死ぬのなら、家で死のう、と、家までかえって見ると、西側の垣は燃えており、大屋根にも移っている。もうどうしようもない！とすべてをあきらめようとした時、家の前の畑の中の大柳の下に作っている防空ごうに避難しておられた方々が「相川さん！消しなさいよ！」と皆さんが出て来て消して下さったようだ。今でも、このことを思い出す度に、皆様の御厚情が思い出されて、涙が出て仕方がない。

でも、家がいくら残っていても、子ども達がどうしているか、と思うと心配でならなかった。展子（長女）は霞町の叔母が、草戸に空襲警報が鳴るとすぐ連れていって下さった、と。定義（長男）は、近所の方々と、芦田川の方に避難しているはずと聞いて、私はすぐ芦田川に向かった。

焼夷弾にやられた死骸が一つ、また一つ、道にころんでいる。生きた心地はしなかった。

人声が聞こえてきた。長男がいる。お隣の息子さんもおられる……嬉しくって嬉しくって息子の手を引っ張るようにして家まで帰った。

晃敏は？「あれは、お父さんが連れて、川口小学校に行っている」と言うことだった。丁度その時、今津町から見舞いに来て下さった叔父が、川口まで行って下さった。

細いたんぼ道を通って、連隊のそばまで来た時、小さい川があり、石の橋がかかっていた。その橋の近くに、死骸が、二つもあった。可哀そうに！と話し合いながら、ただ、ただ、子供が元気でありますように、と祈りながら急いだ。学校の門まで来た。運動場の真向うの窓に、息子が、首を出してこちらを見ている！私は一目散に走った。「晃ちゃん！」と声をかけた。私の声に驚いた顔で「お母ちゃん！」と背伸びして、手を出した。じっと抱きしめた。涙がとめどなく流れてはるかかった。（後略）

チャボを抱えて

伊藤 美智子（当時 霞町四丁目）

私の母伊藤シゲコは早くから父を亡くしたため、叔父に当たる小島久市、コト夫婦に何やかや、面倒を見て貰っていました。（中略）私の家族は、父、末治が呉の海軍工廠へ出て居りましたので、美容院をしている母と一人娘の私だけが現在所に残っていたわけです。空襲の晩は、私は何時ものように、そそくさと「おじや」等を食べ終わると、父の兄が住む津之郷の方へ行っていました。

母の言うには、空襲の晩、この場所古宮町から地吹町の方へに逃げていたら、自然に小島夫婦と会い、一緒に土堤の方へ逃げたということです。

その土堤は、ちょっとした窪みになっており、上から母の叔父の小島久市が平素大事にしていたチャボを抱えてしゃがんでおり、すぐ下に叔母の小島コト、更に少し離れた下に私の母の伊藤シゲコがしゃがみ、空襲に耐えて、敵機が去るのを待っていました。やがてどれ位時間が経ったのでしょうか。一番上の叔父が妻のコトの方へ急に寄りかかってくる気配を感じ重たいので、「まあオジサンはどうしたんじゃろ」とその方を見上げた叔母と私の母の目に、かぶっていたフトンにポッカーと穴があき、力なく横たわる久市の姿がありました。「こりゃ大変だ」と皆で抱き起こしても、はげた頭に直撃を受け、おまけにスネから足にかけ骨折して傷ついている痛々しい体はぐったりとして答えは何もありません。

すぐに私の母の気転でいち早く手続きを済ませると遺体を佐波の親せきの家まで運び、そこで包帯を巻いてやり、翌朝、かけつけてくれた知人の方からの知らせで来ていた私も含めて、八月九日午後一番に神島橋よりずっと下の土堤で火葬したというわけです。

私もこの小島夫婦にはよく可愛がって貰った記憶があるので少し離れた方で冥福を祈っていました。又後で聞いた話ですが、近所の佐々見さんところにも同じようになくなられたんですが、その日うちと同じ所で焼かれていたそうです。八月九日に私のいた津之郷からリヤカーを一台出して現場まで迎えに行ったのを今だに覚えております。（後略）

神戸出張中妻子を猛火に奪われて

藤井 正（当時 古宮町）

昭和二十年八月八日朝十時頃、便利屋の親方に言われて、ラムネ屋のKさんと、三時頃福山駅から神戸へ出発しました。親方は憲兵隊のYさんに頼まれたのかも知れません。なすびや胡瓜など野菜を大量に持って、神戸の駅から山寄せの方へ行きました。そんなに大きな家ではなく普通の家でした。その家に着いた時、ラジオが「福山は只今空襲中」と言っている放送を聞きました。しかし、一晚神戸に泊まって、翌日の朝、駅に行くと、「汽車は大門止まりだ」と言います。

大門駅から深津の辻の坂を通り、松原、三枚橋までは「何の事はない、大した事はなかったな」と安心しかけたのですが、延広町のあたりからは、福島紡績のへいがさから向うは何もない、焼け残りの電柱が所々みえるのと、薄煙りが立っているだけでした。

当時私の家は古宮町だったので、「やられたな、でも皆んな生きてさえいてくれれば……」と思いながら霞町を出てみるとほとんど何もない。「こまった……。」

そうこうしていると、女房の父親が出て来ました。

「防空壕に入って皆んな死んでしまった。すまん事をした。」と言うのです。

前の日、町内会関係から、広島の実験からの注意でしょうか、嚴重注意があったようです。そのせいで防空壕に入ったのでしょうか。防空壕は頑丈な木作りで、屋根には石のコップを大量に積み込んでぶあつい屋根を作ったものでした。（中略）

女房の実家がちょうど防空壕の前だったので、実家のおばあさんが、火のまわりがあまりにも早い様子なので、「早よう出んと！逃げられんようになるよ！」と言って防空壕のふたをケツタリしたが、私の長女の睦子だけ出たらしく連れて逃げたようです。睦子は、芦田川の鞆鉄橋のあたりで、西井の石工職人であった大槻さんが「お婆さん、睦ちゃん死んどるじゃあないな。」と言うで降ろして見ると、ぐったりとしていました。お婆さんは「水の中につけて初めて正気付いた」と話していました。

小さな子供が、母親に背負われたまま死んだ例は、私は外に多く聞いています。

（中略）八月九日の昼はあまりにも暑く、防空壕も頑丈なので「暑うていけんけえ、防空壕のかたづけは明日にしよう」という事で「何とか逃げていてくれよ」と心に念じながらその日は休みました。明けて八月十日、防空壕を掘りました。八人が中で死んでいたと思います。男とも、女ともわからない様な状況でした。人間の石焼きいもの様な形でした。まっ黒こげで、背中の方はいもがこげた様な恰好で、水をかけながら洗い、さらしました。さわれば、皮がクルッとむげる

状態でした。女房はモンペの柄で「とも子」だと言うことがわかりました。

郁男は、いろいろしていたら首が離れました。

焼けトタンにのせて、交番の前に並べました。その日も、くろこげの死体が、もう十ばかりも並んで居たかと思えます。

その頃、セーラー服の女の子が、水の中で死んだのか、水を飲んだせいでしょう、おなかをまんまるにして死んでいる姿を見ました。

防空壕の中で一緒に死んだのは、石屋の主人西井宗八、妻若菜の夫婦と、子息輝雄、嫁の美智恵、近所の四才位になる男の子だったと思えます。皆んな、あつくなつたのか、外へ出ようとしたらしく、入口の所におり重なって死んで居ました。

石屋のぼうずで来ていた高等小学校を出たばかりの子は、ずいぶん皆んなでさがしましたが、一ヶ月くらいも過ぎて、近所の壁の下敷になって死んでいるのがわかりました。（中略）

トモ子も、郁男も、交番の前からトラックに積まれて芦田川で火葬にしました。遺体を、焼けトタン板から、トラックに投げ上げるので、心が痛みました。トモ子も郁男も、遺体に針金をまわしたりして印をつけて置いたのですが、多くの死体を焼くので、結局は誰の骨かわからなくなってしまいました。（後略）

母の年齢を越えた今

高山 シズ子（当時 地吹町）

七月三十一日米機から福山を空襲する予告のビラが市内へまかれ、田尻で被服廠の仕事をしていた私達の引率の浮乗先生から他の人へいわないよう注意されましたので、私は見せてもらっていませんが、友達は「福山空襲の記録」のグラビア写真と同じだったとっておられました。また二回目は八月に入ってまかれたと思えます。記憶はうすらいでいますが、女学校二年の頃だったと思えます。灯火管制でガラスには紙をはり、夜は窓、入口には黒いカーテン、電灯には部屋を暗くするため覆いをして外へ光が漏れないようにしました。

岡山や呉と刻々福山へも魔の手がしのびよりつつあるように思えた矢先の八月六日、広島が新型爆弾で全滅との噂が、朝、田尻へ行く途中古野上町の鞆鉄道の駅で待っている時、人から人へと伝わりました。夕方友達と福山駅で待ち合わせして行きましたので駅に行きますと、真黒い顔をして毬のようにふくれ目は開かなく、唇はむくれ上がっている。服はずたずたにぶら下がっている。一人で降りてくる人、つき添いのいる人、矢張り広島で何かひどい事が起つたのだと直感して友達と早々に別れて家に帰り母に見た光景を話したら、姉の身を案じて泣いていました。（中略）

二つ年上の好子姉さんが広島の曙部隊本部へ軍属として四月から行っておりました。でも晩には広島から姉の勤め先に連絡があり「宇品だった為無事で今日は炊き出しに出た」との事で家中の者は安心して休みました。

その頃私達は学徒動員で広島被服廠の仕事を県立福山高等女学校でやっていましたが、七月から神辺と田尻の二組に分かれ、私は田尻教室へ行っていましたが仕事は来ません。引率の浮乗先生（現在日展書道審査員浮乗水郷）から、ペンや毛筆で字の練習をとのすすめで大方練習時間と午睡時間を取り、時に潮干狩りに行きました。

八月八日も午後潮干狩りで帰りが遅くなり、明朝食べられるよう砂を吹かす為、貝を井戸端において風呂へ入り早く休みました。昼間の疲れでぐっすり寝込んでいると急に起こされ、いきなり空襲警報が鳴ったとの事で、慌てて服を着ていますと、西の方で大きな爆音がしてパッと明るくなりました。照明弾です。家の前は地吹町の荒神さん、草戸へと向けて子供の名前を呼ぶ声、家族同士が確認しあう声、敵機襲来の不気味なサイレンが鳴り続け、飛行機の旋回する音、あっちこっちで焼夷弾の落ちて炸裂する音、サーチライトの敵機を追って走る光、もう何時もの練習ではありません。私方では明王院の所の法音寺を避難場所と定めていたので、母と姉二人に私とで防空頭巾（座ブトンの片方を合せて止め紐をつけたような物）、肩からかける布カバン（常備薬、代用食大豆をいった物、三角布）、布団、毛布等を各々が持って表から天理教の横の細道（今は霞町ファニーが出来て自動車を通るにぎやかな広い通りになっている）を抜け、軌道の線路へ這い上がりますが、親子の通った跡へ焼夷弾が落ちているのです。振り返りますと天理教は燃えていました。生きた心地ではありません。

当分着ない冬物、姉達の花嫁用の着物、洋服、夏の洋服は着ることがありませんので、大方預けました。

目の前には衣料品を疎開させていた高田宅が燃え、県土木出張所も燃えて、辺りは昼間のように明るく、飛行機からは人々の右往左往しているのが分かっているかのように、容赦なく焼夷弾が赤い玉（七～八cm位の大きさに見えます）のようになって、ザアと大きな音をたて、落下して来ます。飛行機の轟音と人間の阿鼻叫喚の声、全く生地獄です。頭上に気をとられ、足元に人の伏せてる事も、南瓜、茄子、トマト、芋のつる、ゴマの林をさける余裕はありません。ニュース映画や新聞写真等で見ました中国、南方の戦場の有様が目の前で起っています。草戸側へ辿り着き、稲荷様へ行く中橋へ向って、また、走ります。この時は飛行機は他へ行っています。保子姉さんがいないのに気がつきました。道端に焼夷弾の不発弾が落ちていました。一メートル四十センチ位ありましたでしょうか。（皿海クリーニングの西）

芦田川の土手までがとても遠く長い時間がかかったような気がします。空襲が激しくなる二、三年前までは、春の卯の祭にはこの道は露天が中橋まで続き、友

達と親と綿菓子,サトウキビ,オモチャ,植木等,帰りに買うのを楽しみに参ったものです。芦田川の土手に上がる手前で今度は機銃掃射です。谷口さんの家の前の石橋に飛び込みました。豊半分位のところへ,何人も頭かくして尻かくさずの状態です。三十分程,胸までつかって抱き合っていました。ダッダッダッ……。バリ,バリ,バリ……。田んぼの中の一軒家で,ここも田んぼの中は人の群れ,奇声,わめき声,でいっぱいでした。(現在は鉄道,土手がつき,跡かたもなくのどかな住宅地になっています。)飛行機が去り,法音寺橋に向けて進み,やっと父に会う事が出来ました。この時近所の渋谷のお姉さんが一緒でした。父に会えた喜びと,恐怖で泣けて涙は次々と吹き出しました。皆んなで急ぎ芦田川へ,でも途中何人もの死体が,中橋にもたれたり,うつ伏せになったりした数名の死者を見ました。そばに生存者がおられないと,家族全員なのだろうか,生存者は避難されたか気の毒にと思っても,我が身の事で精一杯です。中橋をぞろぞろ行く人,川をつかって渡る人,避難者集団が続きます。必死で山の麓へと法音寺に辿りつけば,そこにも足のふみ場もないくらい,疲れはてた罹災者達が横になっていました。(中略)

翌朝早く両親と渋谷のお姉さんは家の跡へ,私と長姉は保子姉さんを探しに妙見さんの方へ,途中,人が集っていると尋ね,また次へと,やっと妙見さんで姉を見つけ嬉しかったことと,どっと疲れと眠気で三人抱き合っただけで座り込んでしまいました。家を出たとき私達にはぐれた姉は,地吹町から大正酒造前の道を草戸大橋へと人に流されて,妙見まで来てしまったそうです。でも恐ろしい目にあわず,飛行機の旋回している時は,軒にかくれて進んだそうです。僅か二百メートルの間で経験した危険には大きな差があったようです。

父母からの話では,家の跡はくすぶっていました。前のどぶ川(道三川)は逃げおくれた人達が川につかって蒸し焼きになって水ぶくれで浮いていました。裏の老人は覚悟の死を選ばれたようでした。隣が大きな材木屋だけによく燃えたようです。井戸に投げ入れたフトン,毛布,少々の着替えの服は無事で,アサリは蒸し焼きにしたようにはじけていました。床下に掘った防空壕に慌てて入れた瀬戸物,鍋,釜等は無事でしたが,とても熱くて立っておられません。渋谷の小母さんは駅の防空壕にかくれて無事でした。(中略)

冬がやって来ます。両親,姉達で,毎日の食事や着る物に大変で私は山へ薪を集めに行っていました。

戦争が終わってから既に四十年,私も当時の母の年齢をこえました。あの頃の記憶もだんだん遠くなって,知らない世代の方が大半を占めるようになって,戦争のこと等ほとんど無関心とも言える時代になりました。

自由な時代をはきちがえて,勝手気儘な生き方も横行しています。焼夷弾の下で必死に皆が,かばいあって逃れたあの恐ろしい体験は,もう二度と子供,孫の時代にあってははいけません。あの生々しい記憶があるだけに,今の平和が本当にあ

りがたいと思い、大切にしていかなければと思います。

寄りそうが如く 母と妹の死

小林 まさこ（当時 古野上町）

あの頃、私たちは、しゅうと、しゅうとめ、私、義妹、子供二人、合計六人が古野上町に住み、畳屋を営んでおりました。夫は二度目の召集を受け、福岡の太刀洗飛行場へ出征していました。

空襲当日、私は勤務先の石黒木工から帰り、夕食をすますと、スガ子（長女 五歳）が「山手のおばあちゃんのところへ行く。」と言ってどうしても聞ききません。やむなく、九時頃、子供たちを連れ、山手の実家を訪ねました。

実家に到着するや、間もなく、B29が来襲し、まず照明弾を投下、周囲は真昼のような明るさとなりました。それから、約十分後、十時を少し廻っていたと思います。B29が続々と編隊をくんで来襲し、市の周辺部より火の手があがりました。ついで市の中心部に対して、焼夷弾による無差別攻撃がおこなわれ、たちまち、全市は猛煙、猛火につつまれ、火災は天をこがしました。

さて、私は、なんといっても、古野上町の家の方が心配でなりません。特に、おじいちゃんが病気でぶらぶらしていましたので、余計にあれやこれやと気がかりでした。翌朝三時頃、「古野上の人たちは、山手沖公民館へ避難している。」との情報を聞き、急いで弁当をつくり持参すると、おじいちゃんがぽつんと道路にすわっていました。「おじいちゃん！よかったね！」と喜び合い、ついで「おばあちゃんは。」と聞きますと「おばあちゃんは、わからん。」と言います。さらに「妹は」と聞きますと「サヨコもわからん」と心配そうに答えました。やがて、親せきの者たちがやってき、それぞれ手配して探しましたがどうしても消息がつかめません。

一夜にして、福山市は一変し、見渡す限り焼け野原でした。郊外であった古野上町でさえも、一軒しか残っていません。私たちは、焼け跡を一生懸命に探し求めました。古野上町から本庄に通ずるあたりでは、たくさんの方が亡くなっていました。田んぼの中や、あぜ道で黒こげとなっている人、川原でむしろをかぶせられている人、十何人もおられたと思います。川から岸へと遺体が引き上げられたのでしょか、川にはたくさんの油が浮いていました。今思えば恐ろしいことですが、何しろ、戦時下であり、気がはっていたのでしょう。そうしたなかを、ただ二人を求め、無感動に探し廻りました。

こうしてやっと三日目。お金に困り防空壕を掘ったところ、二人の死体がみつかったのです。そのときのことは、悲しさのなかにもようやく会えた喜びもあり、なんと表現してよいかわかりません。妹は国鉄に勤務していましたが、その

ままの服装で身体を布団でぐるぐるまきにしており、その上におばあちゃんが鉄かぶと姿でおおいかぶさっていました。よく見ると、おばあちゃんは背中が焼けていましたが、妹の方は全く傷がありません。炎と煙の中……、きつと身をもって我が娘をかばったのだと思います。悔やんでも悔やみきれません。

遺体は、市役所よりの達しで、市役所前へ車で運び、それから二、三日して、草戸大橋土手で、家族により火葬にふしました。

考えてみますのに、あの日は町内の組当番の日でした。そのために、おばあちゃんたちは逃げるができなかったのだと思います。かえすがえすも残念であり、無念でなりません。おばあちゃん「コマン」は五十六才、妹「サヨコ」は十九才でした。

ザクロのように

畑 オエイ（当時 古宮町）

あの一夜にして十万以上の死者が出たという広島原爆にも匹敵する東京大空襲、それより少し前から私は東京に出て、神田の結核予防会本部の保健婦として勤務していました。毎晩のように鳴る空襲警報のサイレンと近くの高射砲がドン、ドーンと打ち上げられるのを目の当たりにしながらの毎日でした。

あの日の大空襲では、ほとんど東京が消失しましたが、私のいた所は、都心からだいぶ離れた郊外の鉄筋の建物にいましたから、余り被害もなく直接空襲の恐ろしさにも、出くわさなかったのです。そしてそれよりはるかに、地方都市なので絶対安全だと思い込んだ福山に帰郷したのです。その頃私と姉は、二人で古野上の自宅で暮らしていました。家族は両親と姉の子供が一人いたのですが、少し離れた草戸に毎晩疎開させ、小屋を建て、寝泊りしていたのです。

福山の空襲当日、あの忘れもしない八月八日の晩、警戒警報発令後、ただちに空襲警報、あっという間に昼もあざむく閃光です。私も「これは大変だ。」と思い、当日は珍しく「気分が悪いから」と早くから横になっていた姉を起こし、今の土屋の酒屋さんあたりまで逃げて来ていました。防空頭巾とモンペに身を固め、夏ぶとんを上からかぶりながら、多くの人達と火の中を右往左往逃げまわりました。敵機が落とす焼夷弾の雨アラレの「ザーッ」という音と火焰の中を必死の思いで逃げました。それまで調子の悪かった姉の手を握りしめていた私は、「フッ」と何かのはずみで手がはずれ、その時、「パッ」と白光が走ったように思っ、思わず「姉さん」と叫んでいたのです。と同時に何かいいようのない不吉な予感に打たれたのです。が、私の近くにも、バラバラと焼夷弾が落ちて燃えだしたので、前の川に入り、敵機が去るのを、じっと待ちました。どれ位たったか、あたりが少々明るくなって静かになりましたので、川から出てもとの所ま

で来るとふと見おぼえのある柄の掛けぶとんが一枚目に入ったので近づいてみると、姉が倒れていたのです。瞬間息が止まりそうでしたが、それでもうつ伏せでしたから、気を失っていると判断し、救急箱から薬を取り出し、仰向けに寝かせた時「アッ」と驚いたまま瞬間、ボーゼンと立ちすくんだままでした。

姉は焼夷弾の直撃を首の根元の頸動脈に受けていたのです。それは、ザクロのように、ポッカーと穴があき、野球のボールが入る位の大きさで、ふと見るとそこの土が赤い血で一杯でした。そして瞬間的にカバーして、当てたのか、左の手首も皮がむけ、眉毛も白く焼けた無残な姿だったのです。「ヤッパリ」と私はつい数時間前まで、元気で一緒だった変わりをはてた姉を見ました。姉の傷口に、救急箱から取り出したタオルを当ててやると、タオル一本がそのまま中に入ってしまった。普通だと泣き出すところですが、周囲の火の海と、多くの人の逃げまどう地獄さながらの状況でしたから泣く感情さえ枯渇していたのです。そして、その不思議な冷静な心に、姉のすぐそばに焼けて赤く変色した焼夷弾が一本ころがっていたのが、目につきました。私は、姉の首をえぐり取り、命を奪ったのは「これだ」と解りました。今でもその時の情景がマザマザと思い出され、むごさと恐ろしさに身の毛もよだつ思いです。戦争ほど悲惨なものはなく、恐ろしいものはありません。（中略）

両親も姉の子も（当時八才でした）無事だということがわかり、みんなで、姉を土手まで連れて行き、市の買ってくれた「割木」と「こも」を遺体にかぶせ、ささやかな穴を掘って、火葬にしました。

他にも古野上のあたりでは、防空壕の中でたくさんの方が亡くなられたと聞いています。高橋実さん、小林畳屋さん、三好こうやさんなどです。（後略）

●西救護所

長男一巳の死 誰もいない間に

池田 達子（野上一丁目 当時 本庄町）

八月八日朝早く出発して、呉と広へ行きました。主人が呉から、弟が広の第十一空廠から南方へ行っていたので、様子を聞きに行きました。一日で帰れると思って行ったのに夜になりました。広の駅で一夜を過しました。

朝になって誰かが「夕べの空襲で福山は丸焼けになった。」と言っていました。まさかと思いましたが、汽車が着いた時、「この汽車は糸崎までしか行きません。」と言われましたが、私は乗りました。その汽車に救援隊の人が大勢乗られました。今度は「赤坂までしか行かない」との事でしたが、福山まで帰る事が出来ました。

芦田川を過ぎた頃、福山が空襲に会ったことが良く分りました。福山駅に近づくとほとんど焼けていました。駅西一番踏切で下車しました。

西町を通って本庄へ帰る途中、実家（西町）の前まで帰ると、父も母も家の前の道に茫然と立っていました。いきなり「本庄の家は。」と聞いたら、「焼けたがのー」と言っただけで後は何も言いませんでした。「どうなつとるん。」私は、せきたてる様に聞いたら、親類から見舞いに来られていた人が、「あのお、一巳ちゃんが死んで可哀そうに……。」と言われました。私はこの事を聞くなり、黙って一目散に我が家の方に向かって走って帰りました。

近くまで帰った時、道端へ出ておられた近所のお婆さんが「一巳ちゃんが焼けて死んで可哀そうじゃったのー。」「うちの嫁も死んでしもうたが。」と言われましたが、私は「家は焼けていないのに……。」と思いました。

後で聞いた話ですが木之庄との境の池田瓦焼の分家のトミ子さんと言うお嫁さんでした。大阪で空襲をうけ福山に帰って又空襲に会われたのです。座敷に座っていて、焼夷弾が一個落ちただけなのに直撃で、「水、水」と言いながら亡くなったそうです。臨月の体でほんとうに苦しかった事でしょう。

我が家の焼け跡には誰もいなく、所々まだくすぶっていました。木之庄、本庄で山に近かった所が早く焼夷弾を落とされたようです。山を越えれば射撃場があったので、ねらわれていたのでしょう。私の家は田んぼの中の一軒家だったのですが、五、六十メートル前の田の中から落とし始めていました。寝ていたので気付いた時はもう蚊帳が燃えていたそうです。

一才の子供から八十七才の祖母、子供と年よりの六人居り、余りに急な事にみんな慌てて外に出たそうです。出てから一巳がいないのにすぐ気付きましたが連れ出しに家の中に入る事は出来なかったそうです。ジダンダを踏んで悔しがったけれども仕方の無い事でした。

あの晩お団子を食べてもまだ食べたいと言ったのに、お母さんが帰ってから、一緒に食べようとお婆さんが言って、食べないで寝たそうです。後で聞いたのですが、あの時に食べさせてやればよかったのに心残りだと言って残念がっていました。

焼け跡に死体のある所は何時までもくすぶっていたので大体分っていました。何分にも熱くて側へ寄れないので十日の午後、円正寺のお寺さんを頼んでお経を上げてもらい、骨拾いをしました。焼ける時、「お母さん」と言っただろうか「熱い」と言っただろうか、こんな事を思わずにはいられませんでした。

その後主人も復員し、次男も生まれて落ち着きましたが、時々思い出した様に死んだ子の年を数えたりする事があります。

復員して我が子の戦没を知る

池田 龍市 （野上町一丁目 当時 本庄町）

私は福山空襲の当時は、赤道より南寄りのセレベス島のケンダリーという航空基地の海軍軍需部に勤務しており、福山が空襲を受けた事も、一巳の死も夢にも知りませんでした。制空権、制海権共に押さえられ、敗戦の色は刻一刻と濃くなり、敵の上陸に備えて小さい島ながら山奥へと移動のかたわら、食料の自給自足等、一段と多忙を極め厳しい作業の連続で、苦しい時は何時も出発の時のことを思い出して、一巳（長男）の写真を見ては励まされ、幾度びか苦境を乗り越えてきました。

昭和十八年六月、私共が呉を出発する時は、戦況は既に悪く、輸送船が敵の襲撃を受けるので出港を極秘にする為、見送り等一切禁じられたために、福山駅では妻と長男の一巳（当時二才）の二人だけが見送ってくれました。寂しい門出ですが一家水入らずの別れになったことも印象的でした。列車が動き出した時に一巳が「父ちゃん万歳」といって手に持った日の丸の小旗を振って送ってくれたことが、目に焼き付いた様にいつも思い出されて、大いに励まされました。

昭和二十一年六月十八日復員して福山駅に降りた時、余りにも被害の大きかったことに驚きました。しかし我が家は本庄の田んぼの中の一軒家だから大丈夫だろうと思いつつも、万一、と不安な気持ちで西町を通り、定福寺の裏まで急いで帰りました。

ここまで来れば私の家に見えるはずなのに、何もありません。私の家もやられたと思った途端に足が前に出ません。リュックサックを背負ったままその場に座りこみました。

焼け跡に帰っても仕方が無いので焼け残った長者町の叔父の家の方に向って歩きました。案の定焼け残った叔父の家に私の家族一同が同居して居りました。そして一番に飛び出して来ると思った一巳が姿を見せません。誰も何もいってくれませんでした。その時、八十八才になる祖母が庭に飛び降りて、私の手を握って「わしの様な年寄りが助かって大事な一人息子を死なして済まん事をした」といって泣きつきました。一巳の死を自分の責任と思う年老いた祖母の言葉によって、一巳はいない事を知りました。余り突然なので、涙も出ません。その晩日が暮れてから我が家のあった焼け跡にいて、お通夜のつもりで十ヶ月前の福山空襲の夜を想いながら、夜の更けるまで一人で佇んだことも忘れえぬ思い出です。

福山空襲についての豆知識

福山地区への空襲は、1945年（昭和20年）3月19日から始まりました。
福山市街地への空襲は、同年の8月8日、午後10時25分頃から約1時間、B29爆撃機91機によっておこなわれ、福山市街地は壊滅的な被害を受けました。

市街地焼失面積	314ヘクタール（市街地の80%）
犠牲者	354名
重軽傷者	864名
焼失家屋	10,179戸
被災人口	47,326人

福山人権平和資料館発行のリーフレットから引用

第2章 Piece for Peace ～戦争の記憶を繋ぐ～ から

1 福山が燃えた日 リレートーク 私も聞きたい！ 話したい！

2015年（平成27年）5月31日（土）

10：00～12：00

霞幼稚園

はじめに

このリレートークは、福山市人権平和資料館の主催（協力 霞公民館、霞学区町内会連合会）で開催されたものです。その内容は、翌年の2016年（平成28年）7月に発行された「Piece for Peace ～戦争の記憶を繋ぐ～」（福山市市制施行100周年記念協賛事業 私の戦争体験証言集）という小冊子の中に収録されています。

今回、この霞学区関係者の証言集を作成するにあたっては、上記の小冊子を参考にしつつ、当日の記録テープやメモをもとに再編集（霞学区関係者分のみ抜粋するなど）しました。したがって、「Piece for Peace ～戦争の記憶を繋ぐ～」小冊子とは構成ならびに表現に違いがあることをご了承ください。

●三人のパネリスト

藤井 弘一郎（当時 国民学校二年生 七歳 野上町二丁目）

戦時中は山陽病院の横に住んでいました。体育館の通りは、昔は土手でした。その下はすいか畑、芋畑、トウモロコシ畑でした。淀川（今の体育館あたり）までずっと畑だった。そこへ小さい小屋を建て泊まりに行き、すいかの番をしたりしていました。空襲の日も泊まりに行き、空襲警報が鳴った際には、親に連れられて逃げたのか、水呑の方まで行っていたように思います。芦田川の水が非常に温かくて風呂のような感じを受けました。（中略）市街が燃えているのは、ほとんど記憶にありません。空を見たら、飛行機が飛び交って、なんだか火の玉のようなものが落ちているなあと、よく見えました。街にいないで外からですからね、本当によく見えました。

一寝いりして起きてみると、護国神社（現在の体育館の場所）が一瞬のうちに跡形もなく燃え落ちてしまったことが子供ながら悲しかったです。（中略）

それからは沼隈へ疎開しました。食糧は芋づるや芋粥、野菜など作っていたからそういうものを食べて生活していました。当時はみんながこういう生活だったので自分だけ困っていたような記憶はありません。霞国民学校へは二年生まで行った記憶があります。その後は沼隈の小学校へ行きました。そこも運動場が全部芋畑になっていました。食べ物にさほど不自由はありませんでした。

近藤 茂久 (当時 国民学校六年生 十一歳 古野上町)

戦前,戦中,戦後を通して古野上町に住んでいます。世代交代が進んでいますが,私たちの戦前,戦後,当時の体験を次の世代に伝えるということは,今しかできないとの思いでパネリストを引き受けました。

空襲のとき,私は今,市の水道局が駐車場にしていますが,軍の陸軍水源地(給水場)があった近くに住んでいました。コンクリートの直径が三~四メートルもある高い塔があり,そこに防空壕がありました。家から五十メートルぐらいですが,そこに逃げ込むようにしていました。

警戒警報が鳴ってそこへ行って,次に空襲警報が鳴った時,パラパラと火の手が上がるような状況でした。ああ,町が焼けているなあという程度で私は空襲を見ていましたが,まことに恐ろしいというか,子供ながらに怖いなと思ったのですが,しばらくして水道局の所が,昔は県の土木事務所(2階建て)になっていたのですが,それに火がつきまして,そのあたり一面が昼のように明るくなったとたん,古野上町の西や霞町の西にいっぺんに焼夷弾が落ちてきて火に包まれました。

私が逃げていた防空壕の中にも,入口から焼夷弾が一発転げこんできました。私は慌てて防空壕に入っているみんなと逃げたのですが,その時,顔に火傷を負いました。薬もなく,どくだみを煎じて顔に何回も塗りました。効き目があったのか,跡もそれほど残らず治りました。

焼けた翌日,父と一緒に家の方へ行ったら本当に火事の後といいますか,煙が出ているだけで何もなく焼けていました。印象に残っているのは,焼夷弾が次々と落ちてきて,一枚のトタン屋根に三つの大きな穴が空いていたことです。福山城が遠くの方で赤くなって崩れ落ちるのを綺麗とも悲しいとも思いました。

ただ,防空壕から出て川まで五十~六十メートルありますが,本当に逃げるのに一生懸命で,芋づるに足を取られながらやっとの思いで芦田川まで逃げました。川の水は濁っていましたが,体が熱くて飲まずにはおれませんでした。とにかく戦争中ですから食べるものが無かった。芋づるを煎じて食べたり,芋の葉を炒めて食べました。終戦後も油粕をフライパンの上で練って食べたこともあります。とにかく食糧が無く,友達が食べているおにぎりが欲しくて羨ましく,見かねた友達のお母さんがくれたおにぎりの美味しさと嬉しさは今でも覚えています。

一ヶ月後,母の里の山口の田舎へ高校一年まで疎開していました。高校一年の二学期を終えて福山へ帰ってきました。

木村 滋 （当時 旧制中学三年生 十四歳 道三町）

家族は父、母、妹。空襲を覚悟していたので、妹は毎日夕方自転車で明王院近くの親戚の家に連れて行っていました。

空襲の時、父は民間人ですが、警報が出ると警察へ詰めなければいけないことになっていました。臨時に応援に行くのです。だから早速出ていきました。家には私と母親。もう火の手がどんどん広がります。私は、もうちょっと消せるのではないかと、最後まで頑張りました。消える訳ないですね。家中が全部燃えているのですから。これ以上は無理だと押入れから布団を出してきて、防火水槽の水に浸け、その布団を母に被せて私も被って逃げました。

目の前で、六角形の爆弾が屋根や地面に落ちると、そのショックで破裂して火が出るのです。もう道路は両側の家が燃えて危なくて通れません。道三川に入り燃えていないところを選んで芦田川まで逃げました。芦田川を渡って向こうの土手まで逃げた時振り向くと、福山市街は猛火に包まれています。

伏見櫓は焼け残りしましたが、福山城天守閣が完全に燃えて東側にどっと崩れ落ちるのを見て、福山はもうおしまいだと思います。福山は四十一連隊という軍隊もあり、三菱軍需工場があるので、必ず狙われると思っていました。焼夷弾は数をたくさん落とすので当たる確率も高く、落ちる時はシューッという音で落ちるのですが、屋根やコンクリートに当たるとカーンと鋭い音が響き、それで爆発して火を吹くんです。

私は母親の手を引っ張って逃げることができましたが、いつの時代も戦争の一番の被害者は女性と子供です。国の指導で各家に防空壕を作らせましたが、その防空壕で焼死した人も多かったのです。

道三町の浅野さんのあたりは、何故だか三軒だけ家が焼けずに残りました。家もなくなってしまい、服部の母の里に疎開しました。学校（誠之館）は今の合同庁舎のところにありましたが、焼けずに残りました。しかし、福塩線も動いておらず学校に通う手段がなく、一ヶ月学校を休みましたが皆勤賞をもらいました。妹も学校をずっと休みました。

● どういう気持ちで学校生活を送っていましたか（参加者からの質問）
（木村）

旧制中学は、4年生から志願して軍隊へ入隊できました。4年生からは特別に志願して特別攻撃隊へも入隊できました。16～17歳ですが時代の流れでしょうか、行かなきゃと思うのか、行ってみたいと思うのか、死んでもいいと思うのか、何人か志願しました。自分は3年生だったので、軍隊は免れ同級生も戦場で犠牲になることはありませんでした。

上級生は学徒動員で、大勢、呉工廠に行きました。3年生は遠くに行かず、福山の三菱電機に朝から働きに行きました。学校へはほとんど行っていません。戦後は欠席者が多かったです。

旧制中学を卒業して広島高等師範学校へ行き寮生活を送りました。掘立小屋でした。朝晩米粒少しのお湯のようなお粥でした。育ち盛りなのに量は少なく、いつも空腹でした。田舎から米を送ってもらえる生徒は、飯盒でご飯を炊いていました。麦や芋が多いご飯。米が殆ど入っていない弁当でした。白い米を持って来た子の方が弁当箱の蓋で隠しながら食べていました。

● 伝单（予告ビラ）について、話していただけますか（司会者）
（近藤）

拾いましたが親に「捨ててしまえ！こんなもの、読むな！」と取り上げられました。6年生ですから、詳しいことは読めるわけではないのですが……。

確かそのビラには「次は福山だよ、戦争をするみなさん方は早く気付いて福山から避難しなさい」という内容でしたが、事実空爆を受けたのです。父親も「このビラを見たらみんな逃げないといけない」と、ちょっと言ったような記憶があります。

◎ 会場参加者から

杉原 靖子（霞町二丁目 当時四才 新涯町）

8日の夜は、四つ身のお祝いでもらった“コッポリ下駄”を抱えて、おじいさんに連れられて田んぼのほとりに掘っていた防空壕に入りました。北の方が、すごくきれいに明るく燃えていたという印象が強くあります。

翌9日は、田んぼの中で不発弾が黒こげになっていました。触って手を無くされた子供さんもいたようです。たんぼの畦道から焼夷弾や黒こげの稲を見ました。食べ物には不自由していませんでした。ほとんどは昭和30年ころになって祖父がいろいろ私に話して聞かせてくれたことです。私が覚えているのは、焼け跡を見たことと、焼けているのがまるで花火のようだったということです。

古谷 佳子（野上町一丁目）

私の実家は野上町の味噌屋です。空襲で家は焼けたのですが、大きな味噌樽が二つ割れたそうです。みなさんが焼けた茶碗や割れた茶碗、焦げたやかんを持って味噌をすくいに来られたそうです。おじいちゃんはみんな困っているんだからとみんなにすくってあげたそうです。何百メートルという行列ができたそうです。翌日は雨が降り味噌が醤油のようになったが、それでも人々がすくいにきたそうです。

野上町三丁目の工業高校の辺りは焼けてなくて救護所になっていました。傷痍軍人の人が年寄りを集めて爆弾の火を消す訓練をしていたそうです。その効果があったのかあの一体は戦火を免れることができました。

杉原 弘（霞町二丁目 当時国民学校2年生）

戦後、学校は西小学校において当時2部授業で、午前は霞で午後は西。週が変わるとその反対といった具合でした。今振り返ってみたら、実際本当に勉強したかなあという感じです。

学校へ行きますと、一番に言われるのが「はい、墨をすりましょう。」教科書を墨で不都合な場所を先生に言われて塗りつぶす作業をしました。天気の良い時は外で勉強しました。青空教室です。昭和22年に霞国民学校から霞小学校に名称が変わりました。

厚生団子ですが、おそらく戦後の救護策だったと思います。当時の自分たちはおいしいとかおいしくないとかいうより、食べざるを得なかったんじゃないかなと思っています。

2 「福山が燃えた日」追加聞き取り

2015年（平成27年）7月12日（日）

10：00～11：30

霞幼稚園

はじめに

この座談会は、「福山が燃えた日」リレートークに続く取り組みとして行われたものです。その内容は、翌2016年（平成28年）7月に発行された「Piece for Peace ～戦争の記憶を繋ぐ～」（福山市市制施行100周年記念協賛事業 私人の戦争体験証言集）の中に収録されています。

ただし、リレートークと同様に、当日の記録テープやメモをもとに再編集（霞学区関係者分のみ抜粋するなど）しました。したがって、「Piece for Peace ～戦争の記憶を繋ぐ～」小冊子とは構成ならびに表現に違いがあることをご了承ください。

出席者

枝広 稔 1937年（昭和12年）生まれ（当時神村町）
江草 孝昌 1934年（昭和9年）生まれ（当時神石町）
江木 吉江 1934年（昭和9年）生まれ（当時西霞町南）
森近 静子 1937年（昭和12年）生まれ（当時野上町）
落合 照江 1929年（昭和4年）生まれ（当時竹原市）

●生活、服装、食べ物など生活に密着した話

（枝広）

父親は昭和14年から戦争に行っていました。国民学校に昭和19年入学しました。ランドセルは母が買ってくれましたが、段ボールに色を黒く塗ったようなものだったので、雨に濡らさないよう大事にしていました。雨が降ると“デンパチ”をかけて通った記憶があります。

入学の写真を写真屋で撮り、戦地の父親に送りました。カタカナが書けたので父親と文通していましたが、昭和19年から交信もできなくなりました。父から「世界で一番美しい夕日の港がここだよ」とマニラの絵葉書が届いたのが最後でした。

食べるものは、お菓子なんかほとんど無かったですが、親戚に行くと大事そうに金平糖を引き出しから出してくれるのが楽しみでした。

農家だったので、食べ物には不自由しませんでした。供出米の残りを保有米としてお金の代わりに物々交換していました。服は衣料切符、食糧も配給制度がありましたが、牛肉を買って食べたという記憶はなく、ウサギや床下で飼っている鶏を絞めて時々食べました。魚も自転車やリヤカーで売りに来たのを米と交換

に買って食べていました。

履物はわら草履で、医者の子供とおまわりさんの子供だけがいち早くゴム草履を買ってうらやましかったです。雨が降ると草履が濡れるので、腰に藁草履をぶらさげて裸足で学校に行っていました。

学校では先ず御真影に向かって礼をし、上級生の班長が「第何班何名異常なし」と報告し、後ろをついて校門をくぐりました。

国民学校では、高学年は体育の授業で飛行機の操縦士になる訓練もしていました。低学年は、校庭の芋畑の草取りや防空壕に逃げ込む訓練をしていました。

(江木)

国民学校2年のとき父が兵隊に行きました。妹は幼稚園に通っていて、母と妹の三人家族で、母親が縫物で生計をたてていました。小学校の塀の近くです。

福山空襲の時も、最初はお父さんが帰るところがなかったらいけないと、小学校の講堂が焼けても母は逃げず家を守っていました。隣の洋服屋さんが「逃げんといけん」といっても逃げませんでした。私は隣の奥さんとおばあさんと一緒に連れて逃げてもらいました。

道三川は今より広がったです。別珍の足袋に下駄を履いて、夏布団を道三川で濡らして逃げました。その時下駄を道三川で失くしました。周りには死んだ人もいたと思うのですが、前だけ見て明王院まで逃げました。どうやって逃げたか記憶にないです。橋のたもとで水につかり何人も顔だけ出していました。爆弾が私の後ろの人に直撃したと思いますが、前しか見ていなかったです。

朝を迎えましたが母は帰ってこないし、泣いた覚えがあります。昼前に母の里から迎えが来て母の里に連れて行かれました。次の日、母は来ていました。母は焼け跡の片付けに行きました。母親は水呑出身で、バラックの家が出来るまでは水呑小学校へ通いました。今の体育館のところが護国神社で、芋やら大豆を作りに行っていました。学校も芋畑でした。霞小学校が焼けて二部授業で西小学校へ通いました。

(落合)

実家は竹原でぶどう園をしていて畑の手伝いをよくしていました。男2人女5人の7人兄弟でした。寒い時は剪定した木を集めるのも仕事でした。

昭和16年県立竹原女学校入学。103人、呉の海軍工廠鑄造工場に行きました。爆弾をつくる泥の鑄型の製造に携わっていました。こぼれた鑄物の上に転んで大火傷を負った友もいてみんな泣きました。

食べ物は毎日同じ。宮原寮に入寮。夜間の空襲も何度もあり、寮が丸焼けになったこともあります。学徒動員4000人が入れる大きなまん丸のトンネルのよ

うな防空壕が作ってありました。昼夜に拘わらず何度も防空壕を出たり入ったりしました。ぎゅうぎゅうに詰め込まれ、その時、爆弾が落ちました。私は入口付近にいたのですが、その時爆風で砂埃がすごかったです。不発弾で助かりました。毎晩のようにB29が来て避難しました。

6月22日は呉工廠への空襲、6月28日は呉の大空襲があり呉の町が火の海となりました。7月1日から2日にかけての空襲で食糧係だった2人の友を空襲で亡くしました。寮も焼けました。小さい空襲も入れると17回くらいはありました。

ノミ、虱（シラミ）、南京虫にやられ、夜は寝られませんでした。虱の行列も見ました。DDTを振られ頭は真っ白でした。

（森近）

学校では、DDTを噴霧器など無く手で振りかけられていました。薬が買える裕福な家の子供は、DDTをかけ、風呂に入り、を繰り返して撲滅させていました。虱の卵で頭が白くなっている子供もいました。衣服へ付くこともありました。

服では、当時、もんぺを履いていました。衣料切符で購入していました。母親が嫁入り道具の着物（銘仙）をたおして作っていました。大人一着の着物（着尺）から子供のもんぺは2枚作れました。もんぺに当てはまる漢字はないです。

軽袷（かるさん）（ポルトガル語）上衣下衣が分かれていて、上衣をズボンの中に入れ、裾はゴム、両方を布の紐でしぼる。銘仙は縦糸が弱く横糸が強いので横に裂けるので、すね当てをして着ていました。

厚生（更生）団子は福山だけのようです。国道沿いの久松通りの交差点をちょっと東に行ったところに店があり買いに行っていました。東劇のところにもあったようです。

糠だんごは全国区。栄養不足でビタミンを補うためにあったのではないかと思います。サツマイモを餡に使っていました。厚生団子の芋のつるや葉は粘り気があるので粉に混ぜていたのではないのでしょうか。糠は使っていません。蒸すとアクが出て色が悪かったです。

米は食糧切符。大豆カスを配給でもらい、米に混ぜて増やして食べました。麦は今のよう平たい押し麦でなく美味しくなかったです。そういう状況でも、末の妹が「私に白いごはんを頂戴。いいところを頂戴」と言っていたのが今では笑い話です。

(江木)

大豆の搾りかすも配給でもらっていました。ご飯に入れて量を増やして食べていました。麦は戦前は食べたことがなかったです。

(枝広)

戦時中、お弁当は白米が見えると国賊と言われ、先生から戦地の兵隊さんは食べるものも食べず戦っておられるのに、兵隊さんのことを考えなさい！と叱られました。米の上に麦飯を乗せた弁当にしてくれました。

20年の正月には、学校でみかん1個とどんぐり菓子2個をもらって嬉しかった。

(江草)

終戦の年、若者がいなくなった頃、近所の40歳になるお父さんに召集令状が来て騒ぎになったのを子供ながらに覚えています。令状は40歳までで、我が家の父は41歳だったので兵隊に行くことはなかったです。

5歳年上の兄が昭和19年、当時高等科2年（現在は中学2年）の時、義勇軍になりたいと言い出し、親はもちろん親戚も猛反対したが、卒業間近の2月に家を後にしました。

そして秋、下関から満州へ渡ると連絡があり、長男、父、4年生の自分とバスで福山へ来ました。そして汽車に乗り、途中、何ヶ所かで窓のカーテンを降ろさせられました（軍需関係施設があったのだと思う）。そして、旅館につき就寝まもなく空襲警報。電気は消え真っ暗な中、外の防空壕に行けと命令が出たが、震えて窓の腰が越えられず、父に助けられて大勢の中へ。やがて、敵機の編隊が来て焼夷弾を落とすが、日本軍の高射砲は全然届かない。やがて去っていき、夜も白みかけた時、一人の男性が壕の淵で煙草を吸った瞬間、どこからか憲兵が来てビンタで怒鳴りつけました。兄と別れをして駅に行くと、憲兵が何人かいて少し怖かった。その兄も21年、無事帰って来ました。

さつまいも高系4号という品種を育てていました。味は悪いが収穫量が多い。供出米や供出芋が多くそれも厳しかった。何月何日に取りに来るという通達があり、一反4石を目標にしていました。（普通は一反3石）種芋を食べたこともあり、粗食でした。

●遊び

(枝広)

大きくなったら陸軍大将になるんだと、兵隊さんごっこや、チャンバラごっこ、三つ車、四つ車、竹トンボ、水鉄砲など、おもちゃは手づくりだった。

(江木)

缶詰のカンカンに穴をあけてひもを通してカッポン（缶ぽっくり）と言っていましたね。それに乗って遊びました。缶けりもしました。

普段からどんぐりを拾って学校に持って行きました。松脂（松根油）も取って学校に持って行っていました。それが子供の遊びでもあり仕事でもありました。

(森近)

主人の話だけれど、高学年の時、山で雑木を切って大八車に載せ洗谷から草戸まで運んだ。そのお金は学校へ供出。大変だったけれど仲間と助け合って楽しかった。友人とのつながりも出来た。今でも一番楽しかったと友達が集まれば語り草になっているそうです。

(枝広)

家にあっても卵や米は遠足や学芸会のごちそう。卵と米がお金になり、魚や食べ物、衣類などと物々交換していた。

でも保有米は自由には食べさせてもらえず、お土産にもしていた。

(江草)

遊びは兵隊ごっこ。竹を切ってチャンバラ。兄はラッパ手でした。あっちの山とこっちの山でラッパの合図でやりとりしていました。合図で戦争ごっこの開始です。わら草履を履いて山の中を走りまわります。武器は竹の棒です。時代劇のようなものです。

学校では炭焼き窯で炭を作っていました。薪を担いで帰り、炭を作っていました。大きい子も小さい子も身の丈にあった量の薪を担ぎました。どんぐり拾いもしました。それが遊びでもあり、勉強はほとんどしなかった。

●空襲の時どこにいましたか

(枝広)

神村町です。夜11時ころ縁台で蚊に刺されながら福山の空が真っ赤に燃えるのを祖父と見ました。赤坂、神村まで銀紙が飛んできました。祖父の弟が福山に住んでいたの、夜中におにぎりを作って重箱に入れて祖父と二人で福山まで来たからお城も燃えてなくなっていました。

草戸大橋の東まで来たとき、付近の家は燃えて何も無い。草履だったので足が

熱かった。芦田川に避難していた知り合いから、叔父一家の居場所を聞き河川敷でやっと会うことが出来ました。すっかり明るくなったが、まだたくさんの人たちが河川敷に逃げていました。芦田川で手を洗ってみんなで握り飯の朝ごはんを食べました。しんどかった。福山はもうだめだ！福山の町は何も無くなった……と子供心に思いました。

(江木)

地吹町です。

空襲の時は明王院へ逃げました。翌朝八時ごろ炊き出しのおにぎりをもらいました。10時頃には母の里から迎えが来て里へ行った。母は次の日帰って来ました。町内であらかじめ避難場所が決められていたので混乱の中でも肉親に会えた。

当時は60,000人ほどの人口で皆知り合いも多く連絡が電話よりも早くいった。人間関係も良く組内の団結が強かった。

(枝広)

この近くに村上幼稚園と白鳥幼稚園と二か所あり、白鳥幼稚園は父親が戦争に行っている子が通っていたと聞いている。ばら公園の近くで、御門町にあったようです。

(江木)

訓練も週1回はしていました。婦人会の母親は、竹やり訓練やバケツリレーを、白いかつぼう前掛けを着て参加してました。強制的でした。

●戦後の話

(江木)

瀬戸の親戚の家に疎開しましたが、親戚に迷惑はかけられないと本家から木をもらって、10月には元の場所にバラックで家を建てました。畳もなく、床に藁を敷き、母が屋根に上ってひさしを作りました。人に迷惑はかけられない、自分の土地は自分で守る、誰かが土地を取ってしまうのでは……という思いで早く帰りました。妹は預けたままでした。早く帰らないと受け取れないと聞き、火災保険も受け取りました。

(森近)

バラック建てでしたが福山は復興が早かったです。我が家には一時、焼けだされた遠い親戚も含めて5世帯が住んでいました。焼け出された人は親せきを

頼っていきました。電話の復旧も早かったと思います。

(枝広)

福山は歩兵41連隊があり、元々道路整備や上水道が発達していました。中央から偉い人が赴任して電話線の復興も早かったです。

昭和25・26年ころ、食べる、着るという面が少し落ち着いてきたかなと思います。藁草履も運動靴になりました。

6年生の修学旅行で岡山博覧会へ行った時、はじめてテレビを見て驚いた。

(江木)

終戦が6年生で女学校（門田高等女学校）に入学し、途中で中学が出来、中学を3年、高校を3年して6年間授業料がいり、私には高くついたと母が愚痴を言っていました。

(江草)

ゴム靴は学校から配給され（5足ずつ）くじ引きでした。ゴム底は擦り減っていくから生ゴムを焼き付けていました。その業者が地域を回っていました。

(森近)

厚生（更生）団子は福山だけの名称で糠団子は全国区。江波団子など地名がついた団子もありました。団子の汁に青い草が浮いていました。裏の川が今のようによ側溝造りではなく、川端には、せりなどが生えていました。天下橋のところには闇市もありました。

(枝広)

25年以降、朝鮮動乱の特需景気から暮らしが落ち着いてきたと思います。

(江木)

服の縫物やリフォームなど人様に頼まれ仕立てで生計を立てていました。ズロースやシミーズなどの下着も縫っていました。

(森近)

ホームスパン（冬物でフェルトのような生地）はすぐ破けて弱かったです。

3 霞国民学校初等科訓導

はじめに

以下に掲載した松本和子さんの文章は、2016年（平成28年）7月に発行された「Piece for Peace ～戦争の記憶を繋ぐ～」(福山市市制施行100周年記念協賛事業 私戦争体験証言集)の中に収録されていますが、当証言集への掲載に際しては再編集しています。したがって表現等に違いがあることをご了承ください。

松本 和子 (当時20歳)

昭和18年、私は国民学校初等科訓導になり、霞国民学校に配属されました。服は県女の制服を直してもらいました。スカートをキュロットに、セーラー襟を開襟の上着にしてもらって通勤しました。靴は大阪の靴屋から革靴を取り寄せました。初任給が35円で靴が37円でした。

1組59人で1学年4組、私は1年女子組の担任でした。幼稚園から小学校に入った子は3分の1で少なかったです。だから集団生活をしたことがない子ばかりで教えるのは大変でした。でも子供たちの目は輝いていました。私の調子が悪いと見抜きました。子供たちは草履をはいていて、ズック(布の運動靴)を履いている子はいませんでした。履いていても、そのズックは破れていて指が出ていました。霜柱が立つ冬の校庭の朝礼は、軍事訓練が終わると子供たちの足跡がくつきりとなっていました。

警戒警報が鳴ると、子供たちを班ごとに自宅に帰します。帰宅途中や野外の畑仕事に爆撃されたらと思うと怖かったです。私は体の小さな1年生を背負って走りました。荷物は別の子供に持たせました。

大阪の方へB29が編隊を組んで飛んで行くのをみると水晶のようにキラキラと光ってとてもきれいでした。

5,6年生は授業で芦田川の土手にサツマイモを植えていました。食糧増産のためサツマイモに電気ショックをあてるとよくできるかどうかの実験もしました。茎の切り口に電気を通すんです。ばかげているけど、教える先生は本気ででした。

学校には農作業に使う大八車が26～28台くらいあったと思います。

八月八日、私は母の里へ荷物を疎開させるために学校の大八車を1台借りました。大八車はリヤカーよりたくさん荷物が載せられるのです。夕方、祖父と弟と大峠を通過して千田に行きました。妹とお祖母さんはリヤカーを押して通り町、奈良津の道を通ったので遅れて着きました。

空襲警報が鳴り、最初に照明弾が落ちて明るくなりました。「焼夷弾が落ちたぞ」の声に裏山に登りました。木之庄の高射砲が2～3回ボンボンと撃つ音がしました。高射砲は撃つけれど弾が低い円弧を描いて落ちていくだけです。お城が「とんど」のように焼け落ちるのを見ました。「福山はもうだめじゃ」と思いました。

母の里から「風呂に入って帰れ」と言われて助かりました。すぐ帰っていたら空襲にあっていたでしょう。

九日、夜が明けてすぐ藺町の家に向かいました。大峠の坂の上で福山を見たら一面廃墟で煙と熱気で霧のようにくすぶっていました。家の大きな松を目標にするつもりでしたが、家はまる焼けで場所もわかりません。根石も赤く焼けてポロボロでした。

それから霞小学校へ向かって歩きました。物をよけよけ歩きました。誰も歩いていませんでした。ズックの底がブスブスいうほどまだ熱かったです。

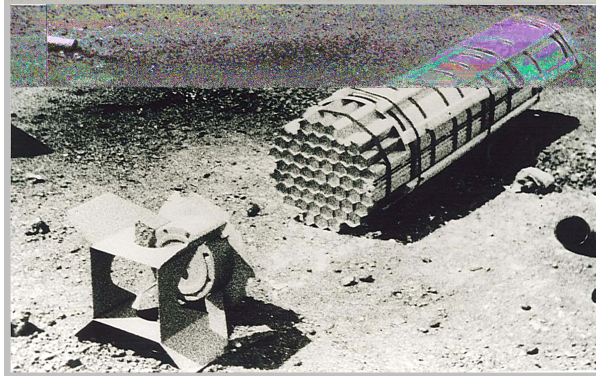
私は今まで戦争体験の話をしたことがありませんでした。話そうと思ったのは、この先何年も生きていないと思うし、戦争体験者で生きている人が少なくなっていますから。今回お話するのに、昔の教え子や弟、従兄弟、友達同僚にも尋ねました。忘れたことを思い出し、胸が熱くなることもありました。

資料³



M47（油脂焼夷弾）

福山空襲では4,035発が投下され、市街地全体に火災を起こした。



M17（集束爆弾）

6角筒で強い貫徹力を持つM50という焼夷弾を110本束ねたもの。このM17が1,666発投下されたというから、18万本のM50が地上に降り注いだことになる。

³ 写真は福山市人権平和資料館発行の「福山が燃えた日」から

4 シベリア抑留の話

はじめに

以下に掲載した土井茂さんの文章は、今回、書き下ろしていただいたものです。土井さんのシベリア抑留の話は、2016年（平成28年）7月に発行された

「Piece for Peace ～戦争の記憶を繋ぐ～」（福山市市制施行100周年記念協賛事業 私戦争体験証言集）の中にも聞き取り形式で収録されています。

高橋 寛登さんの文章は2002年（平成14年）に発行された「戦争の記憶」（福山南ロータリークラブ）を元にしてはいますが、掲載にあたっては、再構成しました。したがって元になった刊行物の表現と異なることをご了承ください。

土井 茂 1924年（大正13年）生まれ

昭和19年10月現役徴収令状を受けて、当時の満州国濱江省阿城県にあった阿城重砲兵第二聯隊に10月21日に入隊しました。

入隊の集合場所は広島市の広瀬国民学校でした。

入隊前の10月19日、野上八幡神社に詣り、お祓いを受け武運長久を祈りました。

10月20日の朝、当時の西霞町に藤井医院があり、その前に町内の人々が大勢集まってくださり、同じ町内会の宇田さんと私の、出征壮行式をしてくださった。そこから福山駅まで軍歌を歌って日の丸の小旗を振って見送ってくださった。近所の人はプラットフォームまで出て姿の見えなくなるまで見送ってくださり感激しました。広島駅に着き指定された「大和旅館」に宿泊しました。

翌21日集合場所の広瀬国民学校で面接、身体検査を受け、合格し入隊が決定しました。満州の原隊から将校と下士官数名が引き受けに来ており、そこで軍装品を受領し、軍服に着替えました。身の引き締まる思いでした。陸軍二等兵の襟章も同時に受領し、宿に帰り縫いつけました。22日は私物を実家へ返送する手続きなどを行いました。

23日いよいよ軍人としての旅立ちの日です。緊張しました。広瀬国民学校で軍隊編成が行われ、私は第1小隊に編入されて、第1分隊長を命ぜられました。各自、小銃、短剣、雑嚢、飯ごう、水筒など受け取り午後広島駅を出発し、24日朝、博多港から釜山に向け出港しました。玄界灘を過ぎた頃、突如空襲警報が発令され「全員直ちに武装し、救命胴衣を着け甲板の出入り口で待機せよ」の命令が下り、分隊員に落ち着いて行動するよう指示を出し、救命胴衣を助けあって着け待機しました。その時はすごく緊張したことを覚えています。幸い警報が解除され無事釜山に上陸でき安堵しました。

25日朝,釜山駅から列車で北上しました。京城(ケイジョウ),平壤(ヘイジョウ)を通過,鴨緑江(オウリョクコウ)を渡り,鮮満国境の町 安東(アントウ)を通過して満州に入りました。奉天(瀋陽シンヨウ),新京(長春)を通過し,28日早朝,哈爾濱(ハルピン)駅に着き下車しました。駅前には忠霊塔があり静かな佇まいで敬虔な気持ちになりました。一同拝礼をしました。満州は見渡す限りのコーリャン畑が広がり,真っ赤な太陽が印象的で大陸に来たなと実感しました。

再び乗車して阿城(アジョウ)駅で下車しました。約2キロメートル程行軍し聯隊に着き兵舎前で引率将校が聯隊長に申告し,編成が解かれて,5泊6日の旅程を終えました。

阿城は一時都になった古い町で,城壁に囲まれたその中が現地人の町になっていました。聯隊は郊外にありました。

我々の任務は関東軍として満州を守ることです。満州鉄道をはじめ,日本の企業も開拓団もたくさんありました。そしてそこには在留邦人がいました。これらを守るために,まずソ連の侵攻に対する防衛です。それから匪賊から守ること,抗日分子の集団スパイ活動,破壊活動に対する警備を行うことでした。治安は悪く初年兵教育が終った20年3月初め,食べ物,飲み物からか赤痢患者が多数発生しました。聯隊は聯兵休となり軍帽に白い鉢巻をつけ1カ月間検疫作業に従事しました。

5月20日,原隊の主力は朝鮮に近いソ満国境の間島省八道河(ハチドウカ)に陣地構築を命ぜられ移動しました。重砲は砲を備え付けるわけですから,たやすく移動はできません。その砲と運命を共にするのです。いよいよソ連との戦いが近いと思いました。

7月1日,甲種幹部候補生30名は歩兵に転科を命ぜられ牡丹江(ボタンコウ)の近くにある石頭(セキトウ)予備士官学校に派遣されました。内地派遣(重砲兵予備士官学校は内地にあった)の夢は破れました。重砲兵として教育訓練を受けた日々が虚しく思えました。

営内での行動はすべて駆け足でした。訓練は,ほふく前進,戦車の下に飛び込む練習,それから夜間の挺身(捨て身)切り込みの訓練でした。

8月1日,軍曹の階級に進みました。

8月9日,ソ連が満州に侵攻してきました。午前3時頃,非常呼集により全員校庭に集合,学校長からソ連侵攻を告げられ訓示がありました。「諸君は原隊に帰らず,ここで戦闘部隊を編成する。直ちに兵舎にもどり,身辺整理をし,出動準備に取りかかり,次の命令を待つように」と命ぜられました。約3,400名の候補生は二分され,学校長を長とする連隊と,教育主任を長とする連隊とに編成されました。私は学校長の連隊に所属しました。

教育主任の連隊は10日の真夜中に牡丹江に向かって慌ただしく駆け足で出動

しました。軍靴の音の響きに目が覚め、心から武運長久を祈りました。

8月11日は身辺整理や隊内の整理に従事しました。そうした時、ラジオ放送で広島市に特殊爆弾が落ち、甚大な被害があったこと、福山も空襲を受け、市の中心部が3分の2焼失したことを知りました。遺書を書くようにと下達があり、したため提出しました。

午後8時頃出動命令が下り、雨の中牡丹江と反対の東京城（トンキンジョウ）に向け出動しました。任務は、その飛行場附近に降下が予想される敵空挺部隊を迎撃することでした。暗闇の中を重い背囊（はいのう）が肩に食い込むのを耐えながら黙々と早足で進みました。

8月12日、朝、一文字隘路口に到着する。連隊命令で「部隊はここで敵戦車を迎え撃つことになった。直ちに道路を挟んで展開し、蛸つぼを掘って戦闘準備に入れ」と命ぜられ、各自が入る蛸つぼを掘る。決死の覚悟で敵戦車の進攻を待ちました。

翌朝、敵戦車の進攻の気配なく、東京城に向け出発する。

13日、東京城に着きましたが飛行場は、格納庫など友軍によって爆破炎上していました。その夜、敵戦車が接近したので迎撃するよう命令が下り、再び雨の中、隘路口に向け強行軍で引き返しました。途中、避難する開拓団の一団とすれ違いました。一団はほとんど女と子供でした。戦争の哀れさ、弱い立場の人が気の毒でした。

14日、隘路口に戻り侵攻を待ちましたが敵戦車の接近はなく、移動命令が下り、昼前、隘路口を出た時、突如ソ連戦闘機5機の空襲を受け死傷者が出ました。

15日東京城、16日沙蘭鎮（サランチン）で大休止。夕刻、爾站（アルシャン）に向け出発しましたが、常に空襲を警戒し、雨の中での夜の行軍でしたので疲労が重なり、落伍者が多数出ました。隊列も乱れました。「眠りながら歩く」を初めて体験しました。沙蘭鎮（サランチン）で後衛のため1個小隊が残りましたが、この小隊はソ連軍と戦闘し、20数名の戦死者が出たと後で聞きました。

8月17日昼前、爾站が近くなった頃、満軍の少数の兵を率いていた将校が馬上から「停戦になった」と教えてくれました。これで石頭の教育隊に帰れると一様に喜びました。ソ連との停戦だと思ったのです。爾站到着き昼食を終えた頃、白旗を掲げたソ連の軍使がジープに乗って敦化（トンカ）の方へ走り去りました。

8月18日、爾站を出発し、昼の行軍となり、20日、敦化近くの東沙河沿（ヒガシサカエン）に着き、そこで大隊長から玉音放送の内容伝達があり、明日武装解除とのことで、ここで初めて日本が戦いに敗れたことを知りました。夕暮れだっと思えます。その日はアンペラ小屋（むしろを掛けただけの簡単な小屋）に分宿していましたが、敗戦のショックで目が冴えて眠れませんでした。翌21日に各自が自ら武装解除し、銃や剣を一か所に集め放棄しました。

22日敦化に向け出発し、敦化郊外の野原が集結所になっておりそこに入りました。そこには我々軍人のほかに、民間人、開拓団の人々もたくさん集結しており大集団でした。その中に陸軍病院におられた看護婦さんが頭を丸めて男装した方が何十人かおられました。その人の話によれば、恥辱を受けて自殺された方、また恥辱を受ける前に集団自決された方々もおられたという悲劇の話でした。開拓団の中にも同じような悲劇があったようでした。

9月初め、師団長より「戦争に敗れたけれど、諸君はこれから日本に帰れるからそれまで身体に気をつけて軍人らしく行動をとり、無事に復員してほしい」という訓示があり希望を持ちました。（それが嘘になりました）朝鮮出身の兵士はここから故郷に帰ってよいということで、帰って行きました。

9月25日、牡丹江から引き上げ列車が出るということで敦化を出発しました。ソ連の監視の下の行進で、敗戦の悲哀を強く感じました。途中、西沙河沿で逗留。そこで1,000名単位の作業隊が作られました。40日間天幕生活を送り、その間、ソ連の略奪物を貨車に積み込む使役を主として行いました。西沙河沿に着いた数日後、牡丹江に出動した候補生が破れた軍服姿で疲れ果て辿り着きました。同期生が磨刀石（マトウセキ）で押し寄せてくる戦車に爆薬を抱いて飛び込み、勇敢に戦い戦果をあげ、大隊長以下500人以上の戦死者が出たことを知りました。

10月23日、西沙河沿を出発、10月30日牡丹江に近い愛河（アイカ）に着きました。ここが引き上げの集結地でした。丘の上にある、屋根が随所破壊されている兵舎跡に収容されました。

11月10日、いよいよ復員することになり、引揚列車に乗り込みました。有蓋車に40人詰め込まれるんです。中央にはドラム缶を改造したストーブと薪、前後に二段式の寝床、扉の下部に何か所、便所用に管が外に向けて出してありました。小窓が上部に一つあり、わずかに光が差し込んでいました。外から鍵がかけられ、復員の希望と不安が交錯しました。

出発したのは4・5日後でした。亡き戦友の御霊に合掌し、心やすかれと祈り、満州での激動の一年を回想しながら、満州に別れを告げたのです。

ソ満国境の町、綏芬河（スイフンガ）を通過し、ソ連領に入りました。列車は南下しているのか夜でよくわかりませんでした。夜明けとともに、北上しているのがわかりました。アムール河（黒竜江）を渡りました。シベリアに行くのだとわかり、帰国の夢は完全に破れました。コムソモリスクから支線に入り、ドーフというところで降ろされました。夜、トラックの荷台に乗せられ移動中、トラックが急に止まる。暗闇の中、何者かが時計、万年筆など略奪に来ました。運転手や警備兵は黙認です。

11月20日朝、古ぼけた収容所に着きました。そこは「202」収容所といました。そこに我々1,000人が収容されました。ここでは3キロメートル程先の製材

所の近くの森で伐採し、製材所の集積場に運ぶ作業でした。伐採作業は斧で切り込みを入れ、二人用の大きな鋸で両方から押し合って切りました。

朝5時には門の出口に整列しました。人員を数えるのにソ連の警備兵は計算が苦手で1時間もかかることがたびたびありました。その間、凍傷にかからぬよう常に体を動かしていなければなりませんでした。

食事は薄い一枚の黒パンと飯ごう三分の一程度の実の少ないスープでした。虱（シラミ）の攻撃にもみんな困りました。寒さと、栄養失調、体力消耗で亡くなる人が次々と出ました。便所から戻ると冷たくなっていた戦友もいました。生活も荒んできました。

12月31日、突然移動命令が出て隊は分散され私たち約200名は奥地の「204」収容所に移動しました。

21年元旦、広場に全員集合し大隊長のあいさつがあり、その後、警備兵の員数点検があり、いつものごとく何回も計算をやり直して時間を要しました。宿舎に帰ると留守中に所持品の検査をしたらしく、大事にここまで隠し持って来た腕時計、万年筆と寄せ書きの日の丸の旗が無くなっていました。略奪されたようです。

2月、ゴーリン「203」収容所に私たち候補生約100名は移動しました。ここは規律正しい収容所で一番記憶に残っています。食糧難で一番身体が弱っていたときでした。入所早々檄を飛ばされたりもしました。ここでの作業は伐採でした。一番困ったのは夜中に便所に行くことでした。外套をひっかけ、上段の寝どこから降り、二重扉まで10m、寒い中それから50mほど走らなくてはなりません。熱が出て38度以上でないと休めません。身体検査もありました。ソ連の女医さんがお尻の肉をつまんで弾力性があるかないかで振り分けられます。「1級」「2級」は重労働、「3級」は軽作業、「オ・カ」（虚弱者）は休養です。ビタミン不足を補うため松葉やモミの葉を煎じて飲みました。虱や南京虫にも困りましたが衛生兵が知恵を出し衣類の滅菌と灯油を使い駆除してくれました。この収容所は浴場があり、初めて湯桶に少しの湯をもらって洗うことが出来ました。歯が悪くなった時、ペンチで抜かれたこともありました。

21年10月から民主化運動が始まり、ハバロフスクで日本語新聞が発刊され回覧されるようになりました。日本に帰っても幸せにならない。その一方でソ連の共産主義を賛美した記事でした。

21年11月、20人程が「8」分所に移動し、22年2月、数人が「6」分所に移動しました。そこは入ソしたときの「202」収容所から通った製材所でした。

22年7月2日、突然帰国命令がありました。当時、監督（ロシア人）の当番の使役をしていたためか、最初の帰国者の5名に選ばれました。荷物を取りまとめて待つ間もなく、他の収容所からの帰国者を乗せたトラックが来ました。それに飛び乗って集結所へ。ここでは、つるはしを持って線路の路盤補修工事の使役をし

ながら帰国列車が来るのを待ちました。

7月28日、帰国の編成がおこなわれ、私は候補生60人の隊に編入し帰国の途につきました。ナホトカの手前、駅のない原っぱに列車が止まり、私たちの候補生隊は降ろされナホトカに行かず、逆戻りして数キロ離れたソ連部隊の近くに移動しテント生活をしました。ここではソ連部隊の越冬の燃料、野菜を貯蔵する仕事でした。

11月20日、やっと帰国することになり、ナホトカの収容所に着きました。ここでは厳しい所持品の検査、身上調査がありました。

11月28日、帰国が許可され、大安丸という古い貨物船に乗りました。22年の最終の復員船とのことでした。一人一人名前を呼ばれて乗船です。待つこと久し、無事名前を呼ばれ、タラップを一段一段踏みしめて上りました。

船室は船底の貨物置き場が充てられており、窓はないし、照明も悪く陰気でしたが、帰国の喜びで気になりませんでした。夕方出港しました。甲板に上がり、甲板からしばらく灰色におおわれたナホトカの町を眺めると、満州、シベリアで過ごした出来事の数々が脳裏に浮かび、万感胸に迫り涙が出ました。

二日目の夜半から暴風雨に遭い、海は大荒れで一時は沈没の不安を感じました。船酔いがひどくほとんどの人が絶食でした。幸い翌日には収まりましたが、私は船酔いで寝込んでしまいました。

12月1日朝、「函館山が見えるぞー」「日本に帰ったぞー」と叫ぶ声に衰弱していた身体に気力が蘇り、甲板に急いで上がりました。船は青空の下、静かに函館港へと進んでいました。「国破れて山河あり」。清々しい空気を全身に吸い込みました。眼下に一艘の小舟から日の丸の旗を大きく振り、私たちを迎えてくれています。その時の感動は終生忘れることはありません。下船の前、進駐軍の係員から尋問や検疫がありました。

12月2日、下船し日本の土を踏みました。宿舎から近くの風呂屋に行き、2年半振りに湯船の中で手、足を伸ばしました。シベリアの垢を洗い流しました。

復員手続きを終えて12月5日朝、青函連絡船に乗り青森から汽車で、東京、福山へと帰って来ました。福山駅に着いたのは7日の早朝でした。

出征した時と、駅前は一変していました。駅を出たら、草戸の山並みが見えました。駅前に家は建っておってもバラックでした。とにかく静かな朝でした。帰り道に、ただ一つ公会堂が昔の姿で残っており懐かしかった。我が家のこと、父母の安否を気にしながら気を落ち着かすよう、故郷の土を一步一步踏みしめながら歩きました。誰にも会いませんでした。元の地に平屋の新しい家が建ててありました。表札で確認すると我が家でした。父母も健在でした。

無事に帰国出来たことに感謝し、亡くなられた人々のご冥福を心からお祈りいたします。

出典 戦争の記憶 —ただ一度かぎりの「生」のために—

2002年5月15日国際ロータリー第2710地区福山南ロータリークラブ発行

昭和16年12月8日、帝国海軍の真珠湾攻撃が始まったとき、私は商業学校の5年生でした。全員校庭に集まってそのことを聞かされました。通常の卒業は17年3月ですが、3カ月短縮となり、高等学校、専門学校、大学予科に進学する人以外は当時徴用という制度があつて、国の命令で強制的に軍需工場で働かなければなりませんでした。

母の勧めもあつて、ここで落ちたら徴用でどこに行かされるかわからないと勉強に力を入れ、私は山口高等商業に進みました。

軍事教練とか勤労奉仕は商業学校時代と変わったところはなかったのですが、食料不足には閉口しました。1年生の時はそれほどでもなかったのですが、2年生になった昭和18年頃から顕著になりました。食欲は旺盛で常に空腹でした。昭和18年秋に突如徴兵猶予の制度がなくなり、文科系の学生は大正12年生まれまでの人は、昭和18年12月1日にそれぞれ指定された部隊へ入隊しました。卒業は6カ月短縮され、19年9月に卒業することになっていました。入隊前日の9月30日、広島の友達の家泊めてもらい、ラジオニュースでサイパンの日本軍玉砕を知りました。

私は昭和19年10月1日、広島市にあった西部10部隊に入隊し、2週間ほど疫病の予防注射などで過ごした後、下関から興安丸に乗船して釜山（プサン）に渡りました。朝鮮鉄道で鴨緑江（オウリョッコウ）を経て、間島省の琿春（コンシュン）に着いたのが昭和19年10月30日頃でした。

私の所属する部隊は満州第13125部隊と呼んでいました。輜重隊（しちょうたい）に配属されました。輜重隊というのは、馬に馬車を引かせたり、馬の背中に荷物を乗せて運ばせる役でした。つまり、食料とか弾薬を前線に運ぶ役目をする部署でした。

琿春はソビエトと北朝鮮と満州（現中国東北部）の接するところがありました。私は寒いところが苦手でしたので、ここでの生活は大変なものでした。

訓練期間は6カ月です。19年10月から20年3月まで極寒の時期に初年兵の教育を受けたわけです。私に与えられた馬は館波（たてなみ）と言いました。黒い毛の馬を青毛と言いますが、館波（たてなみ）は足が大きく力が強いのです。朝、輓馬の足を湯桶に入れた湯に雑巾をつけて、蹄鉄の間についている馬糞を洗い落とし、油を塗らないと病気にかかりますので、毎日そんなことをした後、馬に食事を与えてから人間の食事になるのです。

一期の検閲が終わる前に幹部候補生の試験があり、私は経理部の試験を受験しました。合格して延吉というところにある幹部候補生の集合訓練をする所に移りました。昭和20年6月のことでした。

「人間万事塞翁が馬」といわれるように、人間は何が幸いするかわかりません。私は乙種幹部候補生になったことで、生きて帰ることができたものと思っています。

昭和20年7月、琿春から新京まで10数時間かかったように記憶しています。第13125部隊から新京へは私一人でした。毎日厳しい訓練が続きました。ある日朝礼の時、誰かが大きなあくびをして指導教官の目に留り、その近くにいたものが全員ビンタをくらいました。

8月9日の朝刊に福山が空襲を受けた記事が出ました。その日にソビエトの飛行機が新京の上空に現れまして、日ソ不可侵条約が破棄されたことを知りました。新京の町はそれこそ蜂の巣をつついたような大騒ぎとなりました。

当時、満州の部隊である関東軍は殆ど武器とともに南方に行ってしまう、特に広大な国境方面は手薄となっていました。破竹の勢いで攻めてきたソ連軍に抵抗する術はなく、当時牡丹江にいた教育訓練中の甲種幹部候補生の人たちは、遺骨を入れる箱のような形をした急造の爆雷を抱えて、道路の両側に掘られた蝸壺といわれる穴から飛び出して戦車の下にもぐりこみ、信管を引いて戦車とともに自爆した人がたくさんいると聞いています。

黒竜江の支流である松花江の下流で、ソ連の国境に近いところに佳木斯（じゃむす）というところがあり、日本人の開拓団がたくさん移住して農業に従事していましたが、日ソ開戦の混乱のために、幼い子供を現地の知人に預けて、着の身着のままやむなく帰国した人たちがたくさんいました。

私は当時伍長のくらいでしたが、開戦とともに軍曹を飛ばして曹長のくらいになり、見習い士官となりました。元の琿春の部隊に帰る命令が出まして、新京の駅から列車に乗ったのが8月10日頃でした。来る時は10数時間でしたが、大混乱が続いたために列車は容易に動かず、結局琿春に帰ったのは8月16日の夕方でした。その日は上官から「疲れただろうから早く休みなさい」と言われ山のテントのなかで寝たのですが、翌日目が覚めて戦争が終わったことをしりました。8月17日の朝のことでした。

ソ連の戦車は当時からすでに頑強なボディと大きな大砲を据えていました。搭載した大砲は150mmのカノン砲と言っていました。10,000mは飛ぶと言っていました。その大砲で何十台の戦車から打ち込んでくるわけですから、たまったものではありません。わが方は対戦車砲として37mmの速射砲があったのですが、岩のような鉄の塊に当たると弾き返されるのです。わが方にも屈強な馬6頭で山の上まで上げた榴弾砲があったのですが、カノン砲のほうがよく飛ぶのでわが方の大砲はあまり役に立たなかったようです。

昭和20年8月9日,日ソ開戦となり,私が帰った8月16日には,正面と両側面は包囲され,後ろだけ残っていたようで,あと何日かで全滅するところだったようです。

終戦時には,わが方には武器らしいものは殆どありませんでした。単発式の小銃でさえも,大隊本部に数丁しかありませんでした。ほとんど南方にいきましたから,武装解除に携わったソ連兵は驚いたことと思います。ソ連兵はマンドリンに似た格好をした自動小銃を全員持っていました。私たちは山を下りて一か所に集められ,そこで何日か野宿をした後,「スコラダモイ」(もうすぐ帰る)という言葉に騙されながらの移動が始まりました。

私たちの部隊と同じ師団に13120部隊がありました。その部隊の一部は全滅したと聞いていましたが,その激戦地を通ることになりました。近くへ行くと,異臭が鼻をつきました。死んだ馬の匂いは大変なものでした。人も馬も折り重なって倒れていました。9月と言っても暑い時ですから,ウジ虫が這い回って半ば腐乱状態でした。ひどいと思ったのは,馬の足の先に蹄がついていますが,ウジ虫が骨と爪の間の肉の部分を食べたために,骨と蹄が離れて,蹄だけがごろごろと転がっていました。急造爆雷を抱えて死んだ兵士もいました。スコラダモイと言われながらソ連領に入り,ウラジオストックの北にあるウスリースクから有蓋車に乗せられてコムソモリスクへ行き,そこから船で黒龍江を渡り,日本海との中間あたりに連れていかれました。

後でわかったことですが,戦争中に日本海からコムソモリスクを経て,シベリア鉄道に平行にバイカル湖の方に走るバーム鉄道を計画したようで,この鉄道を完成させるために我々が使われたようです。この区間は,鉄道は敷いてありましたが線路の下にバラスがなかったために水はけが悪かったので,バラスを入れることと,機関車に使う薪を伐採するのが私たちの仕事でした。四方に望楼があり,銃を持った兵隊が四六時中監視付きの収容所に入りました。

食事ですが,朝は黒パンと鯉入りのスープ。昼と晩は高粱に鮭のだしで味をつけた雑炊でした。戦時中にもひもじい思いをしましたが,ここでも又ひもじい生活が待っていました。食料不足と寒さにやられて体調を崩す人が続出しました。月に一度検診があり,尻をつまんで弾力性がなくなると「オ・ペ」と言われて軽作業をし,翌月になって弾力性が戻ると正常な作業にもどるという繰り返しでした。娯楽施設は何もありませんので,それぞれがかくし芸を披露するのですが,仕入れることができませんのでいつも同じことの繰り返しでしたが,けっこう楽しい暮らしをすることができました。

1年経って,今度はコムソモリスクから西北にトラックで連れて行かれました。鉄道がないところだったのです。行ったところは伐採した木を並べてその上に土を被せて道を造っていました。鉄道の予定地は幅が20mくらいで,深さ2mくらいの溝を掘っていました。2mくらい雪が積もっているから,雪を除いて

その溝に土を入れなければ鉄道がもたないからです。その溝に雪がたまると雪かきが重労働で大変でした。たしか正月だったと記憶していますが、零下50度の目盛のある寒暖計が下まで下りて当分上がらなかったことがありました。

その地で1年ほど過ごした後、コムソモリスクに連れて行かれました。そこでは作業は何もしませんでした。コムソモリスクは黒竜江のかなり上流ですが、川幅がたぶん4 kmくらいはあったと思います。水が流れているときには対岸までの輸送は船ですが、冬になると波をうったまま氷ります。その上に鉄道を敷いて列車を走らせていました。福山出身の人と一緒に、しばらくしてナホトカから函館を経て、帰郷の途につきました。私の母は気丈な人でめったに涙は見せませんでした。私が山口高商に合格したとき、福山駅に着いたときに涙を流したことを今でもはっきり覚えています。

なんという駅を出発して来たのか
もう誰もおぼえていない
ただ いつも右側は真昼で
左側は真夜中のふしぎな国を
汽車ははしりつづけている
駅に着くごとに かならず
赤いランプが窓をのぞき
よごれた義足やぼろ靴といっしょに
まっ黒なかたまりが
投げこまれる

おおきな黒い鉄橋をわたるたびに
どろどろと橋げたが鳴り
たくさんの亡霊がひょっと
食う手をやすめる
思い出そうとしているのだ
なんという駅を出発して来たのかを

石原吉郎⁴全集「サンチョ・パンサの帰郷」から

⁴ シベリア抑留体験に基づく詩や随筆を多く著わした。

第3章 戦災と古野上町

はじめに

ある日、霞公民館に、手書きで書かれた一本の巻物が届けられました。それには「わたしたちの町ふるのがみ2008,町民館運営部」と記されていました。また、その前書きに、「戦災から六十三年古野上にも戦災の話をする方々が少なくなってきた。古野上町の事をレポートして下さいました方、思いを話して下さいました方、その当時の想い等をまとめて見ました。」と書かれていました。以下は、そこに記された記録をもとに、私達編集部が再編集したものです。実際の資料とは異なることをご了承ください。

田辺 齊

昭和20年10月16日、正午前福山駅で下車して駅前広場に立って驚きました。福山は戦災は受けていないと聞いての復員ですから、数分ぐらい茫然としました。戦災で焼け落ちたがれきが道の上に山となっていました。まだ道の整理がしていなかったのです。古野上に帰るのにどうしたらよいのかと見回して考えました。幸いなことに鞆鉄道がそのままありましたので、線路の道を野上駅まで歩いて古野上町まで帰ったのです。

古野上の町は、道路を整理されバラックの家が建っていました。私宅も戦災前の住宅の跡に、15坪くらいのバラックが建ち家族全員元気でしたから、1年前の入営以来再会することができました。それから11月下旬、電灯が復興するまでランプ生活だったと思います。昭和20年の年も暑い年で、10月20日ころまで半そでシャツだったと思います。

佐伯 博治

日本がアメリカ、イギリスに宣戦布告したのは、昭和16年12月8日で、同時にアメリカ海軍基地真珠湾を奇襲攻撃し、イギリスの植民地マレー半島に上陸、福山41連隊は戦闘に参加。（もちろん私も上陸部隊の一員です。）これが、大戦の始まりです。

アメリカ軍は、開戦から八カ月ガダルカナル島を上陸、強力な反撃を開始しました。間もなくアメリカは全域の制空権を握り、また太平洋の海上を封鎖して、日本の前線部隊に輸送する兵器、食糧、要員の充足も断ってしまいました。一線の将兵は飢餓と病に倒れ、本土主要都市は爆撃炎上し、アメリカ兵の本土上陸、広島・長崎の原爆投下という敗戦の道をたどり、昭和20年8月14日に無条件降伏。

戦争に耐えながら生き残った国民の再建に向かったの厳しい苦難が始まったのです。

私は、戦争要員として生まれたようにもあり、宿命と思っています。マレー作戦、フィリピン・ミンダナオ島上陸作戦、ニューギニア（ブナ）上陸作戦を体験しました。

井上 忠一（聞き取り）

昭和20年8月8日、福山空襲により古野上町も焼い弾により雨のようでありました。

その当時井上忠一さんは、18才で、その朝医者为学校へ行くべく家を出ました。その後、空襲になった。家を出たため、命びろいをしたのだと皆んな言っていた、と話されていました。

当時、井上さんの土地は400坪で、二階建ての大きな家だったそうです。40畳の部屋があったとのこと。焼けた後かたづけの時、四百坪の中に焼い弾が40数発見つかったそうです。又、焼い弾のおもりの一部凸の鉄のかたまりを見せていただきました。ガラスのとけたかたまりなども残っていました。（聞き取り資料 K記者）

岩田 英子

昭和19年4月から霞国民学校へ、転勤しました。

この頃霞国民学校では運動場の一部が食糧増産のための国策として、いも畑になっていました。

又5・6年生は芦田川の廃川地（今の体育館あたり）で稲や芋を作ったりしていました。又校内ではヤギを5・6頭飼って栄養不足の児童に飲ませていました。

軍隊へ供出するためのヨモギもよく取りに行き、炊事場で煮て太陽に干して乾燥したものを供出していました。

昭和20年5月だったと記憶していますが、4年生1クラスの60人程を連れて芦田川の西土手でヨモギ摘みをしていた時に警戒警報が鳴り、間もなくすぐに空襲警報が鳴りました。私は一人、児童は60人です。青くなりました。周囲を見渡すと草戸の山の麓に法音寺橋があり、そこに竹藪が見えたので、すかさず竹藪の中へ60人の児童を入れた頃にはもうB29の飛ぶ音が聞こえるのです。20機ほどが編隊を組んで白くキラキラと光りながら飛んでいるのでした。

竹藪の中に何分いたでしょうか、空襲警報は解除になったので、60人を連れて草戸大橋を渡り走って帰校しました。通学分団に分けてそれぞれの家へ送り届けほっとしました。一番恐ろしかった記憶です。

夜は毎晩のように警戒警報が鳴ります。私は学校へ一番近いので、職員の中でも一番早く学校へ行けました。霞学区の警防団長の滝宮さんといつも一・二を争った記憶があります。警報はまもなく解除となり帰って来る毎日でした。

その頃、町内会では隣組の会合が度々ありました。市のほうから回ってきた国債の割り当てです。お国のためということで何とか消化するよう皆で話し合っていたのですが、もちろん国債は敗戦と同時に紙屑となりました。

八月八日の夜もいつものように警戒警報が鳴りましたが、そこへ空襲警報となり、その音が消えない間に東の方がぱっと明るくなりました。大門に飛行隊がありましたので、そこへ先ず照明弾を落としたようでした。今夜は今までと全く違う感じでしたので、私は兄に「妹を連れて西へ逃げるから後をお願い、早く逃げて」と叫んで前々からの約束通り西に向かって走りました。

夏布団一枚を持って県土木出張所（今の水道局）へ走ったら、パラパラと弾が落ちてきたので持っていた布団を被って伏せました。やがて、飛行機の音が遠くへ行ったので、そろりと頭をあげて見ると、私の布団の裾が燃えているではありませんか。すぐ綿をちぎって捨てて予定の場所へ逃げて行ったのですが、一面のかぼちゃ畑が火の海です。びっくりしました。その近くを流れている芦田川の支流（今は道となり、草戸と古野上との境になっている）の中に入りました。川の中なら、との思いは皆さんあったようで、多数の人が入っておられました。すると川の上流から油脂が川幅いっぱいになって流れて来ました。橋げたが燃えだしてきました。川の中も危ないと思って岸へ上がりましたが布団は水を吸って重くて何にもならないので、岸へ残して本庄町の池の淵の知人の家に向かいました。たんぼの中の家で隣は川が流れているところです。畳一枚ほどの腰掛を出してくださり、もう何人か来ておられました。間もなく福山城が燃えだし焼け落ちるのを見ました。

やがて夜が明け、6時頃でしょうか「炊き出しが草戸の明王院に出ているので取りにくるように」とのお触れが回ってきました。兄妹二人と弟と私の4人がやっと落ち合った時のことでしたので、妹が受け取りに行きました。皆揃って炊き出しのおむすびをいただき、それぞれが持って出た水筒のお茶を飲んで朝食を済ませ、母の里の東村へ向かったのです。ずっと徒歩です。一晚泊まり、翌朝兄は福山へ帰って後片付けをしなければといいますが、私はもう福山へ帰らないで、そのまま東村の母の里で生活するようになっていましたが、兄に連れられて又帰って来ました。途中、荷物を積んでいない馬車に乗せていただき大助かりでした。

いよいよ福山へ着き、芦田川の東側の堤防へ立つと、見渡す限りの焼け野原で、あちこちから煙が上っていたし、火の見える所もありました。まだまだ熱いので入ることは出来ませんでした。まずは、今夜何をするかが一番の問題だったのです。市内を見渡せば、長者町あたりが焼け残り、植木が青々と見えるのです。霞小学校で同学年の先生のお家が焼け残ったあたりだと思い、一人、長者町の方へ行きました。案の定大きな家が残っており、大変喜んで迎えてくださいました。地獄に仏とは正にこのことかと私は涙しながら兄妹弟を迎えに行き、翌々日から焼け跡の片付けが始まりました。

郷分、山手、津之郷、赤坂、神島、佐波など西の方へ疎開していた人たちは朝に夕に神島橋を渡って焼け跡の片付けが毎日毎日続くのでした。

焼け跡の火も消え、破れた水道の口より水がチョロチョロ流れていたのも、水の心配はありませんでした。お弁当を持って焼け跡の片付けに出てきても、八月の暑い暑い日差しの中で木陰は全くなく、それでも大勢の人々が毎日毎日出てきては片付けに精を出しておられました。そのうちに焼け跡から拾ったトタンや焼け残りの木を集めて半坪ほどの小屋があちこちに出来始めました。根石も掘ると使えるのがありました。

まだ当時は区画整理が出来てないので、5坪以上の家は建てられませんでした。又その頃の道路より何メートルか引いて建てよとのことでした。瀬戸で製材を済ませた材木が牛車に引かれてやって来ました。我が家の5坪の家が出来始めました。西の方から焼け跡の片付いた道を通る人々は、5坪の家を見上げては「根石が座っている」「瓦が葺いてある」「本建築だ」「壁がついている」と口ぐちに言いながら見ていただきました。電灯も一番早く引いてくださったように思います。空襲のない静かな夜をゆっくり寝られるようになりほっとしました。

霞小学校は丸焼になったので、児童は西小学校でしていただきました。私の退校式も西小学校でしていただきました。

考えてみると、空襲を受けたおり、焼夷弾の直撃で亡くなられた人が2人あったと記憶しています。又、一度は逃げてもまだ大丈夫と思って今一度家の中に入り何か持ち出そうとして黒こげになった人、隣組の防空当番に当たっていたため逃げ遅れて自分の家の防空壕で焼死された母娘……。あのようになくさんの焼夷弾を落とされたら身一つで逃げるのがやっとです。

いつの頃だったか、全く記憶にないが、5坪の制限が10坪になりました。西隣の岩瀬さん、東隣の古志さんは10坪になった頃帰ってこられたように記憶していません。

日本国敗戦の色の濃くなった終戦1週間前の八月八日夜,米軍戦闘爆撃機 B29 による福山爆撃があり,私は当時国民学校の3年生でした。

夜寝る準備をしていたところ警戒警報サイレンが鳴りその直後,空襲警報に切り替わり,私は防空頭巾を被り,足にはゲートルを巻き,必需品を詰めたリュックサックを背負い,町内の防空壕に避難いたしました。その時福山城は火を吹いていました。

その当時は高い建物は無く,福山城がよく見えておりました。まず照明弾が投下され,真昼のような明るさになり,防空壕の中では2日前に広島に投下された原爆ピカドンだと騒いでおりました。防空壕の中は満員でした。その時近所の中学2年のお兄さんが早く逃げようと,私を連れて軽便鉄道の線路に沿って現在の中間理容院の前を歩いて50mぐらいの先の川に避難したそうです(父の話)。父は私と近所のお兄さんの姿が見えないので,私の名前を呼び続けたそうです。すると大きな声を出したら敵に聞こえるから静かにしなさいと叱られたそうです。爆撃が終わり,皆が探し合い近所の方々との無事を確認して,草戸の明王院に行き,濡れたものを乾かしそこで親類に身を寄せる者,知人に頼る者,別々の行動を取り,私たち家族5~6家族30人くらいは,1組井西さんのおじいちゃんの計らいで,瀬戸農協の志田原倉庫の軒下で約10日間を過ごしました。志田原の倉庫は今でも残っています。

その後野上町三丁目で工場を営んでいた井西さんの工場が焼失を免れていると聞き,そちらに移らせていただき,3家族15~16人が共同生活をいたしました。食べ物は軍払い下げの乾パン,トウモロコシを粉にしてホウロクで焼いた物,芋づるなど食べました。

学校も二学期が始まり,霞国民学校が焼失のため,西国民学校へ1週間交代で午前,午後と分けて授業を受けました。父は知人に木材,竹などを分けてもらい,焼けたトタンを集めバラックを建て,年末までに完成させ昭和21年の正月はバラックで迎えることができました。霞国民学校もその頃完成したように思います。

近藤 茂久

福山が戦災に遭って,今年で63年目,今当時の爆撃のことを思い出すと,良く助かったなあと思う。

当時小学校6年生。家はかなり大きな土地に2軒建っていて,その内の1軒に住んでいた。中庭に炊事場があり別の建物であった。その炊事場に井戸,流し

台、かまどなど生活用品が揃えてあった。爆撃の翌日、焼け跡を整理していると茶色に焼けた炊事場のトタン屋根一枚に2〜3箇所穴が空いていた。相当な数の焼夷弾が落ちたのだろう。

古野上町が焼けだしたのは、今の水道局の所へ県土木の建物があり、それに火がついてからだ。それまでは、防空壕の外に出て、福山城の焼ける姿や市街地に花火のように落ちる焼夷弾を眺めていた。防空壕は今の水道局の駐車場のところにあった。当時は水源塔が建っていた。川の堤の上だったように記憶する。その防空壕に近所の人たちが避難していた。

古野上町に焼夷弾が落ちだして、みんな中に入っていたが、経験のない出来事に不安があった。防空壕には、前後に出入り口があった。その出入り口に焼夷弾がころげこんで来た。みんなは一斉に外に出た。向かう先は西側100m先にある川である。川までの間は、サツマ芋が植えてあり、足をもつらせながら逃げたことを思いだす。中には頭にバケツをかぶっていた人もいた。あたり一面に火の海だったので、とにかく喉が渴いて川に入るや川の水を飲んだものだ。人がたくさん川に居たので多分、かなり濁った水を飲んだのだろうと思う。

私は防空壕の中で顔にかなりの火傷を負った。当時は薬もなく薬草を煎じて塗った。全治までかなり日数がかかった。

当時、思い出の中で、強く印象に残ったことの一つに食べ物がある。何しろ食べ物少なく、毎日が粥だった。近所の家で友だちが、白いおにぎりを食べていたら、無性にほしかった、うらやましかった。多分田舎に親戚があったのだろう。時には友達のお母さんが「これを食べなさい」といただくこともあった。食べざかりだったから本当にうれしかった。食事時になると近所の家から釜の中を、おたまでカリカリと、こさいでいる音を聞くこともある。自分の家と同じだなあと思っていた。ほとんど毎日がいも粥だった。そのいも粥も芋の中に米つぶがあるといったもの。

八月だからさつま芋の採れる時期、茎や葉も入っている。こうしたものを求めるのも一苦労だった。ある時、新涯町に行った時である。当時は自転車もなく歩いて行った。当時そのあたりは田んぼと畑ばかりだった。畑に芋の収穫した後の芋づるが散乱していた。その芋づるの茎を取っていたら、畑の持ち主から、それは取ってはいけないと叱られた。自分の家の牛にやる餌だからと言われた。まだ子供だった私は、食べ物がないから分けてと言ったけど聞いてもらえなかった。子供心に人間より牛の方が大事なのかなあと思ったことを、今になっても忘れることができない。

家では、豆かすに芋の葉や茎、セリ、あわ（今では鳥のエサだ）と少しメリケン粉を混ぜてフライパンで焼いて食べていた。

とにかく食べるものがなく質素な生活である。疎開先の食事どきもずい分みじめさを感じていた。どうしても相手の食事に目が行くので、よく親に叱られた

ものだ。
(後略)

河内 親忠

私は甲奴郡上下町清岳村水永で、昭和13年9月12日に生まれました。福山空襲の時、私は小学校一年生でしたが、夜になって、今、鞆が空襲だそうだとので、その時は防空頭巾をかぶって畑の高い所へ逃げた事をおぼえています。家の中のデンキには黒い袋をかぶせて光が見えないようにと、村ではおふれが回っていたように思ひます。私の生まれた水永は下組、上組、中組の三つの組に分かれていて全戸数は六十戸位で、家はポツンポツンとあるだけで、こんな所に本当に爆弾が落ちるんだろうかと思ったことでした。

古野上町の皆さんにくらべれば、家はあるし百姓であったため大変さは少し違いましたが、戦前戦後を通しておいしい物を食べたという思ひ出はありません。ごはんは麦が七で米が三、それで、ふかしいも、とうもろこし、豆類、買ったオヤツは五円とか十円。小遣いはほとんどありませんでした。ほとんどが野菜の生活だったと思ひます。それでもこれが生きている事だと思っていました。でも他の家にあつて私の家にはない物は多くあつたように思ひます。アメ一個一円、アイスキャンデー五円、玄米パン五円、ニッケ水やキャラメルが十円か二十円か思い出されます。

私の家の前は今も同じですが、道路に面していました。昔は福山～庄原線でニコニコバス（中国バス）が通っていました。庄原行は朝八時、十時、十二時。福山行は一時、三時、六時でした。私の家は福山からは一番高い所で、上下の方へは下りとなっています。二百メートル下が清岳農協でバスの停留所で、私が中学生当時、福山～水永間は百二十五円でした。水永と上下の間は二十五円（四里）だったと思ひます。

ところで、町内の皆さんの話を聞いたりレポートを読んだりしてきて、古野上町の防空壕は町内のどこにあつたのだろうと、かねて思っていました。その当時私は上下にいましたのでわかりませんでした。古野上町内には二、三軒に一ヶ所、大小の大きさで作つてあつたらしいです。防空壕に入った方、逃げて入つた方は、外が燃えて熱いので防空壕に入り亡くなった人が多くあつた、というような話を聞きました。水道局の裏の川の中に逃れた方が多かつたのだそうです。

第4章 寄稿など

はじめに

この章は、リレートーク以後、地域の皆様から霞公民館に寄稿いただいたお手紙等を整理したものです。ただし、佐久間さんの文章は、平成28年8月8日付け読売新聞に掲載されたものを再編集したものです。

1 妹の手

佐久間 暁（霞町三丁目 塗料店経営 当時地吹町）1932年（昭和7年）生

軍人だった父の台湾出征に伴い、1944年（昭和19年）秋に山口県から、母の実家がある地吹町へ疎開してきました。食糧は乏しく、畑に麦や芋を植える傍ら、長男として弟や妹の世話をしていました。

八月八日の夜、B29爆撃機の大群が市内に現れました。地吹町は郊外なので、空襲は受けないと思っていました。慌てて家族とともに、近くの防空壕に逃げ込みました。寝ているところを起こされた妹の久恵（3才）は、ぐずっていました。壕の中で近所の人から草餅を分けてもらい、機嫌は直りました。

2日前広島で原爆が投下され、「広島に変な爆弾が落ちた。外に出て光線に当たったら命が危ない」そんな噂が流れていたもので、防空壕にとどまっていた。

避難して約10分後に外を見ると火の手が迫っており、家族は思い切って外に飛び出しました。母は生後4カ月だった三男を背負い、小学1年生だった二男は先に走っていました。自分は片手に貴重品を持ち、もう片方で頭にバケツをかぶっていたために、妹の手をひくことが出来ませんでした。少し走って妹の姿が見えないことに気付きました。

壕に戻ろうとすると、母から「戻ったらみんな死んでしまう」と引き留められました。やっとのことで古野上町の畑までたどりつきました。

翌日、家族で家に戻ると母が五右衛門風呂の中から妹の下着の一部を見つけました。風呂に水をためていたので安全だろうと思って隠れたのでしょうか。妹は「お母ちゃん、お母ちゃん」と泣いたと思います。あの時、手を放さなければ・・・無理やりでも妹の手をひいていればはぐれることもなかったはず。妹は死ぬために福山に来たようなものだと、悔いしか残りません。母は一言も私を責めませんでした。それがかえって辛く、妹を偲んで、毎年八月八日は福山戦災死没者慰霊式に参列しています。

2 福山空襲と平和学習

森近 静子（野上町二丁目）

今思い出してもぞつとする昭和二十年八月八日、私の居住地福山市を中心に午後十時頃、空襲警報の知らせがけたたましく鳴り響き、私たち家族7人は我が家の敷地内に栗の八分板で造ったわずか畳2帖あまりの防空壕にいつもの通り駆けこみました。私たち家族構成は当時昭和9年生まれの子を頭に乳飲み子まで5人姉妹7人家族でした。

父はそのうち、隣組の男性の方たちと水の入ったバケツを両手にすぐ近くの集会所へと向かいました。次の瞬間父が防空壕に頭から「やられた、もうだめだ！！」と血走った言葉づかいと共に滑り込んできました。と同時に外からシュー、シュー、シューというけたたましい音と共に耳を引き裂くようなずどんという地鳴りがし、体が揺れ、家族7人生きた心地はありませんでした。隣保組の人たちがそれぞれバケツを手に「森近に爆弾が落ちた！」「森近に爆弾が落ちた！」と叫ぶ声が外から聞こえてきました。隣保の皆さんのその声を聞き耳にしたとき「ああ！みんな助かったのだ！」「ああ良かった、良かった」と父が声にはならない声で言いました。その時のことは子供ながら今でも忘れられません。親子7人お互いに顔を見合わせほっとしたことを今でも覚えております。あの時の父の顔を始めとし、家族全員の形相は今でも脳裏に焼き付いています。皆それぞれに思いのまま無上の感涙にむせびました。その後父から7月末日頃に福山市上空にB29が飛来し、6万枚からの空襲予告のビラ（当時はそのビラを伝単とっていたそうです）が散布されていたと聞き、驚いたことを今でも覚えています。

八月八日の午後10時25分～11時35分の約1時間にわたって大津野村の福山海軍航空隊の周辺から徐々に市中心市街地へと爆弾を投下したとのことでした。死者354名、けが人800余名、当時福山市の人口は58,754名とのことでした。

翌朝、恐る恐る表に出て家の周りを見ると、あの栗の八分板が3メートル先の田んぼの中に突き刺さっていました。その様子は爆弾の凄まじさを物語っているようで、今更ながら身も心も縮みあがる思いでした。

今でもあの時の思い出は、よく命拾いをさせていただいた、頑丈な防空壕のお陰と感謝いたしておりますと同時に私にとって生涯忘れることの出来ない大変な出来事でした。

また爆弾の傷跡とでもいいでしょうか、お隣の壁に日本地図を逆さにしたような形で4か所に油土が飛び散っておりました。この状態は、お隣が家を建て替えられる最近まで福山空襲の傷跡の一片として残っていました。

この状態を子供たちに八月八日に目の当たりで起こったこと、そうです、このお隣の壁の状態を説明しながら3人の子供たちに平和教育、学習の一端として教

えてきました。孫たちも小学校低学年で広島原爆ドーム、平和記念館へと足を運び平和学習に取り組んでおりますが、私の家でも身近なところで我が家での平和教育に取り組んでおります。

孫たちも私の話に熱心に耳を傾け、関心を寄せてくれます。このことも実際にあった実体験の中での話だけに、子供たちも興味深く聞き入ってくれていると思います。

未来のある子供たち、若者たちが将来に向かって歩むことは過去から学ぶことが多く、そこから学習していくことが大切だと思います。

私たちはあの時の苦しみを、悲しみを、忘れることなくドキュメンタリーとして残し、歴史の見直しをしながら伝承していくことが大切だと思います。

私が考えること思うことは小さな小さな思いではありますが、科学が戦争を呼び、人類の罪なき多くの人々を犠牲に死へと追いやり、あの時の悲しい悔しい涙を今、私たちは後世の子孫に残してゆくことを今後私たちに課せられた大切な課題だと思います。寄稿2016年（平成28年）6月

3 久留米49連隊入隊 終戦から復員

井上 静行（霞町三丁目）

男子は満20才の達すると兵役の義務があり、徴兵検査を受けた。これを逃げることは大きな犯罪だった。

甲種合格者と第一乙種合格者は軍隊への現役入隊となり、第二乙種合格者は教育召集3カ月で召集令状が来た。丙種合格は兵役免除だった。

私は第二乙種であった関係で、昭和18年3月10日久留米49連隊の戦車隊の召集令状が来た。当時は教育召集であったが、入隊後、臨時召集に切り替えて、6カ月軍隊生活をした。

第一期の軍隊教育を終え、引き続き臨時召集となり、久留米戦車隊に残った。この時点で、帰郷するもの、又南方戦地、満州など各方面に配属されていった。

私は東京の陸軍士官学校に分遣を命じられ、軍人の将校候補生と軍事訓練を受けた。富士山麓で戦車を操縦し軍事演習をした。

昭和19年頃から次第に戦況は悪化し、南方あたりは米軍の支配下になってきた。日本の内地も東京、名古屋、大阪と都会は空襲の対象になっていった。

20年4月には、沖縄に米軍が上陸するということの守備のために、東京より軍用列車を編成して戦車40台、軍人300名、軍用馬など一個列車で山陽線を下る。勿論遺書も書き、軍事郵便にて故郷に送った。悲壮な決意である。列車は九州宮崎海岸に着くも、戦車など運ぶ上陸用の船艇が軍艦大和とともに沈没したため上陸用の船が無く、宮崎の山の奥地（東諸形郡ひがしもろかたぐん）の民宿に留ま

り、軍事訓練をした。幾度か空襲を受けた。

昭和20年8月15日、上官から今日は重大放送があるから、全員校庭に集合するよう命令があった。12時頃天皇陛下の玉音放送を聞き、内容は聞き取り難いところがあったが、戦争が終わったことは理解できた。全員頭を伏して涙した。

後から、広島に特殊爆弾が投下され広島が壊滅したとの報告があった。軍の規律は乱れ、2～3日後には私服を着た今までの軍人が、2人3人と軍隊を離れて帰るものがあり、君たちも早く逃げないと命はないと思うなどの言葉を聞き不安が募る。

8月20日頃、班長から「君は国鉄の輸送の要職であるので、日本の復興のために直ちに除隊をせよ」との命令を受けて帰郷した。帰郷するにしても、列車はほとんど動いてなく、宮崎より軍隊の自動車で門司まで帰り、関門隧道は歩いて下関まで出た。都合良く貨物列車が駅に到着していたので無蓋車に乗り広島駅に着いた。広島駅より南方向、宇品の方面まで一面焼け野原で、あちこちから煙があがっていた。異臭がしていたので死体もあったものと思う。

宮崎から除隊のときもらった飴を食べ、プラットホームの端の方で出ている水を飲んで飢えを凌ぐ。8月22日、備後赤坂駅に着く。真黒い顔をしてボロボロの服を着ていたの、駅長さんをはじめ皆びっくりしていた。当時は駅員の状況も現代と異なるところがあって、直ちに我が家に連絡をしていただき、家族も近所の人たちも驚き喜んだようであった。

8月24日、糸崎機関区に復員した旨挨拶に行った。（平成28年9月20日寄稿）

4 女子挺身隊の手紙（遺書） （抜粋）

はじめに

井上加代子さんは戦争激化の昭和20年に徴用され、軍国乙女として第11海軍航空廠に勤務し、連日の空襲で明日の命もわからない状況下、故郷の父母に遺書のような手紙を送っておられました。幸いにも無事福山に生還されましたが、2016年（平成28年）8月ご逝去されました。このたびの証言集の発刊に寄せて、ご遺族の方から遺品の整理をしていたら、この手紙（髪と爪も）が出てきたとお寄せくださいました。

井上 加代子 （当時 二十才）

疲れ切った足を引きずりながら宿舎に帰ってみましたら、お懐かしいお母さんからの便り、一度に疲れが治り、嬉しく拝見いたしました。その後、皆々様お変わりなくお過ごしの上、何よりとお喜び申しあげます。私も元気で働いていますから、ご安心くださいませ。でも、本当に今日あって明日も知れない状況となりました。こうしてお便り書いていても、これが最後になるかもわかりません。連

日敵機の空襲があります。

午後5時半に工場を出発しましても、疲れた足を引きずりながら宿舎へ着くまで1時間もかかるのです。帰れば間もなく暗くなり、手紙一つ書けない状態です。ただ寝に帰るのみです。食事の方は、毎日粟飯に塩汁。それに焼けつくような暑さと長い道のりの行き帰りで、とても体が続きません。今頃、家ではナンキンやナス、西瓜、きゅうりなどいっぱいあるでしょう。いつも帰り道に畑の野菜を見ては、もう一度帰って食べたいなあと友達と話すのです。今は何も着物はありません。ただその日暮らしで、ただ食べることだけです。このままでは栄養不良になるでしょう。でも戦っている国の国民ですので、どんな不自由も我慢しなくてはなりません。

今昼休みです。インクの色が違うところまで書いて空襲があり、防空壕に待機してやっと帰って昼食したところです。今も防空壕にいましたら、耳をつんざく大きな爆音がして、ああもう駄目かと思いました。こうしてじっと今までの過去考えますと、涙が出てきます。もう一度お父さんお母さん一目でも会いたい。私どうしてこんな岩国の方に来たのでしょうか。これも私に運命、仕方ありません。帰りたい。夢でいいから帰ってみたいです。

お母さん、私が持っている着物も再び着ることはないでしょう。今は何もありませんので、着る人があったら差し上げてください。女学校で習わせてもらった洋裁も、家にいたらお母さんと並んでできたでしょうが、それも叶わず、空襲下のこの岩国が最後の地となるでしょう。思えば、本当に親不孝な私でした。小さい時からご心配ばかりおかけしてきた私です。お許しく下さいませ。

今、こちらへ洋裁ノート2冊持ってきています。焼けてなくなってしまえば惜しいですが、そちらへ送ることすらできません。貯金も7月末までに384円50銭しています。番号は、くてら15・・・です。

今ここまで書いた時、係官がロシアが日本に対して宣戦布告をしたと皆にお話しになりました。いよいよ最後になりました。死ぬのが早いかな遅いかなだけです。もう何も欲しくはありません。ただ帰って皆に会いたいのみです。この便りが届かないうちに駄目になるかもしれません。もし華と散った時にと髪と爪を同封しておきます。お父さんやお母さんは加代子がこんなことまでも、とお思いでしょうが、私は真剣に考えています。山崎の姉さん、小畠の姉さん皆お元気でしょうか。家の人からよろしくお伝えください。お父さんお母さんの長命を念じながらペンをおきます。

昭和20年8月9日 加代子より

※女子挺身隊とは

女子挺身勤労令 昭和19年8月公布の勅令で、主に14才以上の未婚の女子を対象とし、形式上当初は自主的就労の形をとったが、のち強制措置となった。終戦まで47万人が隊員に組織された。本県では主として、旧制女学校在学生や卒業直後の女子が徴用され、軍需工場で兵器の部品づくりや被服の縫製などにたずさわっていた。

5 私が小さかったころ

(2015年6月23日霞公民館講座参加者と霞公民館利用者の方の証言)

戦争の話	<ul style="list-style-type: none">○昭和19年生まれ 空襲が終わってアメリカの飛行機が帰る途中,爆弾を近くの山に捨てたと祖父から聞いた。○4才の時 防空頭巾に布団をかけられて逃げた。地吹町の土手から忘れ物をして取りに帰ろうとした母を泣いて止めた。そのまま帰っていたら焼夷弾にやられていた。後で母から感謝された。○4才のとき 空襲の日は,軌軽便鉄道の線路伝いに逃げた。明王院で炊き出しをもらった。○昭和7年生まれ 淀川の土手に逃げ窪みに身を隠した。隣にしゃがんだおじいさんが爆弾で頭を直撃された。○13才の時 呉海軍工廠で機雷を作っていた。○戦火の中,下駄が脱げたのも気づかず明王院へ逃げた。夜が明け市街地が落ちていた霞に帰ってくると,道三川に人が重なり合って馬も死んでいた。○83才 出征兵の家に田植えや稲刈りの手伝いに行った。勉強より勤労奉仕が多かった。池の土手直しをした。○昭和8年生まれ 福山空襲の次の日,戸手女学校の生徒は皆で揃ってアツアツのご飯を握って炊き出しの手伝いをした。手の熱さと共に強烈に印象に残っている。○地吹町の淀川には20数体の遺体が重なりあっていた。○9才の時 さく橋のところにガスでお腹の膨らんだ死体があるという噂を聞き怖いもの見たさで見に行った。
------	--

食 べ 物	<ul style="list-style-type: none"> ○戦時中,農家だったので米は供出した後も残っていたので,魚や肉や衣類もお米で物々交換していた。 ○戦時中学校は芋畑だった。食事は芋,麦,じゃがいも,かぼちゃ ○芋づるやアメリカざりがにを主食とした。 ○83才 雑草摘みをした。麦の雑炊を食べていた。芋はごちそうだった。いつもお腹が空いていた。弁当も麦が主だった。 ○昭和23年頃 芋づる,だんご汁,トウモロコシ ○芋づるの佃煮,どんぐり菓子 ○さつま芋を輪切りにしてむしろの上に広げて干し,保存食のようにしたりおやつにしていた。蒸したさつま芋は上等品として扱われた。 ○昭和28年頃 通学時MPにチョコレートやガムをもらった ○79才 田舎に住んでいたので食べ物には不自由しなかった。 ○魚は川や池で採れた。ナマズ,フナ,ドジョウ,タニシなど。地域の人たちみんな池を干して,どろんこになって採っていた。 ○昭和29年生まれ イタドリ (スカンポ タチンコとも言っていたように) 遊びながら食べて美味しかった記憶があるが,今はすっぱくて.....。 ○昭和24年生まれ 近所に小売店がやお菓子やさんもあってお使いに行くのが楽しみだった。
-------------	---

遊 び	<ul style="list-style-type: none"> ○昭和12年生まれ 昭和18年～25年頃 手作りのおもちゃ 三つ車,四つ車,竹馬,竹トンボ,紙でっぼう,杉でっぼう ○くちくかんという遊びをしていた。帽子の向きを変えてチームを作っていた。 ○缶けり, ○83才 (昭和6年生まれ) 兵隊ごっこ,陣取り,縄とび,石蹴り,ゴムとび,お手玉,字隠し ○86才 小さい頃は女子も男子も棒を持って戦争ごっこ ○農業の手伝いをしていた。 ○雨が降った後,「雨喜び」といって神社で遊んでいた。 ○磁石にひもを結び,鉄くずを集めて売った。アメリカ軍の缶詰めの空き缶が野や池に捨てられているのを集めて売った。 ○ゴムまりで遊んでいた。母親に毛糸で袋を編んでもらった。 ○昭和28年頃 ベーごま,自転車の車輪 (タイヤなし) ころがし ○昭和22年生まれ 日暮れまで外で遊んでいた。校庭では上級生下級生一緒に遊んだ。にくだん,鬼ごっこ,ゴム飛び,トッチボール ○昭和23年生まれ 缶蹴りゴムとび ○66才 昭和30年代～40年代後半を小中高大学と学んだ。 両親祖母妹とテレビを見るのが日課。 「ただいま11人」「事件記者」「シャボン玉ホリデー」を覚えている。 男の子も女の子もいっしょに鬼ごっこや缶蹴りやお人形さん遊び。着せ替え人形などして楽しかった。
洋 服	<ul style="list-style-type: none"> ○戦時中は女性は皆もんぺ。よそゆきももんぺ。胸には血液型を書いた名札を付けた。 ○昭和16年生まれ 小学校の時服がないのでセーラー服は父親の着物から,かぼんは母親の帯から作ってもらった。 ○昭和12年生まれ 履物は,ほとんど,わら草履。雨が降ると素足で学校へ行った。昭和25年ころからゴム草履になった。 ○昭和24年～25年頃 かすりのモンぺ,わら草履をはいて遊んでいた。色のある布を入れて作ってもらったわら草履はよそ行きでした。学校へはくつを履いていったのかな?という記憶です。 ○66才 母の手作りのブラウス,スカート,ワンピース。思い出いっぱい柄と母のにおいがいっぱいでした。 ○昭和23年頃 ズボン,靴下などつぎあて服だった。 ○昭和22年生まれ 霞小学校は式典や行事の時のみ標準服であとは自由だった。

学 校 ・ 生 活	<p>○城下町だったからだと思いますが,どんだん池をスタートして町中へ排水路ができていたと思います。</p> <p>○昭和22年頃 戦中の教科は「修身」「国語」(読み方書き方)「算数」「音楽」「体操」「図画」「工作」「地理」「国史」</p> <p>○国民学校時代(昭和16~22年)の評価 「優」「良」「可」「不可」</p> <p>○79才 学校にいるとき警戒警報が出ると下校になり,うれしかった。</p> <p>○昭和7年生まれ 尋常高等小学校へ入学,国民学校で卒業した。</p> <p>○66才 中2のとき,田舎から転校した。福山は勉強が進んでいて,転校した次の週にテストした。2学期で教科書は終わり,3学期は高校受験のためのテストばかりでつらかった。</p> <p>○霞小学校は焼けて西小学校に通った。</p> <p>○昭和19年より英語は使用できなくなり,英語の授業もなくなった。</p> <p>○昭和30年頃 国道2号線を馬車が走っていた。鍛冶屋もあった。</p> <p>○昭和29年生まれ 子供の時,お豆腐を買いに行く時は,鍋かボールを持って行き,一斗缶から手ですくって出してもらっていた。</p> <p>○65才 子供の時から内職(軍手編み,紙袋作り,袋入れ,子守など)をした。</p>
-----------------------	--

6 厚生団子とすいとん レシピ

2016年11月20日（日）霞公民館において、人権平和資料館“ピース・ナビ”主催で「厚生団子を作って食べよう」という企画がありました。

厚生団子の作り方

【材料】 (20個分)

小麦粉100g 米ぬか100g さつま芋の蔓・葉（湯がいたもの）各120g
塩少々 水100g コーティング用の小麦粉適量

【手順】

- ① さつま芋の蔓と葉を細かく刻む。
- ② 小麦粉と米ぬかをまんべんなく混ぜ合わせる。
- ③ 水に塩を加えよく溶かす。
- ④ ②に③を少しずつ加えてよく混ぜ、生地がまとまってきたら①を入れ、よくこねる。
- ⑤ ④の生地を小さく丸めて団子を作り、まわりに小麦粉をまぶす。
- ⑥ 鍋に湯を沸かし、沸騰しないうちに団子を入れて湯がき、茹であがったら鍋からすくいあげて皿に盛る。

すいとんの作り方

【材料】 (3人分)

小麦粉150g 水約100cc 塩少々 野菜 少々（皮や切れ端）
水 750cc

【手順】

- ① 小麦粉に水を少しずつ加えてよく混ぜ、耳たぶぐらいの硬さによく練って、20～30分置いておく。
- ② 野菜を食べやすく切って鍋に入れ、水750ccを加えて柔らかく煮る。
- ③ ①を同じ大きさに小さく丸め、手のひらで押して薄くのぼし、沸騰した②の鍋に入れてよく煮る。
- ④ すいとんによく火が通ったら、塩で味付けをして、かき混ぜ火を止める。
（現代版すいとん・・・だし汁やお醤油をつかう）

証言をしていただいた方々（掲載順）

宇井 みや子	森田 与三郎	三井 澄子	北川 俊一	松浦 薫雄
佐崎 ヒナ	坂本 静江	伊藤 愛子	島田 薫荘	広川 富保
比名 里子	岩田 知治	藤尾 幸吉	神野 清子	小道 幸恵
小川 善太郎	塚本 孝子	古川 艶子	佐々見充代	相川 タミ
伊藤 美智子	藤井 正	高山 シズ子	小林 まさこ	畑 オエイ
池田 達子	池田 龍市	藤井 弘一郎	近藤 茂久	木村 滋
杉原 靖子	古谷 佳子	森近 静子	杉原 弘	枝広 稔
江草 孝昌	江木 吉江	落合 照江	松本 和子	岩田 英子
土井 茂	高橋 寛登	田辺 齊	佐伯 博治	井上 忠一
中村 賢二	河内 親忠	佐久間 皖	井上 静行	井上 加代子

出典,引用資料等

福山空襲の記録（福山空襲を記録する会 1975年 昭和50年）
 続福山空襲の記録（福山空襲を記録する会 1985年 昭和60年）
 福山が燃えた日（福山市人権平和資料館 2016年 平成28年）
 Piece for Peace（福山市人権平和資料館 2016年 平成28年）
 戦災と古野上（古野上町民館運営部 2008年 平成20年）
 戦争の記憶（福山南ロータリー 2002年 平成14年）
 石原吉郎全集（花神社 1979年 昭和54年）

編集後記

2年前の2015年（平成27年）は戦後70年ということもあり,福山市では戦争や空襲体験を「今,聞いておきたい,今,知っておきたい」という機運が高まった年でした。

ここ霞学区でも,同年5月に開催された「福山が燃えた日～私も聞きたい,話したい～」がきっかけとなり,地域の皆様から貴重な体験談や大切な資料を多数お寄せいただきました。そういった地域の皆様の協力をいただく中で編集作業を開始しましたが,おかげさまで,ここによりやく完成いたしました。一人でも多くの皆様にご一読いただきたいと願っています。

最後に,きっかけを作ってくださいました福山市人権平和資料館とピース・ナビの皆さま,お話しいただきました皆さま,転載を快くご許可くださいました「福山空襲を記録する会」の岡田智晶様,資料の提供や寄稿していただきました地域の皆さま,あらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。

編集委員（五十音順）

浦上 武 枝広 稔 大西弘子 金高さゆ里 小林 浩
渋谷正和 瀬戸政子 平 莞爾 渡辺錬治

霞学区 福山空襲・戦争体験証言集

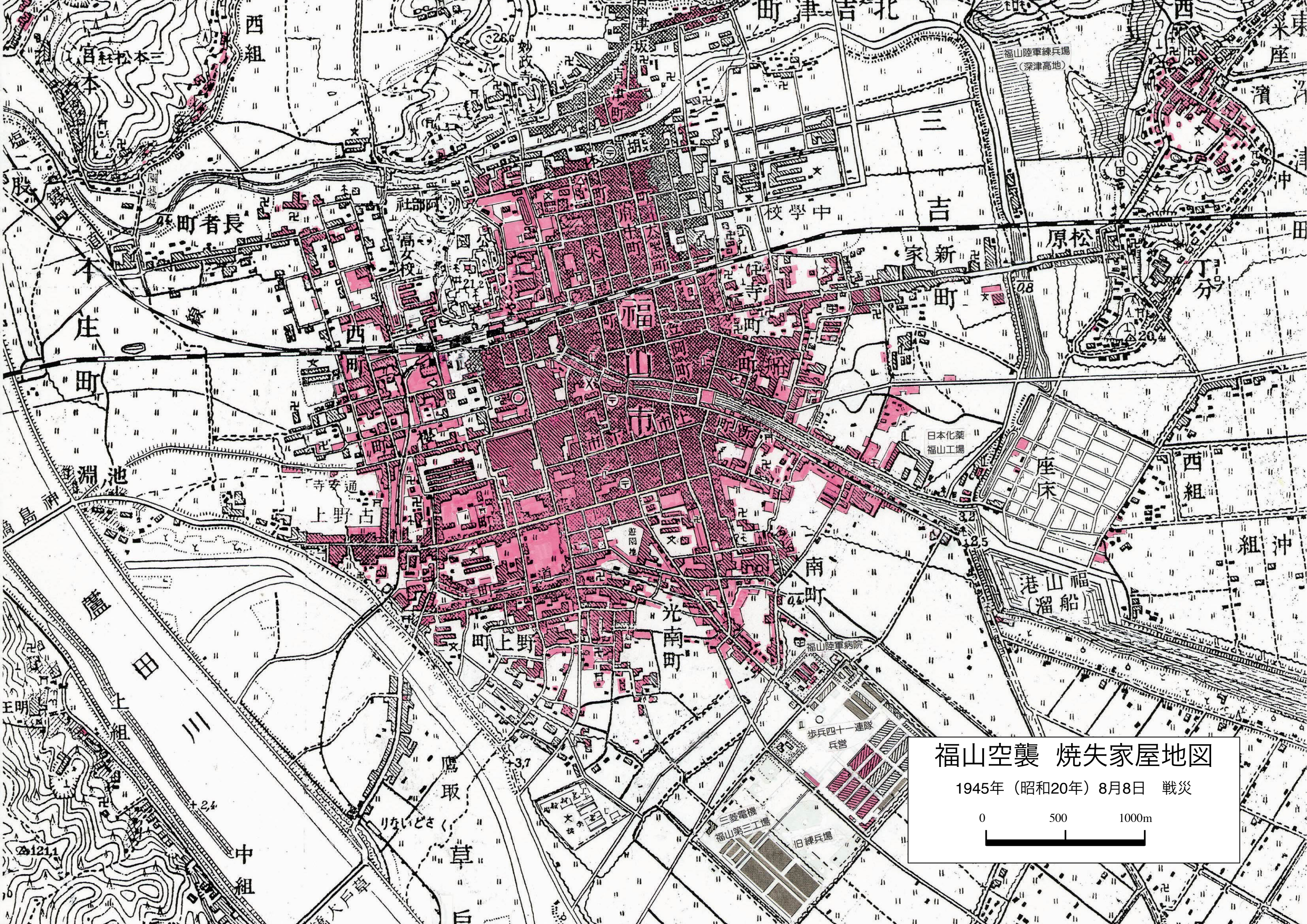
2017年（平成29年）3月発行

編集発行 霞学区まちづくり推進委員会

発行責任 枝広 稔

〒720-0812 福山市霞町三丁目4番13号

電話 084-921-6179 霞公民館



福山空襲 焼失家屋地図
1945年(昭和20年)8月8日 戦災
0 500 1000m